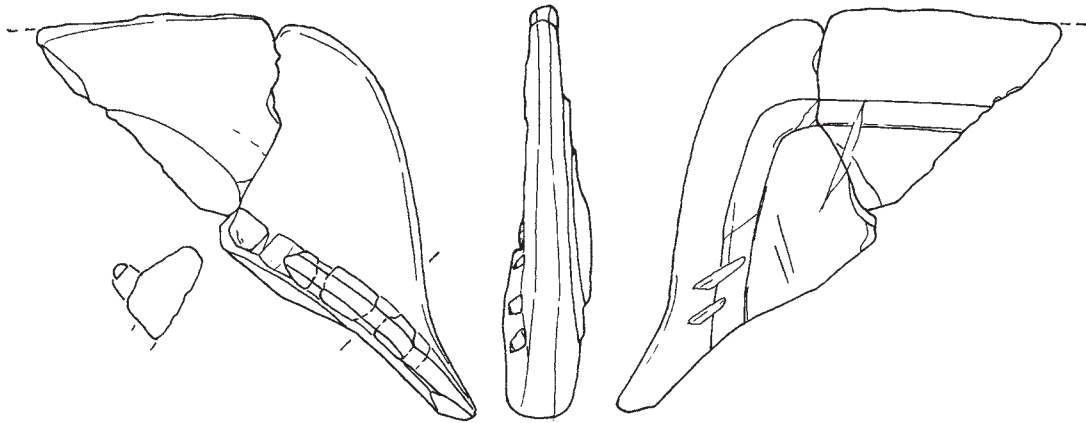


石川県 金沢市

# 畝田・寺中遺跡Ⅸ

－木曳野遺跡群Ⅶ－



平成26年3月  
(2014年)

金 沢 市  
(金沢市埋蔵文化財センター)



石川県 金沢市

# 畝田・寺中遺跡Ⅸ

－木曳野遺跡群Ⅶ－

平成26年3月  
(2014年)

金 沢 市  
(金沢市埋蔵文化財センター)



# 例 言

1. 本書『畝田・寺中遺跡Ⅸ』は、石川県金沢市寺中町、畝田西4丁目、桂町地内に所在する事業名：木曳野遺跡群(寺中B遺跡、桂町南遺跡、畝田・寺中遺跡)の発掘調査報告のうち、平成15年度に実施した畝田・寺中遺跡の調査の一部について報告するものである。
2. 本調査は金沢市木曳野土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴い、平成15年度に金沢市埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。
3. 本報告にかかる現地調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会(当時：会長橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修晃氏、横山方子氏)の指導の下で、出越茂和(文化財保護課担当所長補佐：当時)、向井裕知(文化財保護課主事：当時)が担当した。
4. 本書の執筆・編集は景山和也(文化財保護課主査)が担当した。写真撮影は遺構を発掘調査担当者が行い、遺物を景山が行った。
5. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
  - (1) 方位は全て座標北である。座標は世界測地系(第Ⅶ系)に基づき設定している。
  - (2) 各図の縮尺は、遺物は1/3・1/6、遺構は1/60が主であるが、各図に指示しているとおりである。
  - (3) 遺物実測図の番号は通し番号とし、本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。
  - (4) 遺構名の略号は、SB = 掘立柱建物、SE = 井戸跡、SK = 土坑跡、SD = 溝・川跡、SX = 落ち込み・土器だまり跡、P = ピットなどであるが、略号を用いず大河跡とした遺構がある。
  - (5) 土器については「壺」・「甕」・「高杯」・「器台」などと表記するが、用途を示すのではなく、形態による分類で、「壺形土器」などの略称である。
  - (6) 土器実測図の断面が黒色のものは須恵器を、その他のものは白抜きで示している。また、実測図内外面の目の粗いドットは黒色処理を、細かいものは赤彩処理を、細かな砂目状のものは灯明痕・焼痕を、50%アミ処理のものは漆塗膜を示している。
6. 本調査での出土遺物、記録資料は金沢市埋蔵文化財センターで保管している。

# 畝田・寺中遺跡Ⅸ 目次

第1章 調査箇所と報告の内容 .....	1
第1節 調査箇所と既往の報告内容	
第2節 本書の報告について	
第2章 遺跡の位置と環境 .....	5
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 検出遺構 .....	7
第1節 概要	
第2節 土坑・ピット	
第3節 溝・川	
第4章 遺物 .....	11
第1節 概要	
第2節 土坑・ピット	
第3節 溝・川	
第4節 遺構外	
第5節 補遺	
第5章 樹種同定記録 .....	(株)東都文化財保存研究所 65
第6章 総括 .....	67

写真図版

# 第1章 調査箇所と報告の内容

## 第1節 調査箇所と既往の報告内容

今回報告する畝田・寺中遺跡の発掘調査は、金沢市木曳野土地地区画整理事業に伴い実施されたもので、事業全体では平成14年度から平成16年度にかけて、約13,760㎡の発掘調査が行われている。遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの詳細な経緯は、既刊『木曳野遺跡群Ⅰ』を参照願いたい(金沢市2006)。

本事業による調査箇所は第1図のとおりである。調査時には、補助事業主体の名称として県費分A～C区、道路名称によって主幹線1～5区、支線部などと呼称して調査を実施している。既刊報告書の報告内容との対応については第1表および第2図のとおりである。

木曳野遺跡群Ⅰ(以下Ⅰ、Ⅱ等とする)では、調査に至る経緯や縮尺1/300、1/100遺構平面図版と共に植生や環境復元、木材・石材利用把握のための自然科学分析結果を掲載している。

Ⅱでは、寺中B遺跡と畝田・寺中遺跡内の桂・寺中遺跡として調査を実施した箇所の調査成果を掲載している。

Ⅲでは、桂町南遺跡と畝田・寺中遺跡の県費分A～C区の調査成果を掲載している。また、畝田・寺中遺跡の桂・寺中遺跡部分を除いた、縮尺1/500の畝田・寺中遺跡図版が別紙で用意されている。

Ⅳでは、畝田・寺中遺跡の主幹線1区と2区のSD222、SD303(大河跡)の調査成果を掲載している。

Ⅴでは、畝田・寺中遺跡の主幹線3区の調査成果と1区SD222、包含層、2区P20、SD222、SD240、SD244、SD303、4区大河跡出土の墨書土器を掲載している。

Ⅵでは、畝田・寺中遺跡の主幹線2区における遺構および土器・陶磁器、石製品について報告している。

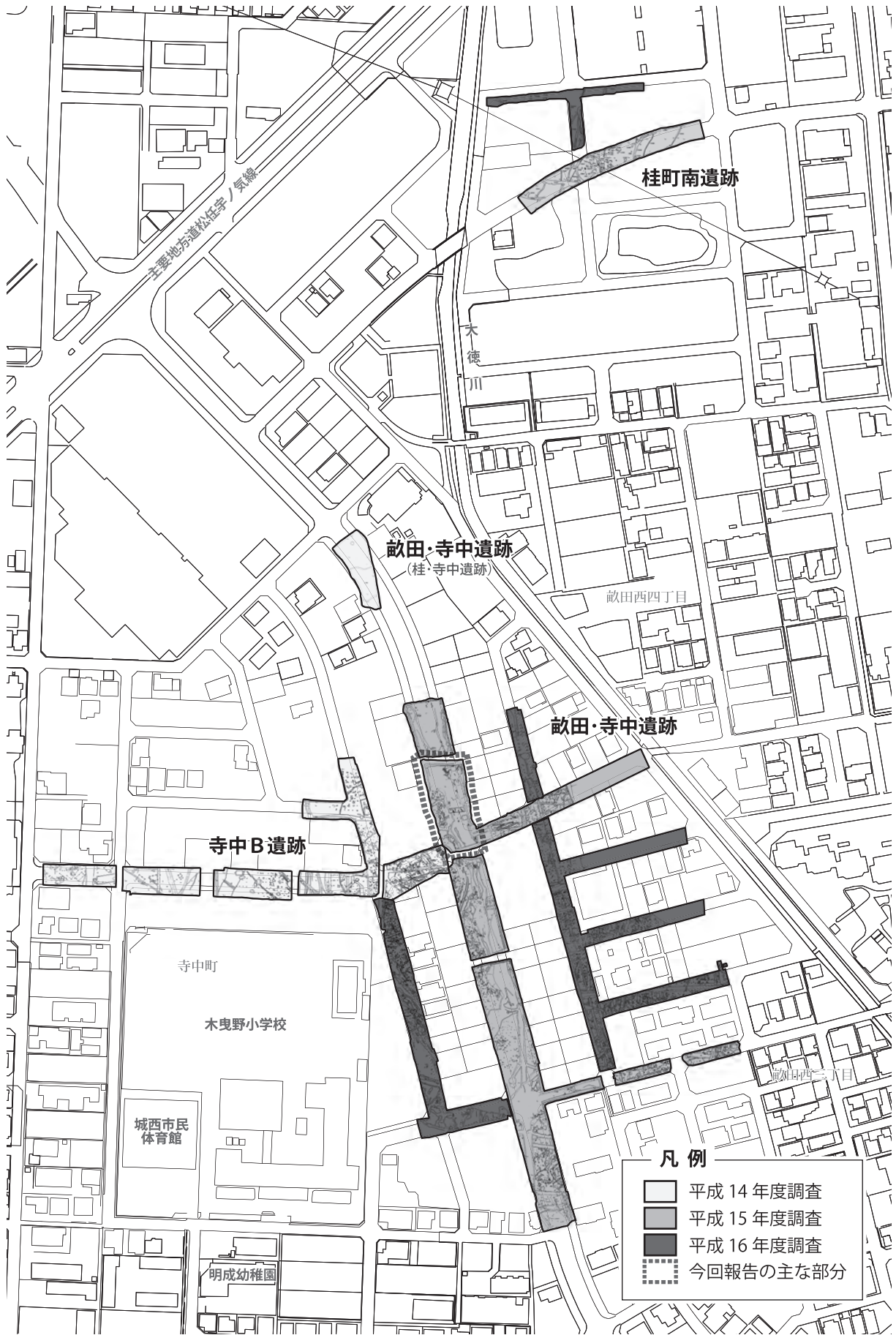
第1表 報告書の内容

紀要No.	書名	内容	発行年
231	木曳野遺跡群Ⅰ 寺中B遺跡Ⅵ 桂町南遺跡Ⅰ 畝田・寺中遺跡Ⅲ	調査に至る経緯・経過、航空測量図版、自然科学分析	2006
239	木曳野遺跡群Ⅱ 寺中B遺跡Ⅶ 畝田・寺中遺跡Ⅳ	寺中B遺跡〔報告完〕 桂・寺中(畝田・寺中)遺跡	2007
249	木曳野遺跡群Ⅲ 桂町南遺跡Ⅱ 畝田・寺中遺跡Ⅴ	桂町南遺跡〔報告完〕 畝田・寺中遺跡(県費A・B・C区)	2008
259	木曳野遺跡群Ⅳ 畝田・寺中遺跡Ⅵ	畝田・寺中遺跡(主幹線1区・2区SD222、SD303)	2010
279	木曳野遺跡群Ⅴ 畝田・寺中遺跡Ⅶ	畝田・寺中遺跡(主幹線3区・2区墨書土器〔1区・4区含〕)	2012
288	木曳野遺跡群Ⅵ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(主幹線2区土器・陶磁器・石製品)	2013
293	木曳野遺跡群Ⅶ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(主幹線4区、主幹線2区木製品・金属製品)	2014

## 第2節 本書の報告について

第1表および第2図のとおり、寺中B遺跡と桂町南遺跡の報告は終了しているが、調査面積が広く、遺物も大量に出土している畝田・寺中遺跡については、その多くが未報告となっている。これまでに県費分A～C区、主幹線1区、同2区、同3区が報告済みとなっている。本書は主幹線4区の遺構および遺物について報告するものであるが、既刊報告書にて掲載漏れのあった遺物、および木曳野遺跡群Ⅶで掲載できなかった主幹線2区出土の木製品と金属製品についても補遺という形で掲載している。

なお、本書刊行後の未報告範囲は主幹線5区、支線部、西工区、東工区、鉦滓の自然科学分析、樹種同定分析となり、順次刊行していく予定である。



第 1 図 調査区位置図 [S = 1/3,000]



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

畝田・寺中遺跡は石川県金沢市畝田町、寺中町地内に所在する。

石川県は日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられ、金沢市は加賀地方の北部に位置しているが、その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを越える山地をかかえる。この山地からは市域を西流する浅野川と犀川が流れ、両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金腐川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

本遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約2km内陸側に位置しており、周辺は海岸線に沿って南北に延びる内灘砂丘の後背湿地を形成している。また、南側を西流する犀川からの分流が本地域を北流し、北側を西流する大野川へと流れ込むことから、ますます湿潤な環境を形成している。



第3図 石川県と金沢市の位置

### 第2節 歴史的環境

畝田・寺中遺跡の周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、縄文時代には後期中葉と晩期後葉の松村A遺跡(59)や晩期の土器・石器が出土する本遺跡があり、近岡遺跡(46)では昭和45年の調査で花粉分析から縄文晩期の農耕について話題になった。弥生時代は戸水B遺跡(20)、戸水C遺跡(47)、藤江C遺跡(21)などで前期からの遺物が確認されており、畝田C遺跡(13)などで遠賀川式土器が出土しているが、中期以降増加する傾向にあり、西念・南新保遺跡(29)のような後期へ繋がる拠点集落も出現する。本遺跡においては中期から遺物が確認されている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、本遺跡の他、周辺では藤江B遺跡(63)で確認できる。当該期の須恵器を多く確認している本遺跡や藤江C遺跡などが中・後期の拠点集落になる可能性があり、本遺跡に関しては弥生時代終末から7世紀代まで継続して確認できる稀有な事例である。

奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、犀川や大野川河口周辺に津湊関連遺跡や官衙・荘園関連遺跡が出現する。本遺跡においても8世紀前半から中頃の大規模集落が確認され、遺構の規模や「津司」墨書土器から金石本町遺跡と一連の港湾関連遺跡と考えられている。また、石川県調査区から遣渤海使が帰国した「天平二年(730)」の記年銘墨書土器が出土しており、その際の饗応に使用された可能性が指摘されている。また、近隣の畝田ナベタ遺跡(17)からは大陸産とされる青銅金箔張の帯金具(巡方)が出土しており、具体的な大陸との交流を物語る遺跡群といえる。鎌倉・室町時代は、本遺跡も含めて当該期の遺跡が広く分布している。本遺跡では、堀で圍繞された方2町×1町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡(44)では銭の出納に関わる付札木簡が出土している。戸水C遺跡は古代以来の津湊関連遺跡と評価されている。

本遺跡は、大野荘湊を含む大野荘内(一時期は富永御厨内か)に所在する。畝田地名の初見は日本霊異記「大野郷畝田村」であり(金沢市1998)、平安時代にはその名が認められる。中世には「宇禰田村」、「宇根田村」、「宇祢田村」、「うね田村」などとみえる。



- |                        |                         |                        |
|------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1 畝田・寺中遺跡 (弥生~中世)      | 32 西念東遺跡 (弥生)           | 63 藤江B遺跡 (弥生~平安)       |
| 2 畝田遺跡 (縄文~平安)         | 33 直江ボンシロ遺跡 (縄文~室町)     | 64 二〇六丁B遺跡 (弥生・古墳)     |
| 3 畝田大徳川遺跡 (縄文~室町)      | 34 大友F遺跡 (弥生~平安)        | 65 二〇六丁A遺跡 (弥生・古墳)     |
| 4 桂町南遺跡 (弥生~中世)        | 35 大友A遺跡 (古墳・奈良・平安)     | 66 西念ネジタ遺跡 (弥生・古墳)     |
| 5 無量寺B遺跡 (古墳)          | 36 大友D遺跡 (弥生・平安)        | 67 西念クボ遺跡 (縄文・古墳)      |
| 6 無量寺遺跡 (古墳・中世)        | 37 直江ニシヤ遺跡 (古墳~室町)      | 68 二〇シミズ遺跡 (弥生・古墳)     |
| 7 桂遺跡 (弥生・古墳・中世)       | 38 大友E遺跡 (弥生~室町)        | 69 二〇町遺跡 (弥生・古墳)       |
| 8 寺中B遺跡 (縄文~平安)        | 39 近岡カンタンボ遺跡 (弥生~奈良)    | 70 藤江A遺跡 (奈良・平安)       |
| 9 寺中遺跡 (弥生)            | 40 直江西遺跡 (弥生~古墳)        | 71 北町遺跡 (縄文)           |
| 10 金石本町遺跡 (弥生~平安)      | 41 直江中遺跡 (縄文~室町)        | 72 御館前遺跡 (不詳)          |
| 11 寺中御台場跡 (江戸)         | 42 直江北遺跡 (縄文~室町)        | 73 桜田・示野中遺跡 (弥生・平安)    |
| 12 畝田B遺跡 (弥生~平安)       | 43 近岡テラダ遺跡 (弥生・平安~室町)   | 74 出雲じいさま遺跡 (古墳~室町)    |
| 13 畝田C遺跡 (縄文~平安)       | 44 南新保北遺跡 (古墳~中世)       | 75 薬師堂遺跡 (弥生~平安)       |
| 14 無量寺D遺跡 (弥生~平安)      | 45 近岡ナカノマ遺跡 (弥生・奈良・平安)  | 76 若宮遺跡 (室町)           |
| 15 無量寺C遺跡 (奈良・平安)      | 46 近岡遺跡 (縄文~室町)         | 77 犀川鉄橋遺跡 (縄文~古墳)      |
| 16 畝田・無量寺遺跡 (弥生・奈良・平安) | 47 戸水C遺跡 (縄文~中世)        | 78 玉鉾B遺跡 (奈良・平安~江戸)    |
| 17 畝田ナベタ遺跡 (奈良・平安)     | 48 無量寺金沢港遺跡 (縄文~古墳)     | 79 佐奇森遺跡 (弥生・平安~江戸)    |
| 18 御館前遺跡 (不明)          | 49 金石北遺跡 (不詳)           | 80 専光寺染色団地遺跡 (古墳)      |
| 19 戸水大西遺跡 (奈良・平安)      | 50 普正寺番屋砂丘遺跡 (縄文・奈良・平安) | 81 専光寺養魚場遺跡 (古墳~平安)    |
| 20 戸水B遺跡 (弥生・平安)       | 51 普正寺遺跡 (鎌倉~室町)        | 82 赤土遺跡 (弥生)           |
| 21 藤江C遺跡 (弥生~室町)       | 52 普正寺高島遺跡 (古墳・鎌倉)      | 83 吉穂専光寺跡 (室町)         |
| 22 戸水ホコダ遺跡 (弥生~平安)     | 53 寺中町南遺跡 (古墳)          | 84 豊穂遺跡 (奈良~室町)        |
| 23 大友西遺跡 (弥生・古墳・平安)    | 54 観音堂B遺跡 (弥生~室町)       | 85 稚日野遺跡 (縄文・古墳)       |
| 24 戸水・大友遺跡 (奈良・平安)     | 55 観音堂遺跡 (弥生)           | 86 袋島・北塚C遺跡 (古墳~平安)    |
| 25 南新保E遺跡 (弥生~鎌倉)      | 56 松村西の城遺跡 (古墳・平安)      | 87 北塚B遺跡 (平安)          |
| 26 南新保C遺跡 (古墳前期)       | 57 松村平田遺跡 (弥生中期)        | 88 北塚A遺跡 (縄文・弥生・平安~室町) |
| 27 南新保三枚田遺跡 (弥生~平安)    | 58 松村寺の前遺跡 (室町)         | 89 北塚古墳群 (古墳)          |
| 28 ニツ屋町遺跡 (弥生・平安)      | 59 松村A遺跡 (縄文・古墳・鎌倉・室町)  | 90 古府カタガリ遺跡 (弥生・平安)    |
| 29 西念・南新保遺跡 (弥生~平安)    | 60 松村とのまえ遺跡 (弥生中期)      | 91 古府クビビ遺跡 (弥生~平安)     |
| 30 南新保D遺跡 (弥生~平安)      | 61 松村B遺跡 (縄文・弥生・江戸)     | 92 古府B遺跡 (不明)          |
| 31 南新保B遺跡 (弥生)         | 62 松村高見遺跡 (弥生中後期)       | 93 高島遺跡 (弥生・古墳)        |

第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図〔S=1/30,000〕

## 第3章 検出遺構

### 第1節 概要

本遺跡では、掘立柱建物、竪穴系建物、布柱建物、柵列、井戸、土坑、区画溝、川跡などを検出しているが、本書で対象としている主幹線4区(以下、調査区)では土坑、ピット、溝、川を検出しており、主に古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代のものがみつまっている。

遺構平面図については、『木曳野遺跡群Ⅰ』で各図を掲載したために本書では未掲載だが、第5図に今回報告対象となる調査区の遺構全体図と各遺構名を示した。併せてグリッド配置図を示したので参考にさせていただきたい。また、第2図に木曳野遺跡群の全体図と建物や井戸、溝など主な遺構名を示したものを掲載した。『木曳野遺跡群Ⅵ』に掲載したものの誤記等を訂正したものである。『木曳野遺跡群Ⅱ』～『木曳野遺跡群Ⅴ』については、報告対象とする個別遺構が遺跡の中でどこに位置するかが図示されていないので、本図を参照いただきたい。

### 第2節 土坑・ピット

**SK200 (第6図)** 調査区中央西側に位置する土坑である。掘方は隅丸方形を呈し、SD203に切られる。長軸約1.6m、短軸約1.4m、深さ約0.4mで、古墳時代前期の土器(1,2)が出土している。

**SK201 (第6図)** 調査区中央東側、大河跡と重複する形で検出した円形土坑である。直径約1.0m、深さ約0.2mを測る。遺物は出土していない。

**P200 (第6図)** 調査区中央西側に位置する小穴である。掘方は南北に軸をとる楕円形状を呈し、長径約0.7m、短径約0.4m、検出面からの深さ約0.3mで、古墳時代前期に属するくの字甕(3)が出土している。

### 第3節 溝・川

**SD200 (第6図)** 調査区中央西側に位置する、幅約1.5m、検出面からの深さ約0.2～0.3mを測る、北東-南西に軸をとる溝である。検出延長約8.0m、東側は大河跡と重複し、西側は調査区外へと延伸する。

**SD201 (第6図)** SD200の南側に位置する溝状の落ち込みで、軸を南北方向にとる。幅約1.2m、深さは0.1mに満たない。SD200との切り合いは不明、検出延長約3.3m、南側で2条に分かれる。

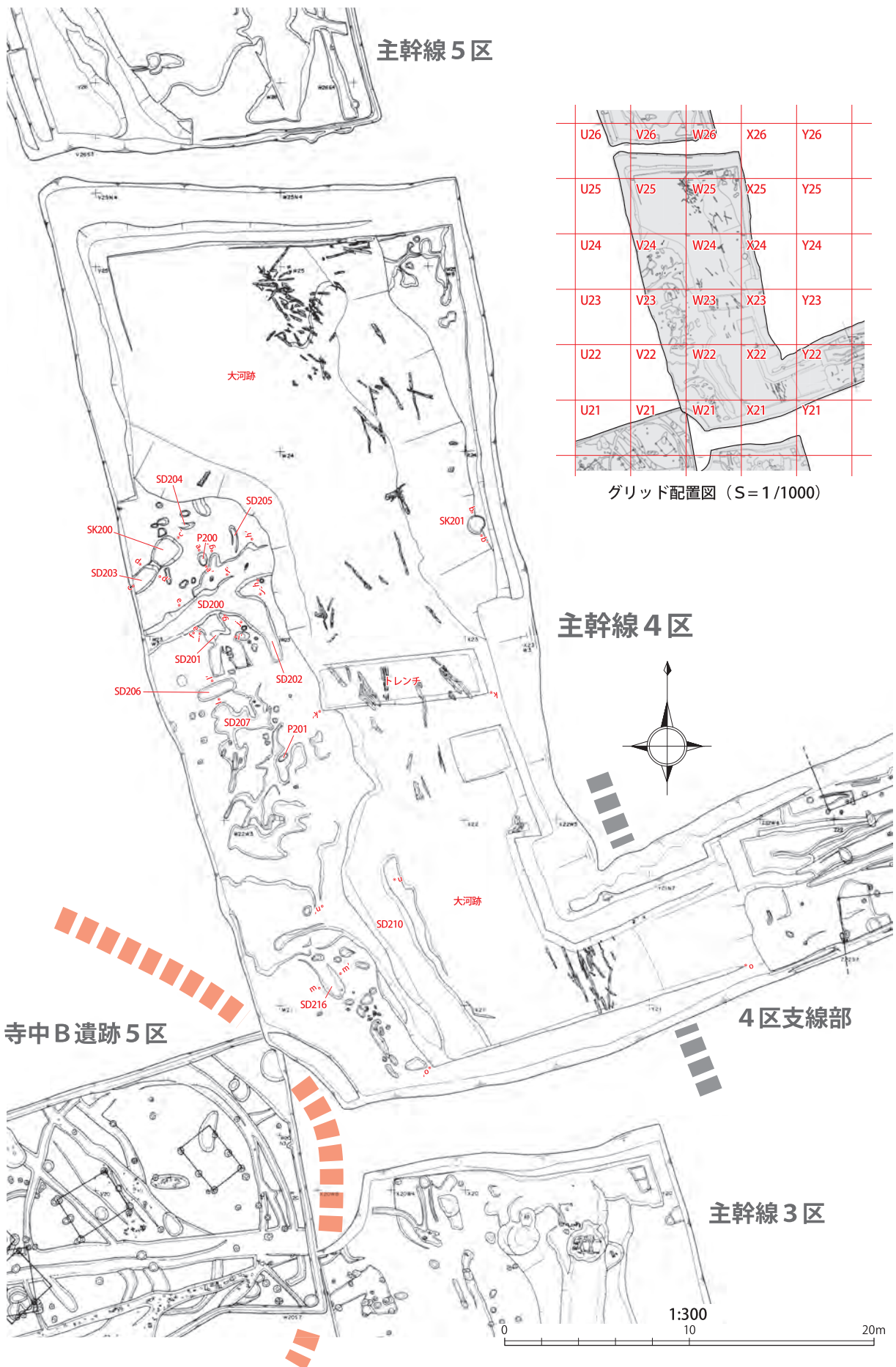
**SD202 (第6図)** 軸を南北にとり、SD202近辺で合流するかのように屈曲する溝である。幅は約1.5m～0.6mとばらつきがあり、深さは約0.1mに満たない。検出延長は約4.3mである。

**SD206 (第7図)** SD200の南側に位置する浅い落ち込みである。軸を東西にとり、検出延長約2.2m、幅約0.8m、深さ約0.1m前後を測る。

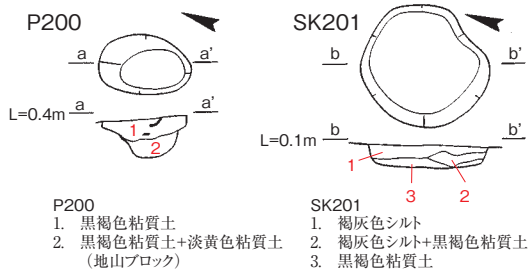
**SD210 (第7図)** 調査区南西側、大河跡西岸と重複する形で検出した軸を南北方向にとる溝で、主幹線3区のSD222と同一の溝である可能性が高い。検出延長約15.0m、幅約3.0m、検出面からの深さ約0.6m～0.9mを測る。11世紀～13世紀頃の遺物が出土している。詳細は既刊書(畝田・寺中遺跡Ⅴ)に詳しい。

**SD216 (第7図)** 調査区南西側で検出した溝状の落ち込みで、検出延長は約2.0m、幅約1.0m深さは約0.1m前後である。軸は北北西-南南東、北側は浅くなり消失する。

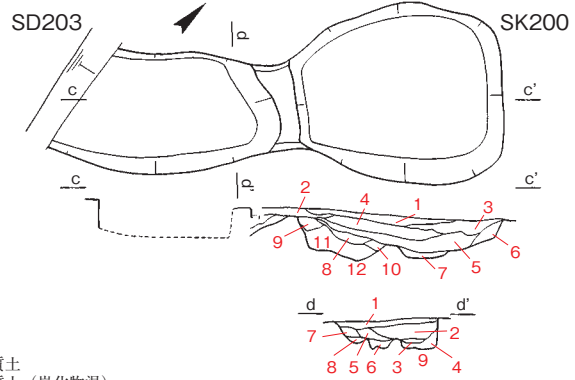
**大河跡 (第6・7図)** 調査区東半を占める大規模河川である。主幹線1区SD303、同2区SD240・SD244、同3区SD201と同じ川と考えられる。詳細は既刊書(畝田・寺中遺跡Ⅴ・Ⅵ)に詳しい。土層確認用にトレンチを設定し、併せて調査区南壁でも土層断面図を作成したが、作図途中の崩落によって土色の一部に不備があることをお詫び申し上げたい。



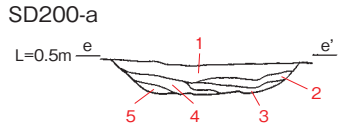
第5図 遺構全体図 (主幹線4区) [S = 1/300]



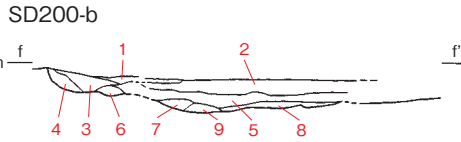
- P200  
1. 黒褐色粘質土  
2. 黒褐色粘質土+淡黄色粘質土 (地山ブロック)
- SK201  
1. 褐色シルト  
2. 褐色シルト+黒褐色粘質土  
3. 黒褐色粘質土



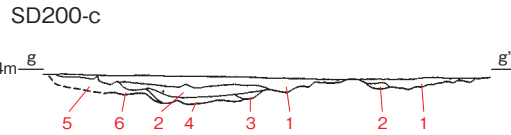
- SK200  
1. 黒灰色粘質土  
2. 黒褐色粘質土 (炭化物混)  
3. 黒灰色粘質土 (炭化物混、1より黒い)  
4. 黒灰色粘質土 (炭化物混、3より灰色強い、1より黒い)  
5. 黒灰色シルト  
6. 黒灰色粘質土+灰色粘質土  
7. 暗灰色シルト+灰色シルト  
8. 灰褐色粘質土  
9. 暗灰色粘質土 (黒灰色粘質土ブロック混)  
10. 黒褐色粘質土 (2より褐色強い)  
11. 黒色シルト  
12. 青灰色シルト (地山)
- SD203  
1. 黒褐色粘質土 (炭化物混)  
2. 黒灰色粘質土 (炭化物混)  
3. 黒灰色粘質土+褐色粘質土  
4. 青灰色シルト  
5. 黒色粘質土  
6. 暗灰褐色粘質土 (黒灰色粘質土ブロック混)  
7. 暗灰色粘質土 (灰色粘質土ブロック混)  
8. 暗青灰色粘質土  
9. 青灰色砂 (地山)



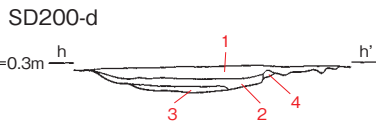
- SD200-a  
1. 暗灰色粘質土 (炭化物混)  
2. 暗褐色粘質土 (炭化物混)  
3. 暗褐色粘質土+暗青灰色粘質土 (炭化物混)  
4. 暗灰色粘質土+青灰色シルト (青灰色砂混)  
5. 暗灰色粘質土+青灰色シルト (4より青灰色シルトの割合高い)



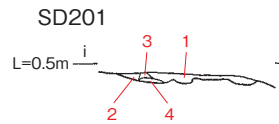
- SD200-b  
1. 褐色砂質土  
2. 暗灰色粘質土  
3. 暗褐色粘質土 (炭化物混)  
4. 暗褐色粘質土+青灰色砂  
5. 暗灰褐色粘質土 (炭化物混、青灰色砂ブロック混)  
6. 青灰色砂+暗灰色粘質土  
7. 暗灰色シルト+青灰色シルト  
8. 暗灰色シルト+青灰色砂  
9. 青灰色シルト+暗灰色シルト (青灰色強い)



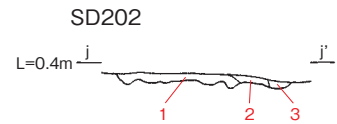
- SD200-c  
1. 暗灰色粘質土 (炭化物混)  
2. 暗灰褐色粘質土 (炭化物混、青灰色砂ブロック混)  
3. 暗灰褐色粘質土 (炭化物混、青灰色砂ブロック混、2より灰色強い)  
4. 暗灰色粘質土 (青灰色砂ブロック混、1より灰色強い)  
5. 青灰色砂+暗灰色粘質土 (炭化物混)  
6. 暗灰色シルト



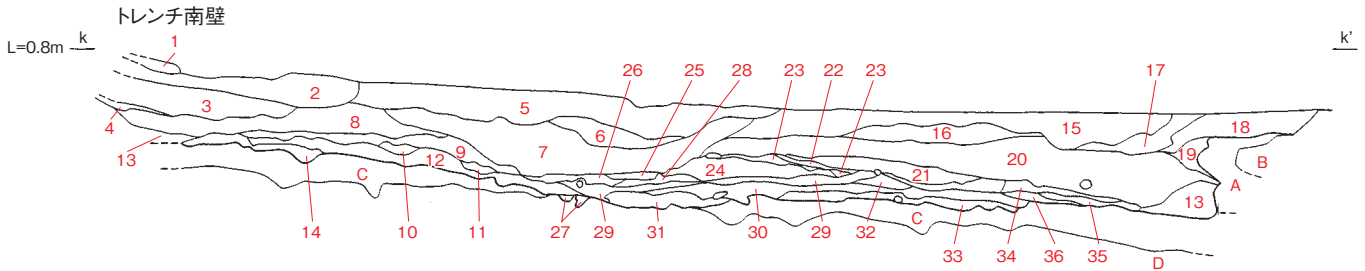
- SD200-d  
1. 暗灰色粘質土 (炭化物混)  
2. 暗灰褐色粘質土 (炭化物混、青灰色砂ブロック混)  
3. 暗灰色粘質土 (青灰色砂ブロック混、1より灰色強い)  
4. 暗灰褐色粘質土+青灰色シルト (炭化物混、青灰色砂ブロック混)



- SD201  
1. 暗灰色粘質土 (炭化物混)  
2. 暗灰褐色粘質土  
3. 暗灰褐色粘質土 (2より褐色強い)  
4. 暗灰色粘質土+青灰色シルト



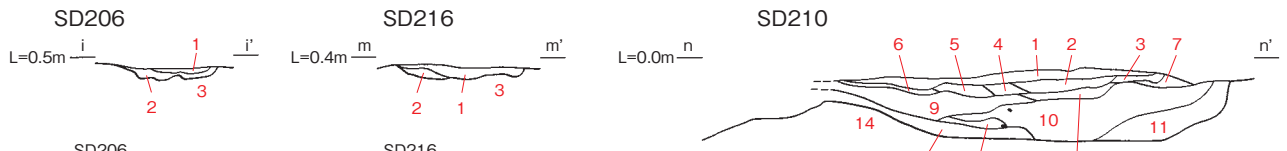
- SD202  
1. 暗灰色粘質土 (炭化物混)  
2. 暗灰色粘質土 (炭化物混、青灰色砂ブロック混、1より灰色強い)  
3. 暗灰色粘質土 (炭化物混、1より暗い)



- トレンチ南壁  
1. 橙褐色中粘質土 (灰色シルト混)  
2. 暗青灰色シルト (有機物混)  
3. 灰褐色シルト (有機物混)  
4. 暗褐色シルト+暗褐色中粘質土 (有機物混)  
5. 暗褐色粘質土 (炭化物、有機物混)  
6. 暗褐色砂質土 (炭化物、有機物混)  
7. 暗灰褐色シルト (炭化物、有機物混、灰色強い)  
8. 灰褐色シルト (炭化物、有機物混、灰色強い)  
9. 灰褐色シルト+灰褐色中粒砂 (炭化物、有機物混、灰色強い)  
10. 灰褐色大粒砂 (灰褐色シルト混)  
11. 青灰色中粒砂 (灰褐色シルト混)  
12. 暗褐色シルト (灰色砂、炭化物、有機物混)  
13. 灰褐色大粒砂  
14. 青灰色砂 (灰褐色シルト、暗褐色シルト混)  
15. 暗灰色シルト (炭化物、有機物混、保水少)  
16. 明褐色砂 (暗褐色シルトブロック混)  
17. 明褐色砂+暗褐色シルト (上位は後者が主体)  
18. 暗灰色シルト (炭化物、有機物混、暗め)  
19. 青灰色砂 (灰褐色シルト、暗灰色シルト混)  
20. 暗灰褐色シルト (炭化物、有機物混、灰色強い、保水多)  
21. 灰褐色中粒砂  
22. 灰褐色シルト (灰色強い)  
23. 灰褐色中粒砂  
24. 暗灰色砂+灰褐色シルト (炭化物、有機物混)  
25. 暗灰色中粒砂+暗褐色シルト (炭化物、有機物混)  
26. 暗灰褐色粘質土 (灰褐色強い)  
27. 青灰色大粒砂 (黒灰色シルトブロック混)  
28. 灰褐色シルト (有機物多混、保水多)  
29. 灰褐色シルト (有機物混)  
30. 青灰色砂+暗褐色シルト (有機物混)  
31. 暗褐色シルト (有機物混、褐色強い)  
32. 青灰色中粒砂 (シルト気味)  
33. 灰褐色シルト (有機物混、褐色強い)  
34. 青灰色砂+灰褐色シルト  
35. 灰褐色シルト (青灰色砂混)  
36. 青灰色砂 (やや暗い)  
A. 黒灰色シルト+青灰色シルト (保水少)  
B. 青灰色シルト (砂質)  
C. 黒灰色シルト  
D. 青灰色シルト



第6図 P200・SK200・SK201・SD200・SD201・SD202・SD203・トレンチ [S = 1/60]

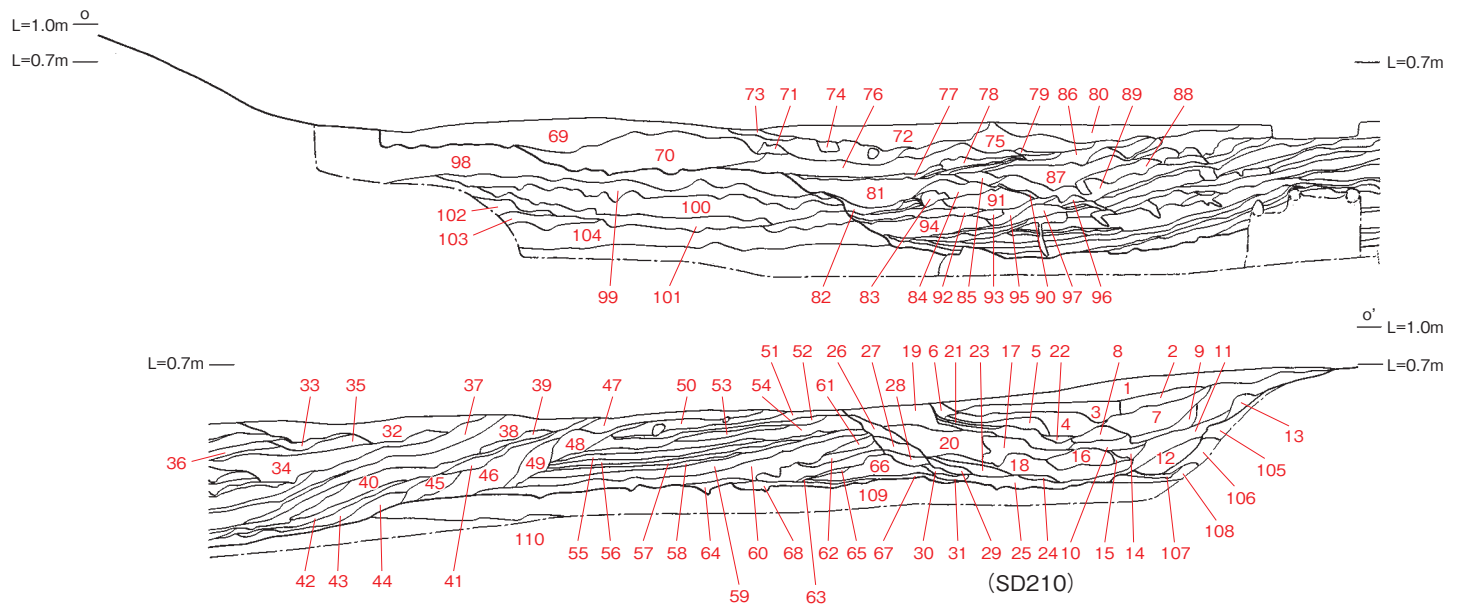


- SD206
1. 褐色砂質土
  2. 暗灰褐色粘質土
  3. 青灰色シルト (地山)

- SD216
1. 暗灰褐色粘質土
  2. 暗灰褐色粘質土+灰褐色砂
  3. 青灰色砂 (地山)

- SD210
1. 暗褐色シルト
  2. 暗褐色シルト (貝殻層)
  3. 暗褐色シルト (貝殻混、粘性強い)
  4. 暗褐色シルト (貝殻混、暗め)
  5. 2と類似
  6. 暗褐色シルト (砂質、貝殻少量混)
  7. 暗褐色粘質土
  8. 暗灰褐色シルト (貝殻、有機物混)
  9. 暗褐色シルト (有機物混、褐色強い)
  10. 暗灰色粘質土+暗灰色砂 (有機物混)
  11. 暗灰色粘質土 (有機物混、暗い)
  12. 暗褐色シルト (有機物混、粘性)
  13. 暗灰色砂+暗灰褐色シルト
  14. 青灰色砂、青灰色シルト (地山)

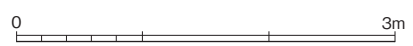
大河跡 南壁



- 大河跡 南壁
1. 黒灰色粘質土
  2. 黒色粘質土
  3. 暗灰粘質土
  4. 暗灰粘質土 (3より灰色強い)
  5. 暗灰褐色粘質土
  6. 暗灰褐色粘質土+暗青灰色砂
  7. 暗灰褐色粘質土
  8. 暗灰色シルト+暗青灰色中粒砂
  9. 暗灰褐色粘質土 (植物遺体混)
  10. 暗青灰色シルト (植物遺体混)
  11. 黒灰色シルト (植物混)
  12. 黒色シルト+暗青灰色シルト (有機物多混)
  13. 黒灰色粘質土 (青灰色砂ブロック混)
  14. 黒灰色シルト (有機物混)
  15. 暗青灰色シルト
  16. 貝層 (塚)
  17. 暗青灰褐色シルト+暗青灰色砂 (有機物混)
  18. 暗灰色シルト (有機物混)
  19. 暗灰色粘質土
  20. 暗灰色シルト (有機物混)
  21. 暗褐色シルト (有機物混)
  22. 暗褐色シルト+暗青灰色砂 (有機物混)
  23. 暗青灰色シルト (有機物混)
  24. 暗青灰色粘質土
  25. 黒灰色粘質土+暗青灰色シルト (有機物混、貝混)
  26. 暗青灰色砂、シルト (有機物混)
  27. 暗青灰色砂+暗褐色シルト (有機物混)
  28. 27より砂の割合高い (有機物混)
  29. 暗灰褐色粘質土 (有機物混)
  30. 暗青灰色シルト (有機物混)
  31. 暗灰色シルト (有機物混)
  32. 暗灰褐色粘質土 (炭化物、灰色シルト混)
  33. 暗灰色砂+暗灰色シルト (有機物混)
  34. 灰褐色シルト (有機物混)
  35. 暗青灰色砂 (有機物混)
  36. 暗灰色シルト+灰白色シルト
  37. 暗灰褐色シルト (有機物混、暗い)
  38. 暗灰色シルト (有機物混、37より暗い)

39. 暗青灰色砂+暗青灰色シルト
40. 灰褐色シルト (有機物混)
41. 灰褐色シルト+青灰色砂 (有機物混)
42. 暗青灰色中粒砂
43. 暗青灰色中粒砂+黄褐色中粒砂 (有機物混)
44. 暗青灰色中砂 (有機物混)
45. 暗青灰色中粒砂+灰褐色シルト (有機物混)
46. 暗灰褐色シルト (暗青灰色砂混、有機物混)
47. 暗灰褐色シルト (有機物混)
48. 暗灰色シルト (有機物多混)
49. 暗青灰色砂 (有機物多混)
50. 黄灰褐色砂 (有機物混)
51. 暗褐色シルト (有機物混)
52. 暗青灰色砂+暗青灰色シルト (有機物混)
53. 暗青灰色砂 (有機物多混)
54. 灰褐色シルト (有機物多混)
55. 暗青灰色砂 (有機物多混)
56. 灰褐色シルト (有機物多混)
57. 暗青灰色砂 (有機物多混)
58. 暗青灰色砂 (有機物多混、57より暗い)
59. 灰褐色粘質土 (有機物混)
60. 暗青灰色砂 (有機物混、暗褐色シルト混)
61. 暗青灰色砂+青灰色砂 (有機物混)
62. 濃青灰色中粒砂 (有機物混)
63. 暗青灰色砂+灰褐色シルト (有機物混)
64. 濃青灰色砂+青灰色砂+暗褐色シルト (有機物混、礫混)
65. 濃青灰色中粒砂
66. 青灰色砂 (褐色シルト混、有機物混)
67. 青灰褐色シルト
68. 暗褐色シルト
69. 暗灰色シルト (有機物混、暗黄褐色砂混)
70. 灰褐色シルト (有機物混、暗黄褐色砂混)
71. 青灰褐色シルト (有機物混)
72. 暗灰色シルト+黄褐色砂 (有機物混)
73. 青灰褐色シルト (有機物混)
74. 灰褐色シルト+黄褐色砂 (有機物混)
75. 暗青灰褐色シルト (有機物混)
76. 暗青灰褐色シルト (有機物混、75より明るい)

77. 暗青灰褐色シルト (有機物混、75より褐色強い)
78. 黒褐色シルト (有機物層)
79. 76に類似
80. 暗灰色粘質土
81. 暗灰色シルト (有機物混)
82. 暗青灰色シルト
83. 青灰色シルト+褐色シルト (有機物層)
84. 暗灰色シルト (有機物混)
85. 暗灰色シルト (有機物混、82より明るい)
86. 暗灰色シルト (有機物混、84より明るい)
87. 暗灰色シルト (有機物混、85より明るい)
88. 濃青灰色砂+黄褐色砂 (有機物混)
89. 暗灰色シルト (87より有機物多混)
90. 褐色中粒砂
91. 灰褐色シルト
92. 暗灰色シルト
93. 暗灰色シルト (92より暗い)
94. 暗灰色シルト (93より灰色強い)
95. 暗灰色シルト (94より灰色強い)
96. 灰褐色シルト
97. 暗灰色シルト (95より灰色強い)
98. 濃青灰色シルト (砂質、有機物少量混)
99. 灰褐色シルト (灰白色シルトブロック混)
100. 灰褐色シルト (灰白色シルトブロック混、99より青灰色強い)
101. 青灰褐色シルト (黄灰色砂ブロック混)
102. 暗青灰色シルト (黄灰色砂ブロック混)
103. 暗灰色粘質土
104. 青灰色シルト
105. 青灰色砂
106. 黒色シルト+青灰色砂
107. 青灰色シルト
108. 黒灰色シルト
109. 黒灰色シルト (108より灰色強い)
110. 青灰色シルト (地山)



第7図 SD206・SD210・SD216・大河跡 [S = 1/60]

## 第4章 遺物

### 第1節 概要

本書で報告する出土遺物の大半は古墳時代前期～中期前葉のものであり、主に大河跡から出土している。第2節から遺構毎に報告する。大河跡出土遺物の図版は基本的にグリッド別・器種別となっており、説明については番号順に行うのでご了承願いたい。なお、グリッド配置については第5図を、遺物が属するグリッド、個々の遺物の分量や調整等は第3表～第5表を参照願いたい。同表遺構欄の「●区」は「主幹線●区」を示している。遺物取上時に錯誤のあったものは訂正して掲載しているのでご了承願いたい(Y25N4→W25)。また、文中の分類や年代観については、巻末の参考文献に記した各論考を参照願いたい。

### 第2節 土坑・ピット

SK200(第8図1・2) 1は土師器の甕で、有段口縁の内面に指頭圧痕、外面に擬凹線7条が確認できる。2は高杯で、杯部が屈曲して広がり、脚裾部が強く屈曲外反する。田嶋分類(田嶋1986)のH類に相当する。P200(第8図3) 3は口縁端部が肥厚するいわゆる布留甕であり、古墳時代前期の範疇である。

### 第3節 溝・川

4区 SD210(第8図4～31、第29図400、第30図438～440、第32図451～464) 4・5は土師器の蓋で、双方ミガキ調整が施される。6は土師器の小壺、7・8は甕である。いずれも古墳時代前期後葉のものであるが、この遺構は大河跡と重複して検出されており、これら遺物は混入品と考えられる。

9・10は須恵器の無台坏、11は灰釉陶器の碗、12は珠洲焼の鉢底部である。13は土師器の壺か。底部に糸切り痕が確認できる。14～24は土師器皿である。14・16・18・19・21・23・24がロクロ土師器皿、その他は非ロクロである。24は25とあわせて椀である可能性がある。26・27は内面黒色処理の施された台付椀で、26は高台外面に、27は底部に工具痕が顕著である。28・29は白磁碗で、それぞれ太宰府分類(太宰府市教育委員会2000)の白磁碗Ⅱ-4a類、白磁碗Ⅱ-1類であろうか。11世紀後半～12世紀代のものと考えられる。30・31は珠洲焼の鉢で、口縁部の形態から珠洲焼編年(吉岡1994)Ⅰ期の製品と考えられる。12世紀後半のものと考えられる。

石製品には400の撥形打製石斧があるが、混入品とみられる。金属製品では438・439の鉄製刀子、双方茎に目釘穴が確認できる。440は不明鉄製品で、飾り金具の可能性もある。451～464は木製品である。457・458は他の材との結束装置が認められ、雑具部材と考えられる。461・462は円形板で、桶か曲物の底板であろう。463は篋状に薄く加工されている。464は火鑽白で6箇所炭化した使用痕が認められる。

4区 大河跡(第9図～第28図、第29図401～419、第30図420～437・441～444、第31図、第32図465～490、第33図～第35図) 32～42は土師器甕である。32は頸部で緩やかに外傾し、先端に向かって内湾する口縁部を持つ。33の口縁部は直線的に立ち上がり端部に面取りがみられる。34・35・37の口縁は緩やかに外湾する。36・38の口縁は直線的に外傾する。39は山陰系の大形甕で口縁下端に突帯ともいえる明瞭な稜が確認できる。40～42は小形の甕である。43～46は壺で、43は長めの頸部をもち、口縁部に6条の擬凹線が施される。44は有段の口縁を有する。45は外反する口縁部先端に内屈する口縁帯が付されている特徴的なもので、弥生時代中期前半のものと考えられる。条痕が施され、口縁外面に浮文・刺突文、口縁内面には波状文が確認できる。46は外反して延びる口縁部先端に断面三角形の口縁帯を作り出し、そこに棒状浮文が2条確認され、全面に赤彩処理が施されている。田嶋分類のF類に相当する。47は壺の体部である。48・49はミニチュアの土器で、48は甕形、49は壺形である。50・

51は手捏土器である。52～54は小型壺で、田嶋分類F類に該当する。55は装飾器台で、内面に一部赤彩が残る。56は外面に赤彩の施された小型器台の脚部か。57～61は高杯で、57の杯部は緩く内湾する。58～61は田嶋分類のH類に相当しようか。62は有孔鉢の底部で、内外面ハケ調整が施されている。63～66は土師器鉢で、いずれも内面は丁寧にミガキ調整が施される。67～77は土錘である。78は鞆羽口で、滓が付着している。

79～92は土師器甕で、79～86は口縁部が外反する甕、87～88は口縁端部が肥厚するいわゆる布留甕で、古墳時代前期の範疇である。91は有段口縁で擬凹線が施されている。92は小型の甕で、口縁外面に弱い段をもつ。93～100は土師器壺である。93～95は頸部から外反する長めの口縁を有する。96は口縁部を欠損する壺の体部だが、頸径が小さく、長頸壺と考えられる。97は田嶋分類のF類に相当する壺の口縁部で、棒状浮文が2条確認できる。98・99は壺の頸部で1条の突帯を巡らせ、突帯上にキザミを施している。100は大形壺で、口縁部は段を持ち直線的に立ち上がり、口縁外面に棒状浮文が2条確認できる。田嶋分類H類に相当する。101は肩部にキザミ突帯を巡らせる小型の壺であろうか。102は外面に黒漆を施す。101・102ともに精緻な作りではないが、装飾的要素が強く、特筆される。103は杯状の土師器であるが、小型の高杯であろう。104は小型高杯の杯部、105は小型の高杯ないし器台の脚で、ミガキ調整が施されている。106～124は土師器高杯の杯部で、106～112・114・115は杯部が屈曲して広がる。113は碗形の杯底部と外反する口縁部をもつ。田嶋分類のB1類に分類される。116は大きな杯底部から屈曲外反する口縁部をもち、弥生時代後期のものと考えられる。117～123は土師器高杯の脚部である。117は緩やかに広がる裾部をもち、透穴が3箇所確認できる。118～123はいずれも脚裾部が強く屈曲外反しており、田嶋分類のH類に相当する。古墳時代前期中葉～後葉のものである。124は碗形の杯部と透穴を有する八の字状の脚が付く。田嶋分類のG類である。125は台付鉢か。鋭く開く裾部の先端は面をとる。126～135は器台である。126・127は小型器台で、碗状の受部と八の字状に開く脚に透穴が確認できる。128・129は脚部で、裾部に段を有し透穴と装飾を加え、丁寧なミガキ調整が施される。130は縦位に2孔1対の透穴を設ける脚部である。131は赤彩が施される有段の脚部である。132は外反的に開く深めの受部を持ち、脚は透穴をもち緩やかに開く。古墳時代前期中葉か。133は装飾器台の受部下端、134は鼓形器台である。135は大形の器台で、裾部に透穴と4条の沈線による加飾が確認できる。136は壺か鉢の底部であろう。137は小振りで碗状の体部に直線的に開く口縁部をもつ鉢である。138・139は鉢で、くの字状に屈曲し内湾する口縁部をもつ。139は平底である。140～143は蓋である。143は赤彩・加飾の状態から蓋としたが、鉢であるかもしれない。144・145はミニチュアの土器で、144は甕形、145は鉢形で、双方精緻な作りである。146は小型の丸底壺、147・148は手捏土器である。149・150は有孔鉢の底部で、151は小型の鉢か高杯の杯部であろう。152～157は碗で、154は内湾する体部と外反する口縁部をもつが、他のものは内湾する口縁部を端部で丸くおさめる。いずれもミガキ調整が施される。158・159はロクロ土師器の皿である。160は内面黒色処理の施される有台椀、161は柱状高台をもつ椀であろう。162・163はロクロ土師器の椀である。164は台付壺の脚部か。脚内部に指頭圧痕が認められる。165は柱状の高台をもつが、鉢であろうか。143に似る。168～172は土錘である。172は有孔土玉とするべきか。出土したロクロ土師器は大河跡と重複するSD210からの混入であろう。

173～175は縄文土器である。173・175には対向玉抱き三叉文がみられ、晩期初頭御経塚式期であろうか。176～219は土師器甕とした。176～181は有段口縁をもつ。176は口縁に波状文を巡らせ、177～181は擬凹線である。182は近江・東海系、183は山陰系の口縁をもつ。184は受口状の短い口縁部をもつ。185～193は口縁端部が肥厚する布留甕である。189は口唇に沈線状の調整がみられるほか、肩部にキザミを巡らせている。漆11群、古墳時代前期後葉に該当すると考えられる。194～208は土師器甕で、口縁部が屈曲し外反するタイプのものである。202・203は小振りで、203は特に粗い作りである。



209は大型の山陰系甕で、肩部に櫛描波状文が施される。210は同じく山陰系甕か、口縁の段は明瞭でない。211～216は甕類の底部である。217～219は土師器甕だが一様に粗雑で、口縁に歪みがみられる。218は波状の口縁が微妙である。220～230は土師器の壺である。220は田嶋分類F類、棒状浮文は3条1対である。221は同じく2条1対の棒状浮文をもつが口縁端部の肥厚は認められない。223は円形スタンプ状の文様を口縁外面に巡らす。223は口縁外面に赤彩が施されている。224は直立する頸部からわずかな段を経て口縁部を形成している。225は直立した頸部に強く外反する口縁部をもち、頸部はキザミをもつ突帯で加飾される。226は大形の壺で、大きな有段口縁の外面に円形浮文が付く。227・228は櫛描文が施されており、弥生時代まで遡る可能性があるが不明である。227は山形文、228は山形文と直線文が確認できる。229・230は外面ハケ調整後に粗雑な櫛描文で加飾している。231～237は球状の体部から屈曲し直線的な口縁部を持つ土師器壺である。238は小型の壺で、外面に赤彩が施されている。239は外面と口縁部内面に赤彩処理がなされる。240は無頸壺で、蓋装着用と思われる孔が確認できる。241は外面赤彩された台付壺の体部、242は壺類の底部である。243は台付壺の脚であろう。244～246はミニチュア土器で、244は壺形、245は台付鉢形で赤彩が施される。246は有孔鉢形であろうか、底部に穿孔される。247～252は手捏土器である。253は内外面にミガキ処理の施された鉢である。254は椀で、同様の調整が施される。255は蓋である。256～262は土錘で、257・261・262は有孔土玉か。263～275は球状の体部と直線的な口縁部を持つ土師器小壺である。274は田嶋分類のE1類、275はC類に相当する。漆12群・古墳時代中期前葉のものであろう。276～279は土師器高杯の杯部、280～285は脚部である。276は口縁部まで内湾気味の粗雑な作りのものである。283は脚部に工具で横描の加飾を施している。286～300は土師器高杯である。287は直線的に開き端部を面取りする口縁部をもち、内外面に赤彩が施される。289は碗状の受部から外反する口縁部をもち、丁寧なミガキが施される。田嶋分類のB2類に相当する。293は杯部内面のミガキ調整を中央から放射状に行うことで加飾的な要素をもたせる。294は丁寧なミガキの後、内外面に赤彩を施している。295は脚部であるが、頸部から直線的に開き、裾部で短く屈曲する。298の杯部内面はハケ状工具で単位を区切って調整されており、加飾的要素と認識される。300は小型のもので、縦位2孔1対の透孔が認められる。301・302は台付鉢とした。301内面のミガキ処理は特徴的で、中心から弧を描く放射状に施されており、加飾的な要素が強い。302の内面も放射状のミガキが施されている。303～308は器台である。303はいわゆる小型器台で、透孔は3箇所確認できる。304は脚部に櫛描直線文を2条巡らせている。307は脚部と裾部の変化点に突帯をもつ。透孔は2孔1対で3箇所確認できる。308も同様に突帯をもち、突帯上にキザミを施す。透孔は2孔1対2箇所に確認できる。309は受部に透孔をもつ装飾器台である。310は鼓形器台である。311は須恵器甕で、細かな櫛描波状文が施されている。

312～319は土師器椀である。314は高台をもち、内面は黒色処理が施される。315～317はロクロ土師器椀で、317は柱状の高台をもつ。318・319は内面黒色土師器椀で、318は外面に赤彩処理がなされ、高台をもつ。320は内面黒色の鉢であろう。321はロクロ土師器皿である。322・323は白磁碗で、322は小片のためもう少し傾き太宰府分類Ⅱ-1類、323はⅣ-1a類に相当するか。ここで報告した土師器椀・皿・白磁類は重複するSD210からの混入と考えられる。324～326は土師器甕としたが、325は口縁形態とキザミ、櫛描波状文による加飾から壺とすべきか。324は口縁外面に擬凹線を巡らせ、内面には指頭圧痕が認められる。326は甕で、体部は中央部で大きく張り出す。327・328は山陰系の壺か。口縁下端に弱い突出が認められる。

329はミニチュアの土師器蓋である。330は大型の有段甕で、12条の擬凹線が施されている。331～333は土師器甕で、331は直線的な頸部と受口状の口縁部を持つ。334は甕か。浅い体部と短い口縁をもち、調整は粗い。335は土錘である。336は高杯の脚部を蓋として転用したもので、欠損断面が研磨されている。337は壺としたが、形状から甕形土器の可能性もある。338は高杯の杯部か。内面に丁寧なミガ

キ調整が施され、須恵器坏身の形状に似る。339は小型の器台で、透孔を4箇所確認できる。340は高杯で、裾部端に1条の沈線を巡らす。341～343は椀で、内外面ともにミガキ調整が施されている。

344は装飾壺で、口縁部のみ出土だが、内外面に櫛状工具を使用した華美な装飾が施される。345は壺の口縁部で、口縁下端を断面三角形に拡張し、擬凹線を巡らせたのち円形浮文を貼り付けている。346は土師器甕である。347・348は高杯で、347は厚手の器壁を有し、内外面をミガキ調整とする。348は脚部で、透孔が3箇所確認できる。349は装飾器台で、受部下端拡張部に擬凹線を施し、赤彩が施される。359は器台の脚で、透孔は2孔1対3箇所に確認される。351は鉢か。体部中央に1条の凹みを設け上部と下部を分けし、上部に篋状の工具を用いた綾杉状刺突で加飾するが全容は不明である。352は土師器の壺で、丁寧なミガキ調整が施されている。353～356はグリッドから3区出土の可能性がある。353は壺の肩部で、粗雑な櫛描波状文と直線文で加飾される。354・355はミニチュア土器で、354は壺形、355は台付鉢で外面に線刻がある。356は有孔鉢の底部であるが、高杯杯部の転用か。357は須恵器蓋、358は須恵器坏身で、いずれも和泉陶邑窯編年(田辺1981)のTK47～MT15形式が想定される。359は多孔の甑である。外面には粗いハケ調整、内面にはケズリが見受けられ、孔13個が残存する。グリッドから3区出土のものか。360は土師器の甕である。厚手で、くの字状に外傾する口縁をもつ。361は須恵器の甕で、タタキ目の分類については外面が内堀分類(内堀1989)平行線文a類、内面は同心円文b類である。

362は器台とした。田嶋分類の壺F類と同様の口縁形態を持つが、口縁部が緩やかに内湾する。棒状浮文2条1対が確認できる。363は同様の口縁形態をもつ壺である。364は頸部にキザミ突帯を巡らす壺と判断した。弥生時代中期か。365は壺の体部破片か。外面に線刻が確認でき、絵画土器の可能性もある。366は土師器壺の口縁部で、端部を面取りし、綾杉状のキザミを巡らせる。367は突帯上キザミをもつ壺の頸部である。368は強く開く壺の口縁部で、キザミのある棒状浮文が2条確認できる。369は土師器甕形土器、370は土師器小壺、371は鉢である。371は無頸壺で、蓋装着用と考えられる孔が2孔1対2箇所に確認できる。373・374は土師器蓋で、丁寧なミガキ調整が施される。375は竈類の支脚である。376は高杯で、杯部と比して太い脚部である。377は直線状に開く器台の脚部で、透孔は3箇所確認できる。杯部を結合、充填した後に再穿孔している。

378は布留甕で、379は口唇部肥厚がわずかに認められる土師器甕である。380・381は縄文土器で、御経塚式期に属する。381は前出174と同一個体と思われ、突帯と刺突文が確認できる。382は土師器甕で、粗い作りで口縁部は外反する。383は土師器の丸底壺、384は口縁に段をもつ小壺、385・386は小壺である。387は鉢で、底部内面は厚く、指頭圧痕が認められる。388は大型の壺である。389は土師器有孔鉢の底部、390～392は土師器高杯である。390は杯部内面のミガキ調整が中心から弧を描く放射状に施されており、加飾性が強い。391・392は田嶋分類のH類に相当する。

393は直立気味の口縁に2条の沈線を巡らせる。弥生時代のものか。394は青磁染付皿か、高台内に染付で「洪武年造」の記載がある。395は龍泉窯系青磁碗で、太宰府分類のⅢ-1Bに相当する。13世紀代のものか。396・397は土師器小壺で古墳時代前期～中期、398は須恵器無台坏、399は瓦塔の屋蓋部である。方形の縁長押部、半裁竹管状工具で作りに出した丸瓦部が2面に残存し、中央部に設けられた穴の一部が確認できる。孔径は不明だが、7cm前後と想定すれば、縁長押内法で約13cm前後となる。4区大河跡からは当該期出土の遺物はほとんどなく、時期は不詳と言わざるを得ないが、既刊報告書(木曳野遺跡群Ⅳ～Ⅵ)で報告されている同一河川(主幹線1区SD303・同2区SD240・SD244・同3区SD201)からは田嶋編年(田嶋1988)Ⅲ期～Ⅳ期の遺物が多く報告されている。

401は粘板岩製の石庖丁か。402は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。403は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部から刃部にかけて幅広となる。404は全周に敲打痕の認められる敲石である。405は全面に使用痕のある流紋岩製の砥石である。406・407は施溝分割痕の残る変質流紋岩製の剥片である。408～410は凝灰岩製の打製石斧である。411は刃部を欠く磨製石斧、412は石英の剥片・413は変質流紋岩の

剥片である。414は変質流紋岩の石核、415は粘板岩の石核とした。416は擦痕から砥石としての用途が想定されるが、周囲全面に敲打痕が認められる。417は縄文時代の鏝節形石器で、粗い調整が施されており、未成品と考えられる。418は安山岩製の砥石、419は安山岩製の打製石斧で、撥形を呈する。420は玄武岩製の打製石斧で基部を欠く。421は石錘で、括部に使用痕が明瞭である。422は被熱した安山岩で煤が付着しており、炉石と考えている。423は変質流紋岩製の剥片としたが、鏝形石製品未成品の可能性もある。424は石錘で、括部に使用痕がある。425～427は砥石で、426・427は凝灰岩製で中央部に線状の擦痕が残る。428は石錘で、使用痕が顕著である。429は砥石か。431・432は変質凝灰岩製の管玉で、いずれも両面穿孔である。433は変質蛇紋岩製の勾玉、434は碧玉製の丁字頭定形勾玉で、頭部を欠くが、孔部周囲に5条の施溝が確認できる。435・436は滑石製の勾玉である。437は蛇紋岩製の勾玉で、両面穿孔である。

441は銅鏃で、有茎式である。442は鋳滓、443は鉄製であるが用途不明で鉄製品残欠とした。台付の円錐形を呈する。錘か。444は鉄製の角釘である。445はシカの右肩甲骨で、焼灼痕は認められない。計測箇所は青谷上寺地遺跡Ⅲの計測法(井上2001)による。446はシカの右上腕骨で、445と同一個体と考えられる。447はシカか。448はイヌの頭骨である。中世犬、雌犬か。448の同定結果は既刊『木曳野遺跡群Ⅰ』に掲載しているのでそちらを参照願いたい。

木製品は449・450・465～579が出土している。時期的には漠然とではあるが大河跡出土土器が参考になる。449は弓で、弭を突状に加工する。450は堅杵である。465は結菌式堅櫛で、黒漆で固められる。466～479は加工痕の残る板状・棒状の木製品である。467は木皿か。477は糸巻部材、479は履物の可能性がある。480～482は弓で、480・482には加工された弭が確認できる。494・495は同一個体と思われ、鋏であろうか。496は杓子状の木製品、500は薄い作りで篋状とした。508は棒状で、一端が薄く加工されており、杓子状か。511は工具等の柄である可能性がある。514は箸、522は櫛状を呈する。524は鋏ないし楔であろう。525は桶の側板であると考えられ、上下を黒漆で装飾する。526は漆器の椀で、全面に黒漆が塗られている。527は建築部材と考えられる。屋根材か。528は折敷底板である。530は平面楕円形を呈し、槽とした。531は組合式の刀柄である。532は木錘である。533は弓で弭に造出が認められる。541～543はナスビ形の平鋏である。544は舟形で、舳先に細かな加工がみられる。545は湾曲した一材の両端を粗く削り、中央左右に抉りを加えてあるが、用途は不明である。546はタタリの基礎台部か。547～563は加工が認められる棒状・板状の木製品である。564は堅杵で中央部で欠損している。559は表面に抉り加工が認められ、容器の未成品と考えられる。565は篋状木製品の残欠か。570・571は鞍である。双方ともに馬挟に沿って突帯を設け居木結束のための装置である方孔を穿っている。570は断片のため詳細は不明だが、571は後輪と考えている。573は平鋏であろうか。579は円形板で、桶か曲物の底板であろう。

#### 第4節 遺構外

遺構外(第30図430) 430は4区包含層出土遺物で、粘板岩製の石剣断片である。研磨により両面に鎬部分を作り出す。刃部・基部の両端を欠損する。

#### 第5節 補遺

過年度に刊行した報告書に掲載できなかった遺物について併せて報告する。主に木曳野遺跡群Ⅵで掲載できなかった木製品・金属製品であるが、その他のものもここで取り上げて報告する。出土した調査区・遺構等は第3表～第5表を参照願いたい。

寺中B遺跡、畝田・寺中遺跡1区・3区・県費分C区(第36図580～587・589～593、第37図) 580は土師器の甕で、くの字に屈曲する口縁部をもつ。581は無頸壺である。球胴で小さな底部をもつ。582は

柁目取りの木製盤。583は土師器高杯で、八の字状に延びる薄作りの脚部に透穴が認められる。584は高台をもつ須恵器壺の底部である。585は丸木に突帯を作り出した木製品で、栓か。586は高杯の受部を再加工した円盤状の土製品である。587は弓であろう。弭は突起を削り出し穿孔する。589は土器の注口部を再加工したものと考えられ、再研磨されている。590はガラス玉である。591は鉄製の柄付刀子である。刃部の蛍光X線分析結果によると、成分はFe（鉄）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）から成り、濃度(wt%) - 標準偏差 - 強度(cps/ $\mu$  A)はそれぞれFe : 99.40 - 0.06 - 188.046, Ca : 0.49 - 0.06 - 0.081, Rb : 0.11 - 0.01 - 0.410である。柄材はスギである。592は挟りと穿孔がある木製品、593は鉄箸である。594は滑石製の勾玉、595・596は変質流紋岩製の管玉、597は翡翠の剥片だが大きさ等から勾玉の材と考えた。598は土師器甕、599は須恵器の広口壺か。602・603はそれぞれ木錘・櫂であろうか。604は石錘、605・606は不明で、自然滓の可能性もある。607は鉄製の刀子で、刃部先端を欠損する。

2区出土土製品・金属製品(第38図) 608～626は土錘で、625・626は有孔土玉か。627～632は鞆羽口。633は鋳滓、634は有茎の鉄鏃、635は鉄製刀子の刃部。636は元豊通宝、637は皇宗通宝である。

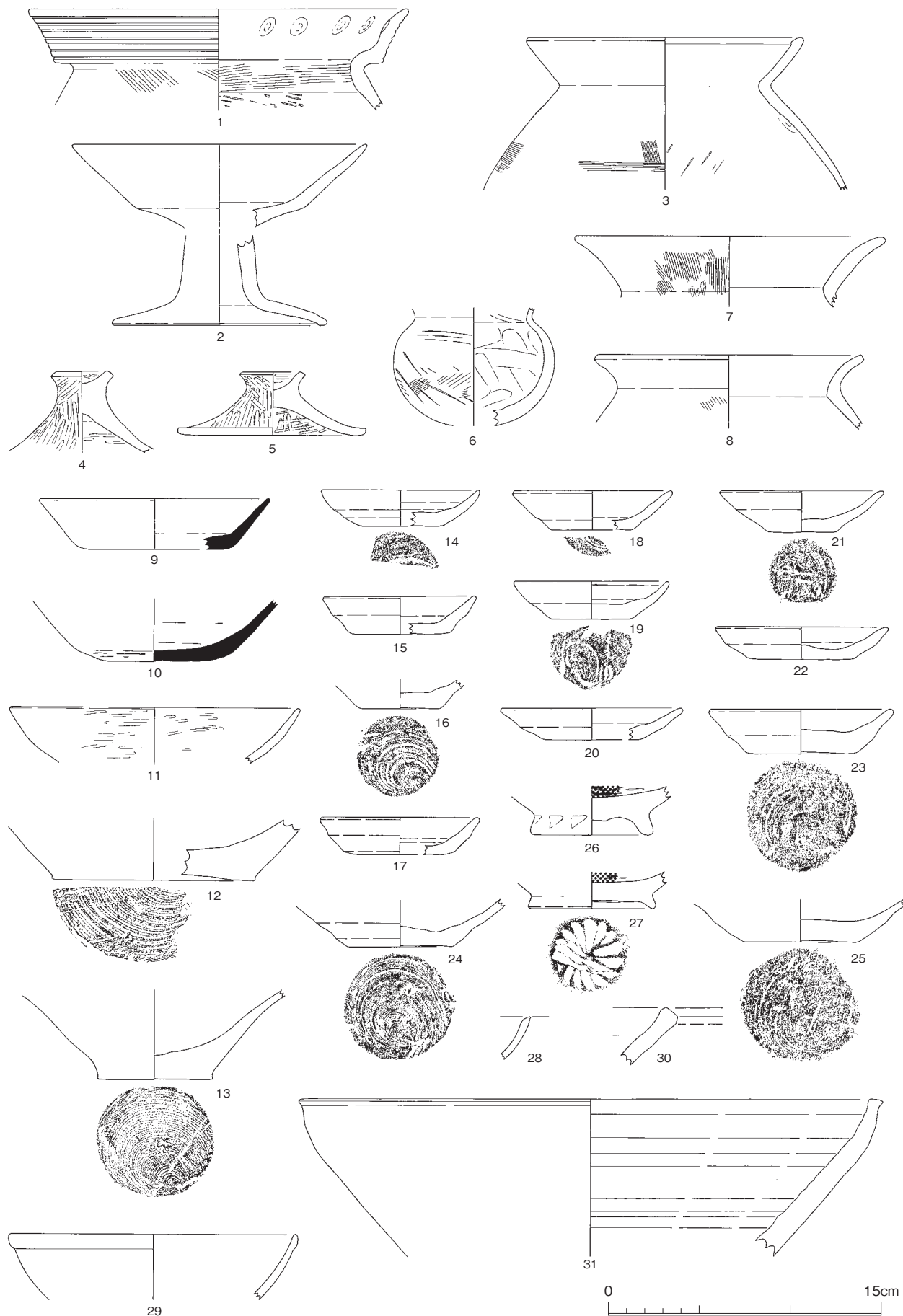
2区出土木製品(第36図588、第39図～41図) 588は角材か。639は先端を円柱状に削り出し下端に2つの孔を設ける棒状の木製品で、柄であろうか。646は飾板か。647は下駄の齒である。648は折敷で、4枚が残存している。650～653は箸状で、SE251から出土した。658・661・662・665も箸状木製品である。671は飾板であろうか。672は折敷または円形板、637は横槌である。678は木沓と考えられる。680は漆器蓋か。断面は半楕円形を呈し、中央部に孔を設け、裏面と思しき面に黒漆が残存する。682は鋏であろうか。683・691・699は弓の可能性もある。700は弓で、弭を削り出して突帯状に作る。703は木沓であろうか。704は円形板で、外縁を削って段を設ける。桶の底板か。706は容器または椅子の用途が考えられる木製品である。707は杵または槌、708は何かの柄と考えられる。709はクヌギ材の多又鋏で、柄には2つの方孔が確認できる。泥除具装着装置か。710は火鑽白で、使用痕は3箇所である。711～719は加工痕が確認できる棒状・板状の木製品である。720・721は雑具の部材であろう。722は漆器椀で、内外面黒漆である。732は農具の柄であろうか。733は紡織具部材、739は斎申である。741～743・745は円形板、744は曲物の側で、結束具としてサクラ類の樹皮が残る。742と同一か。749は井戸の側板と考えられる。

## 再掲：鑑定対照表

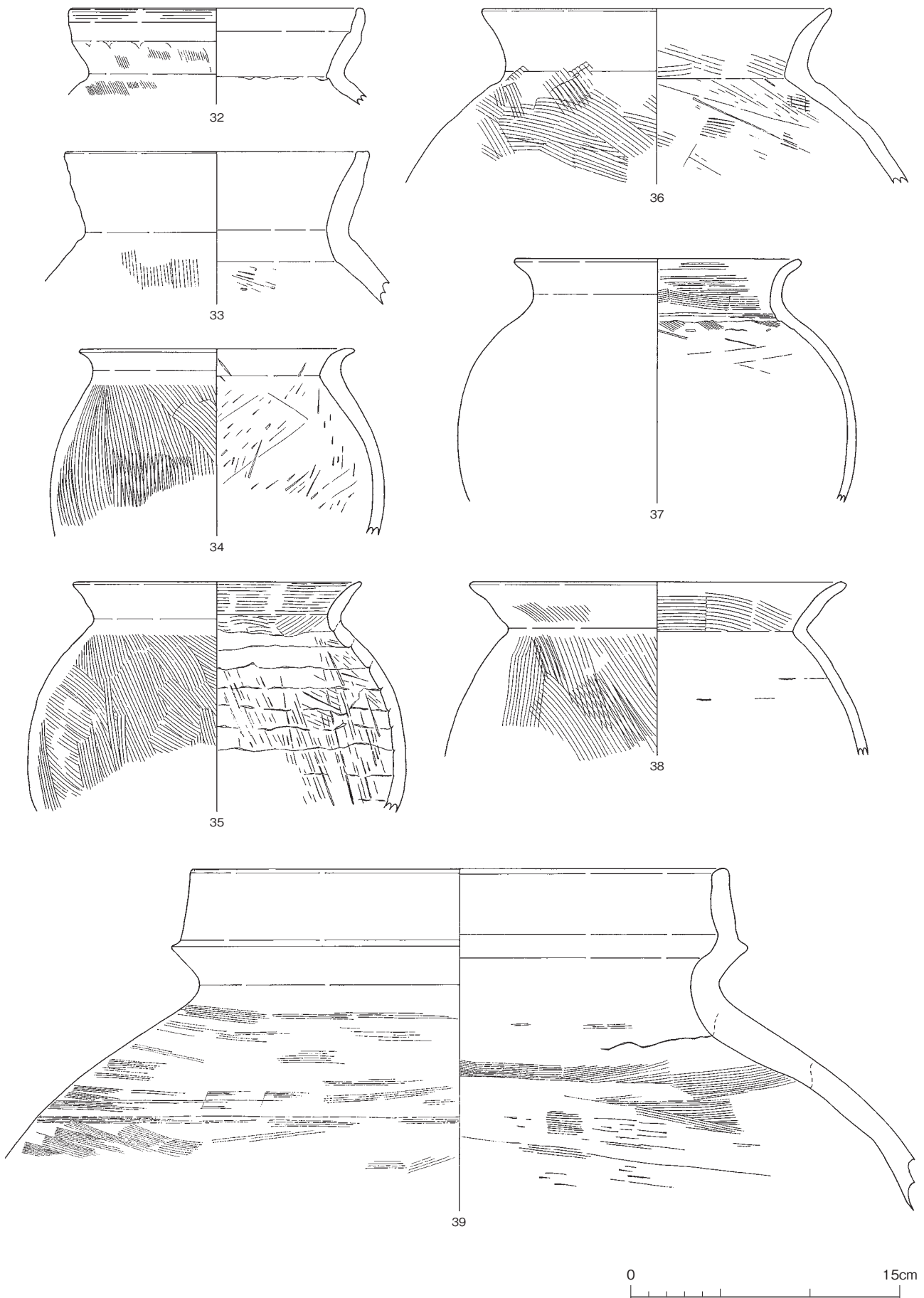
平成14年度～16年度にかけて行った木曳野遺跡群発掘調査において出土した貝類・骨類、石製品の一部分について、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し肉眼観察による種・材の鑑定を行っており、今回報告した遺構からの遺物も含まれている(第1分冊P18～29)。今回報告文についてここに再掲し、第1分冊との対照を図ることとしたい。なお、詳細については第1分冊を参照願いたい。

第2表 鑑定対照表

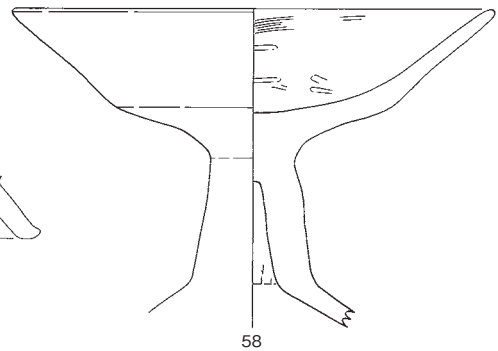
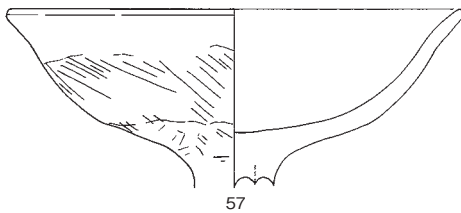
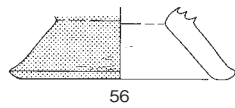
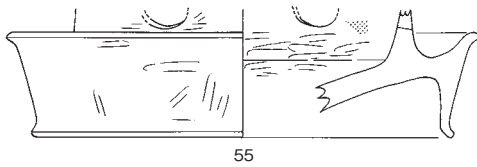
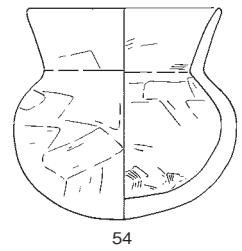
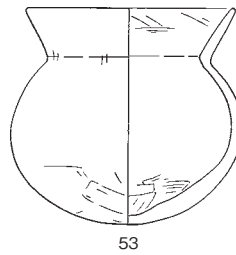
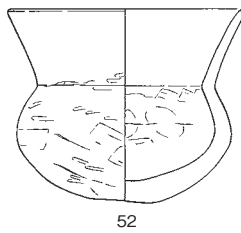
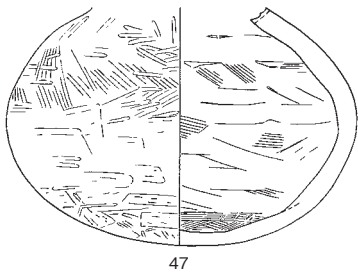
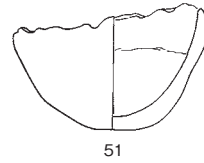
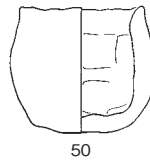
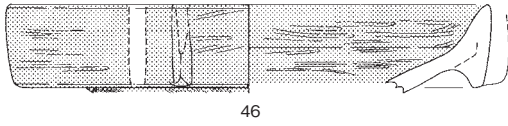
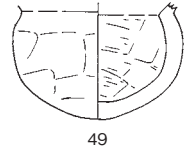
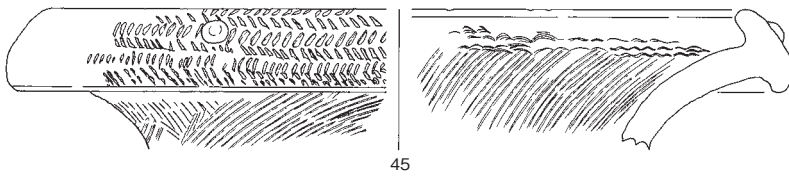
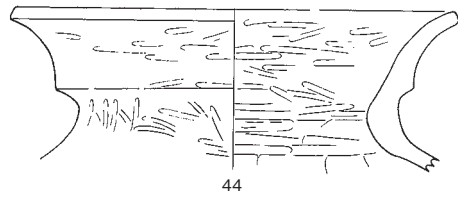
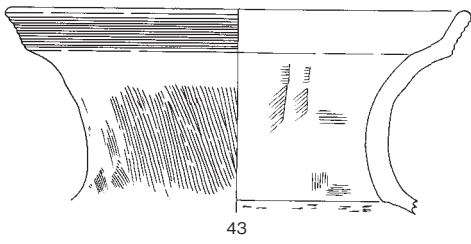
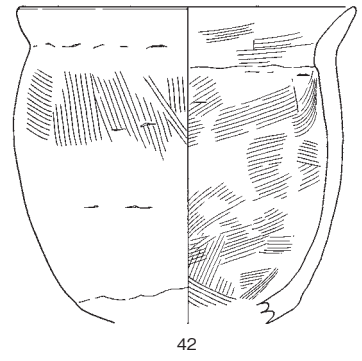
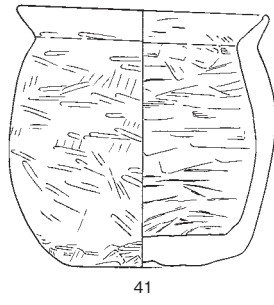
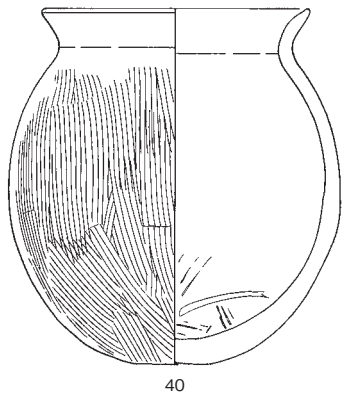
番号	器種	図版一番号	対照表一番号	鑑定	備考	実測番号	番号	器種	図版一番号	対照表一番号	鑑定	備考	実測番号
1	管玉	第30図-431	表18-10	変質凝灰岩	4区 W23 大河跡	Y25	7	勾玉	第30図-437	表19-2	蛇紋岩	4区 X21 大河跡	A48
2	管玉	第30図-432	表18-12	変質凝灰岩	4区 W25 大河跡	G20	8	頭骨	第31図-448	表13~表15	イヌ	4区 W25 大河跡	N36
3	勾玉	第30図-433	表18-13	変質蛇紋岩	4区 W・X22 大河跡	G21	9	勾玉	第37図-594	表17-上段	滑石	寺中B遺跡 4-2区 排土	G15
4	丁字頭 定形勾玉	第30図-434	表18-6	碧玉	4区 W24 大河跡	A53	10	管玉	第37図-595	表17-中段	変質流紋岩	寺中B遺跡 4-2区 SD28	G22
5	勾玉	第30図-435	表18-7	滑石	4区 W24 大河跡	Y24	11	管玉	第37図-596	表17-中段	変質流紋岩	寺中B遺跡 4-2区 SD28	G23
6	勾玉	第30図-436	表18-11	滑石	4区 W23 大河跡	N17	12	勾玉 未成品	第37図-597	表17-下段	翡翠	寺中B遺跡 4-2区 SD28	N18



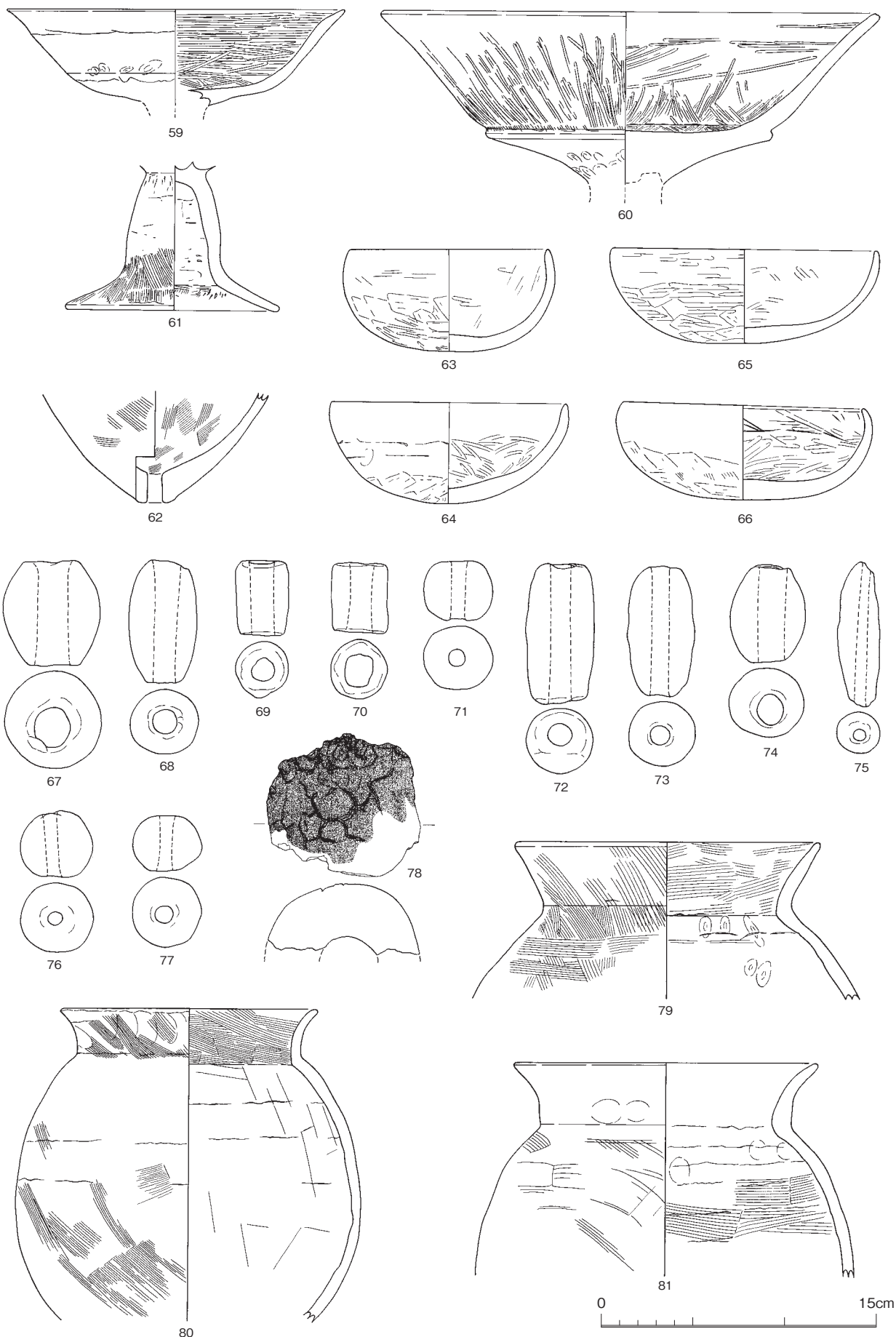
第8図 SK200・P200・SD210 出土遺物 [S = 1/3]



第9図 大河跡 (W25) 出土遺物 [S = 1/3]



第10図 大河跡 (W25) 出土遺物 [S = 1/3]

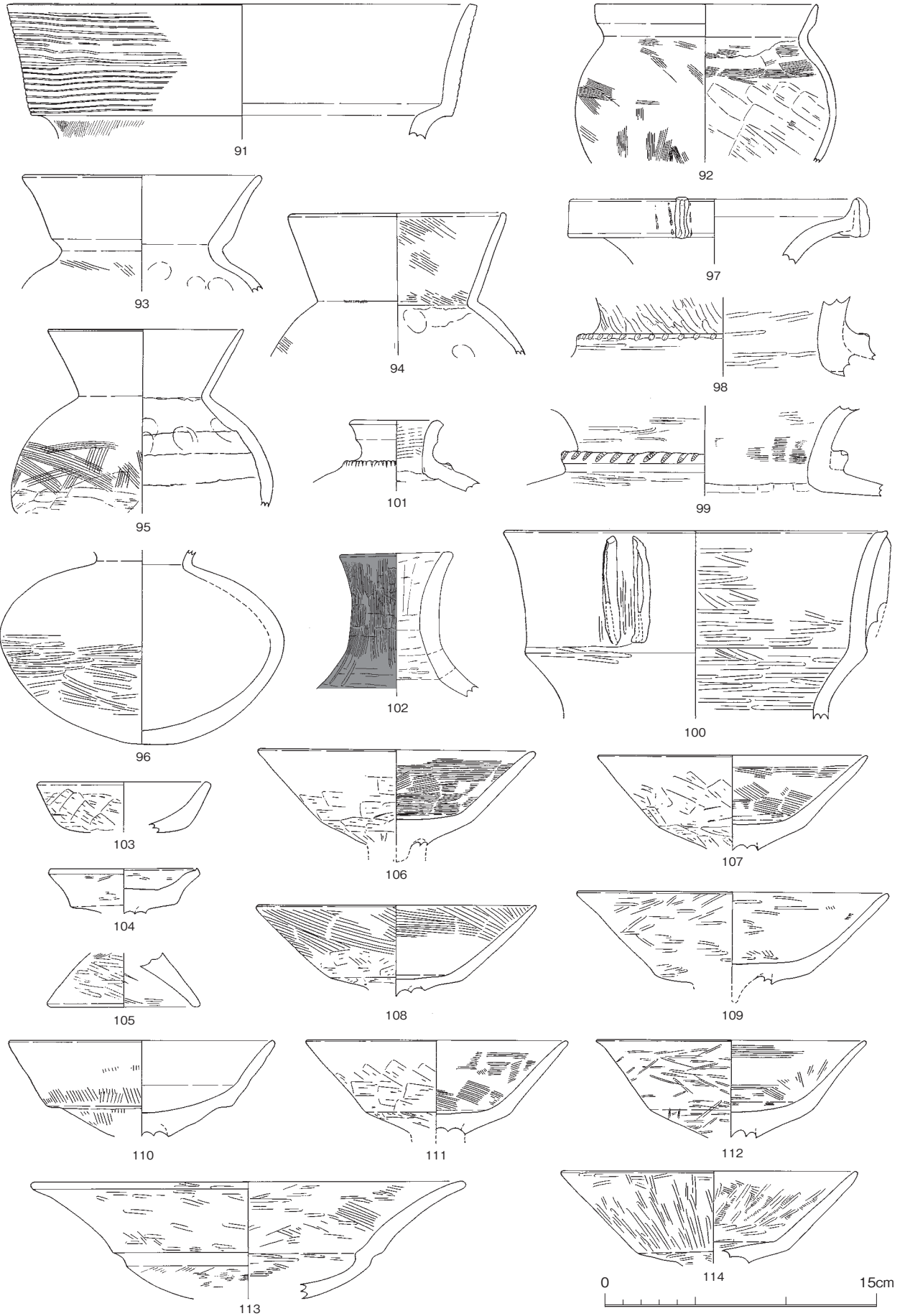


第11図 大河跡 (W25・W24) 出土遺物 [S = 1/3]

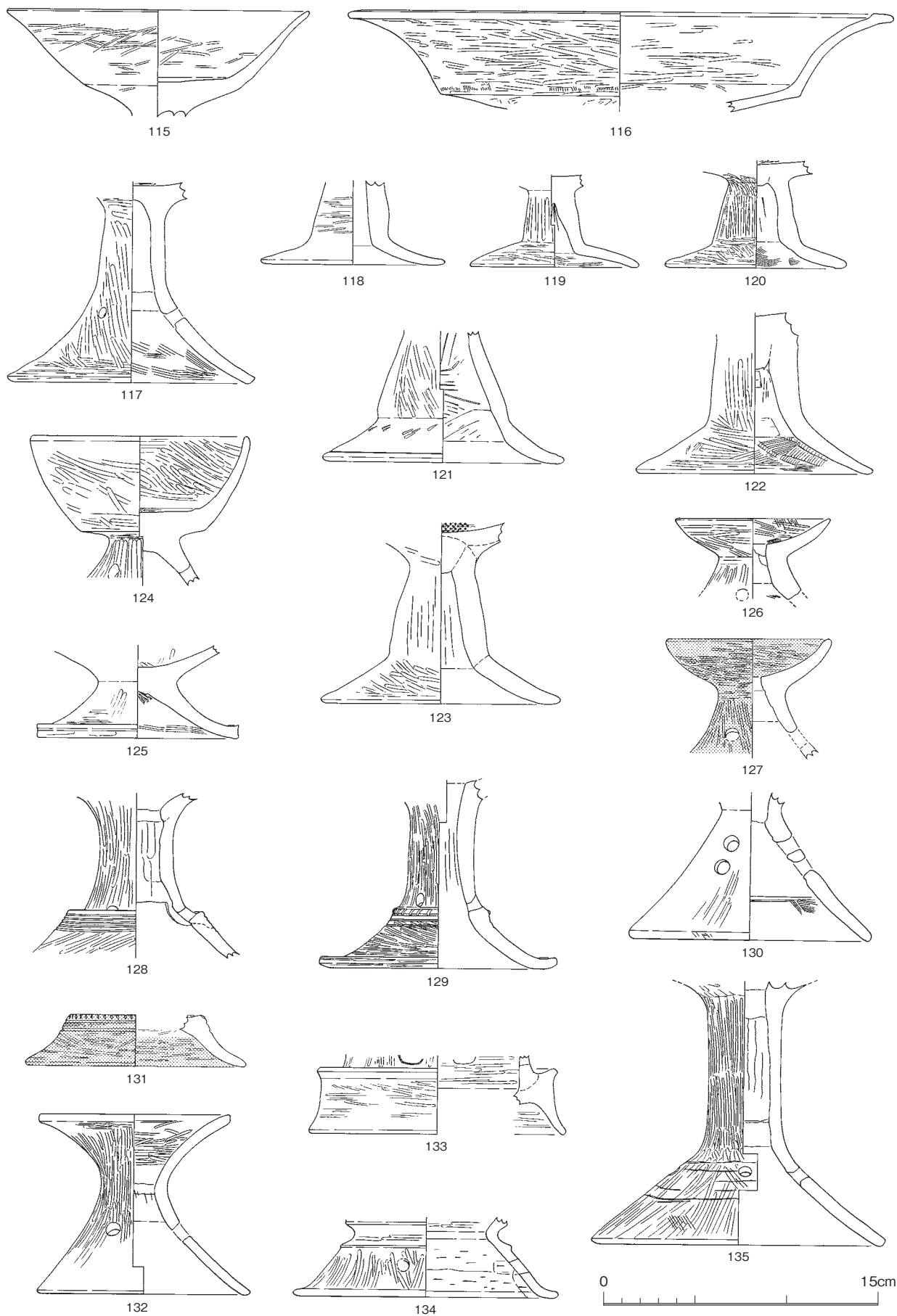




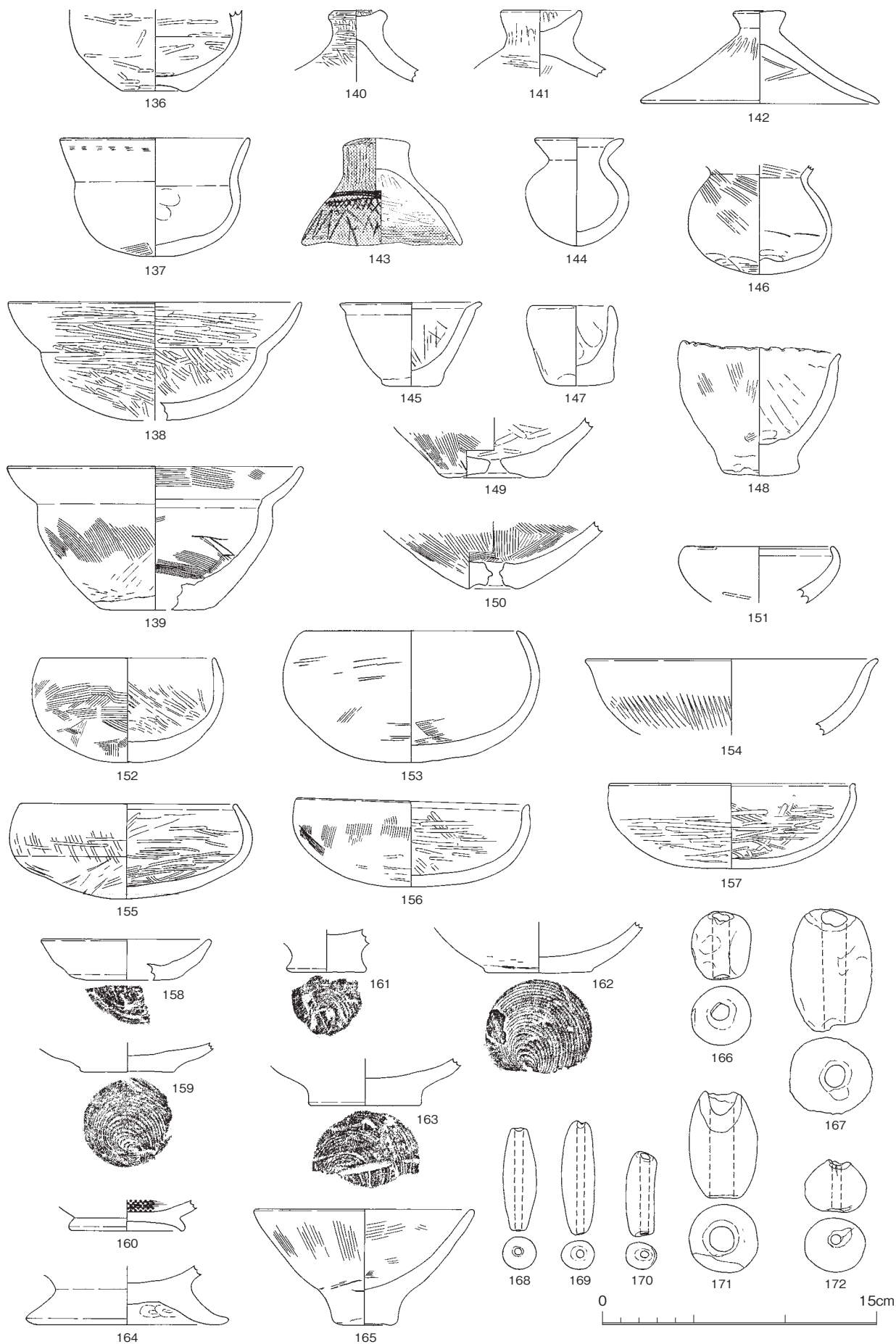
第12図 大河跡 (W24) 出土遺物 [S = 1/3]



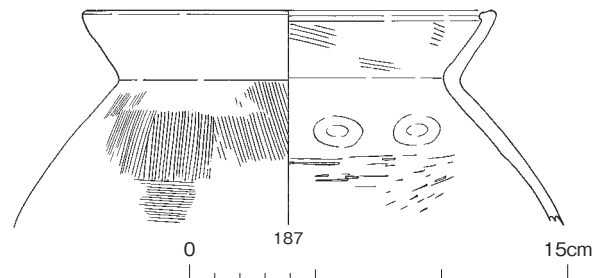
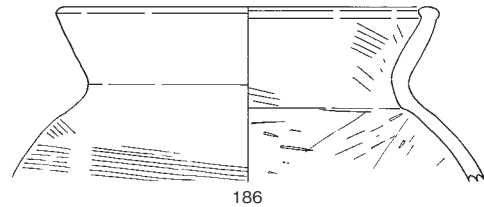
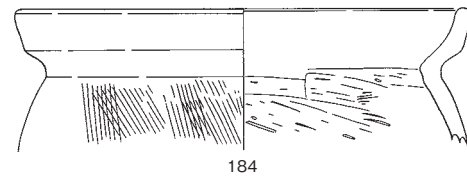
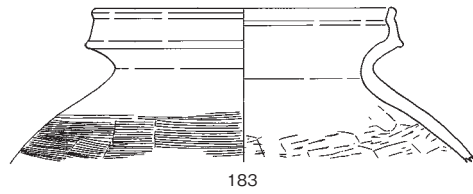
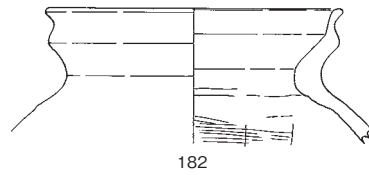
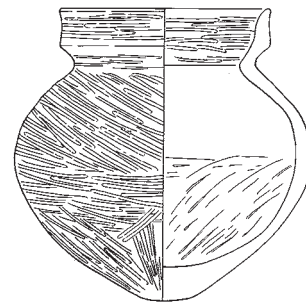
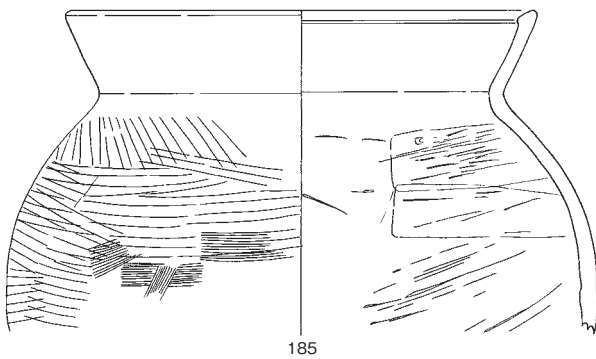
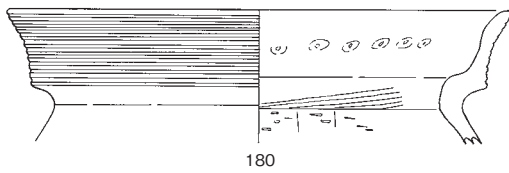
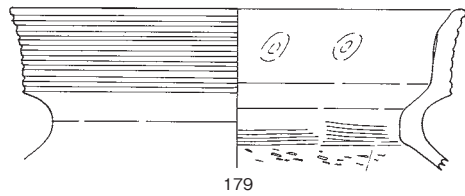
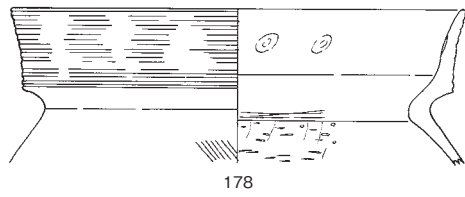
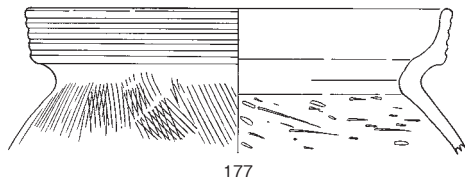
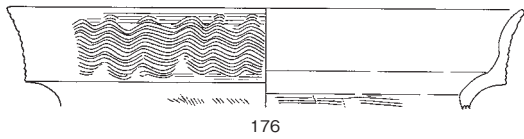
第13图 大河跡 (W24) 出土遺物 [S = 1/3]



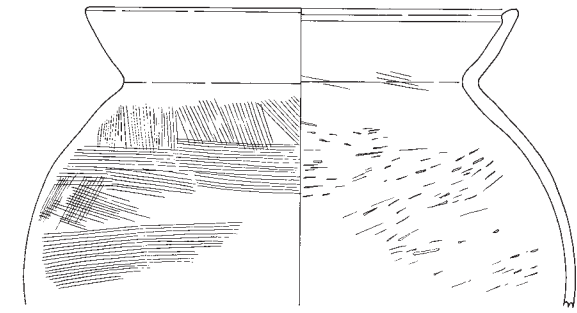
第14図 大河跡 (W24) 出土遺物 [S = 1/3]



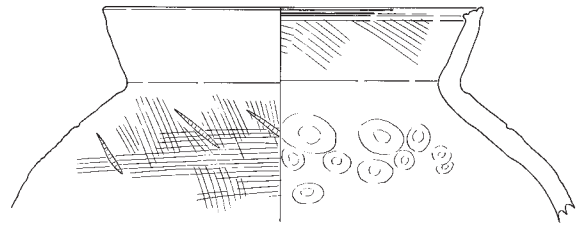
第15図 大河跡 (W24) 出土遺物 [S = 1/3]



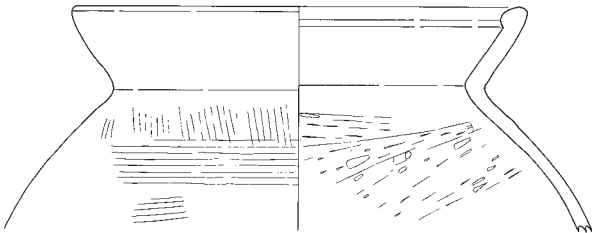
第16图 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



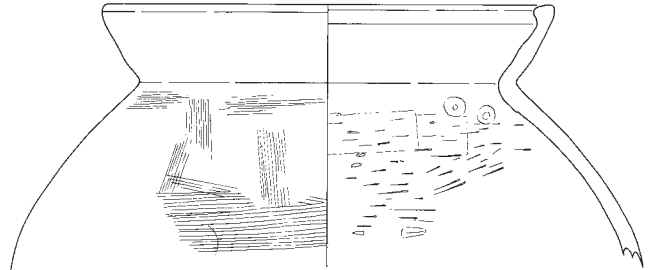
188



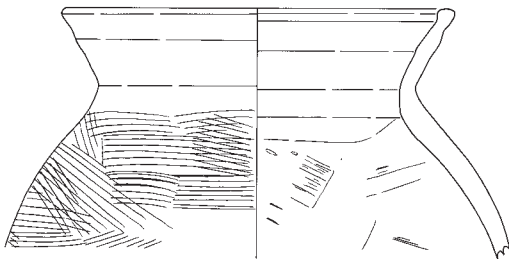
189



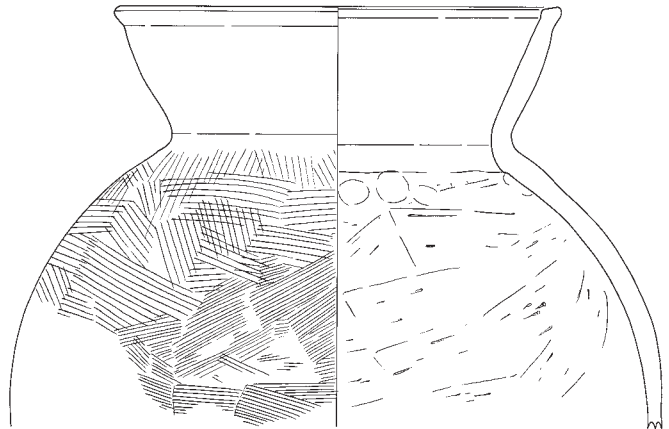
190



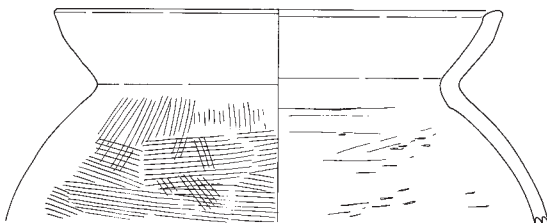
191



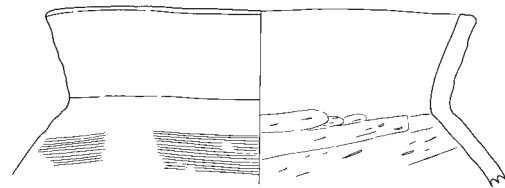
192



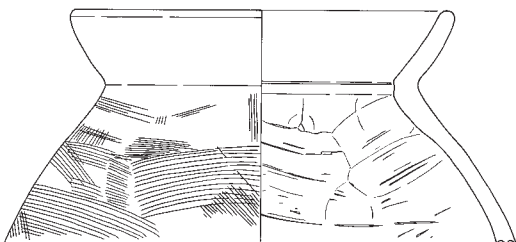
193



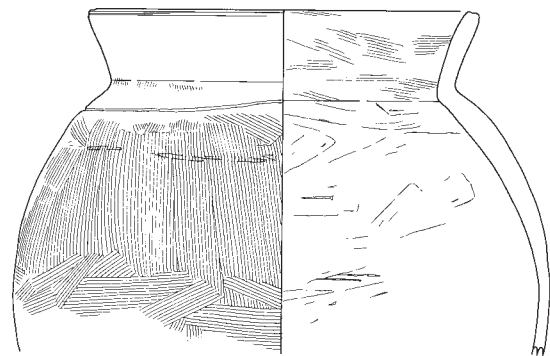
194



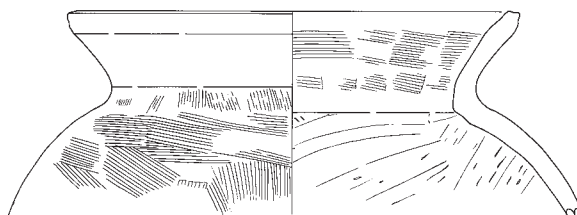
197



195



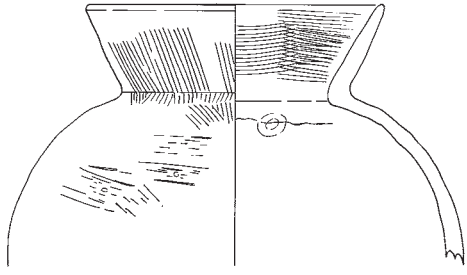
198



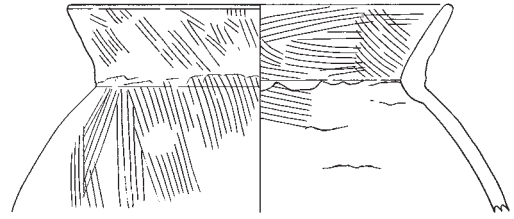
196



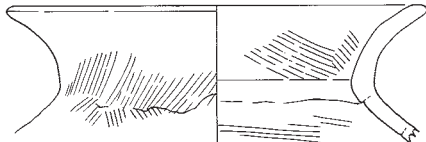
第17図 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



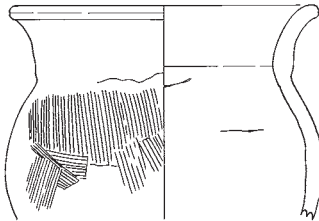
199



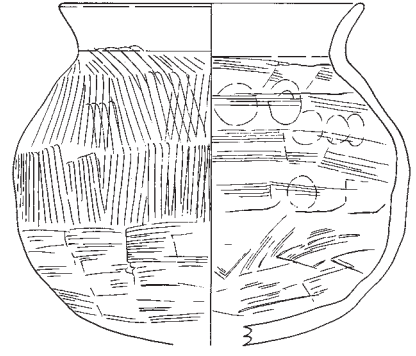
200



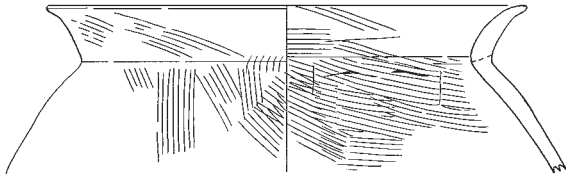
201



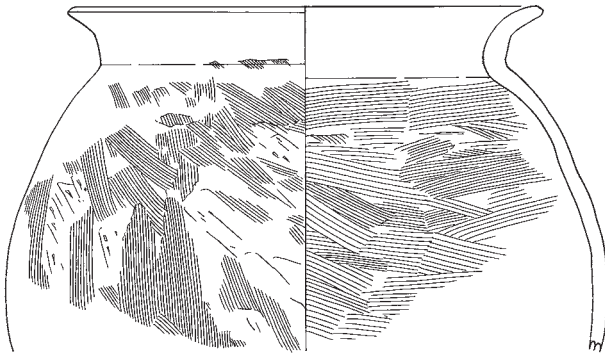
202



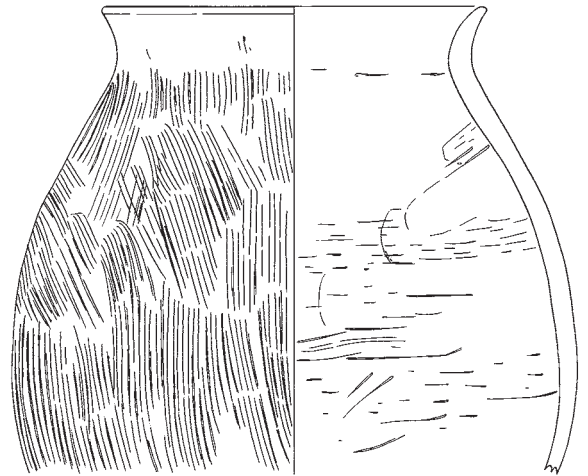
203



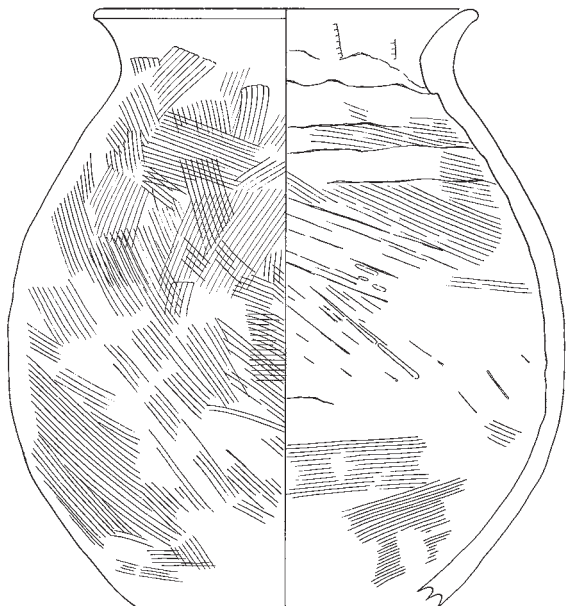
204



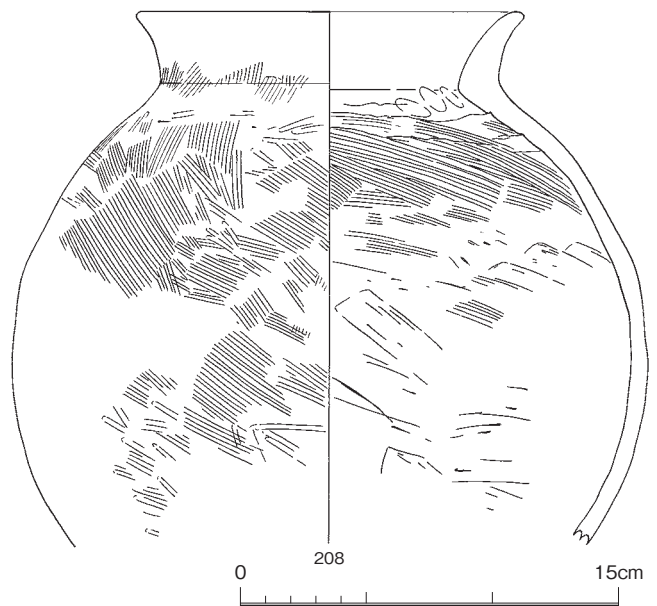
205



207



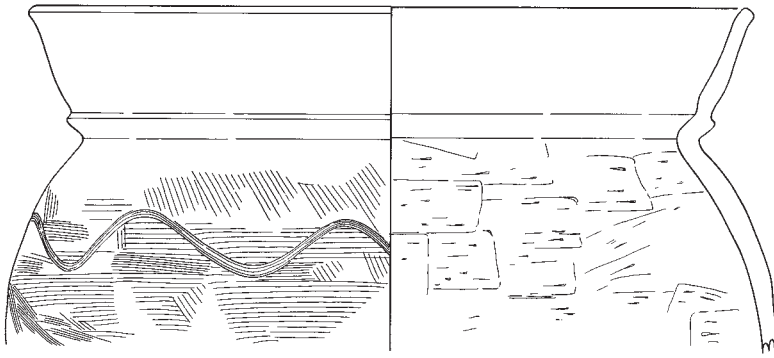
206



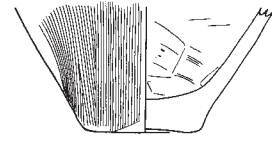
208



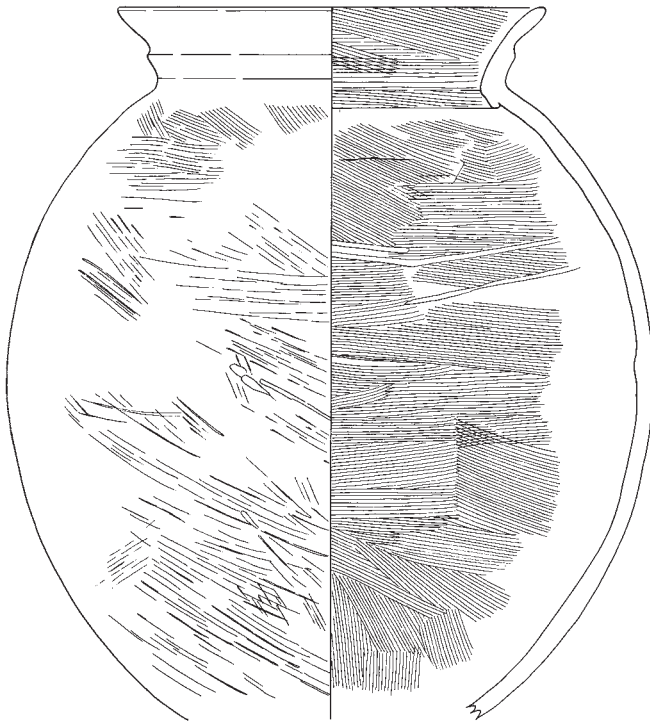
第18图 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



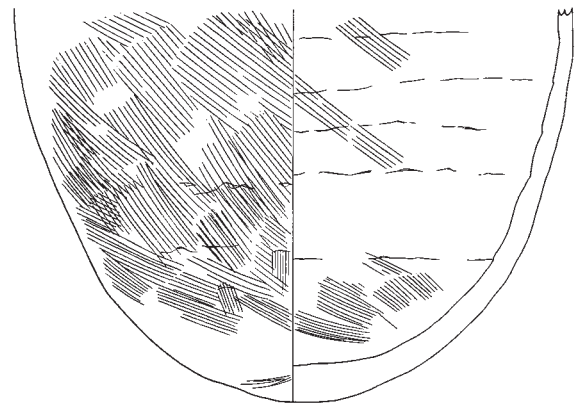
209



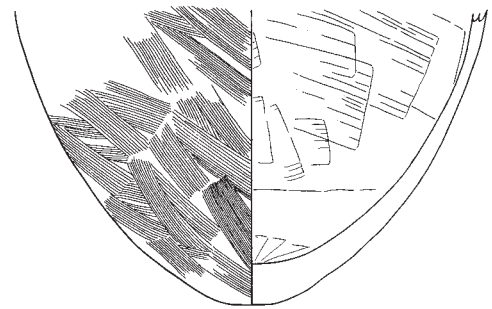
211



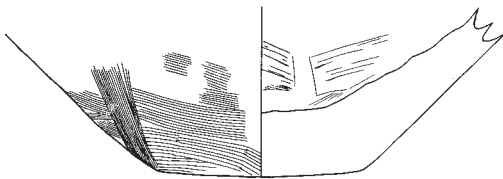
210



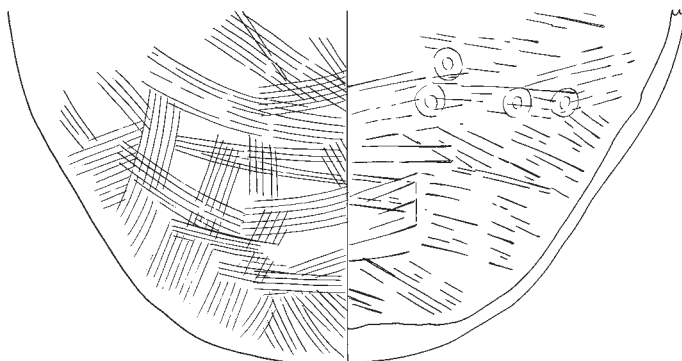
214



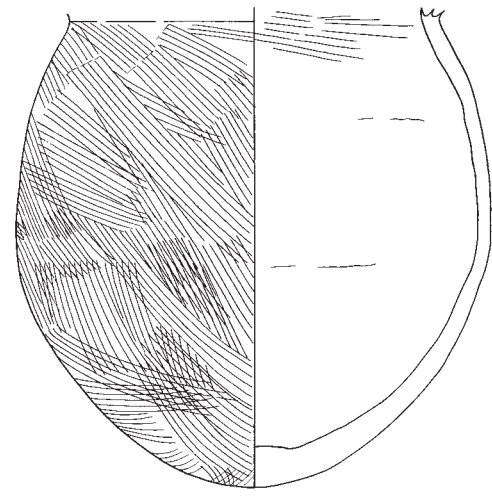
215



212



213

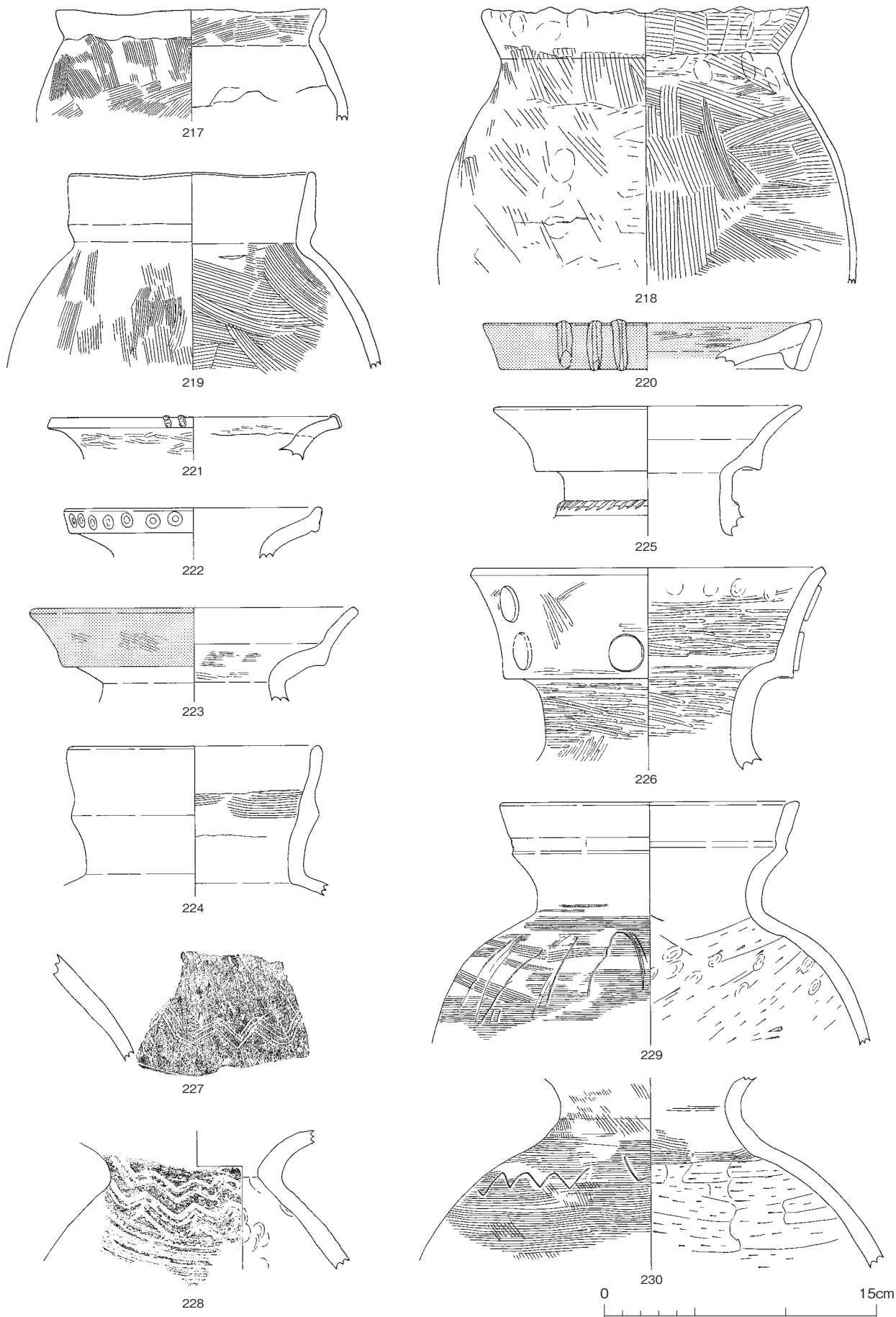


216

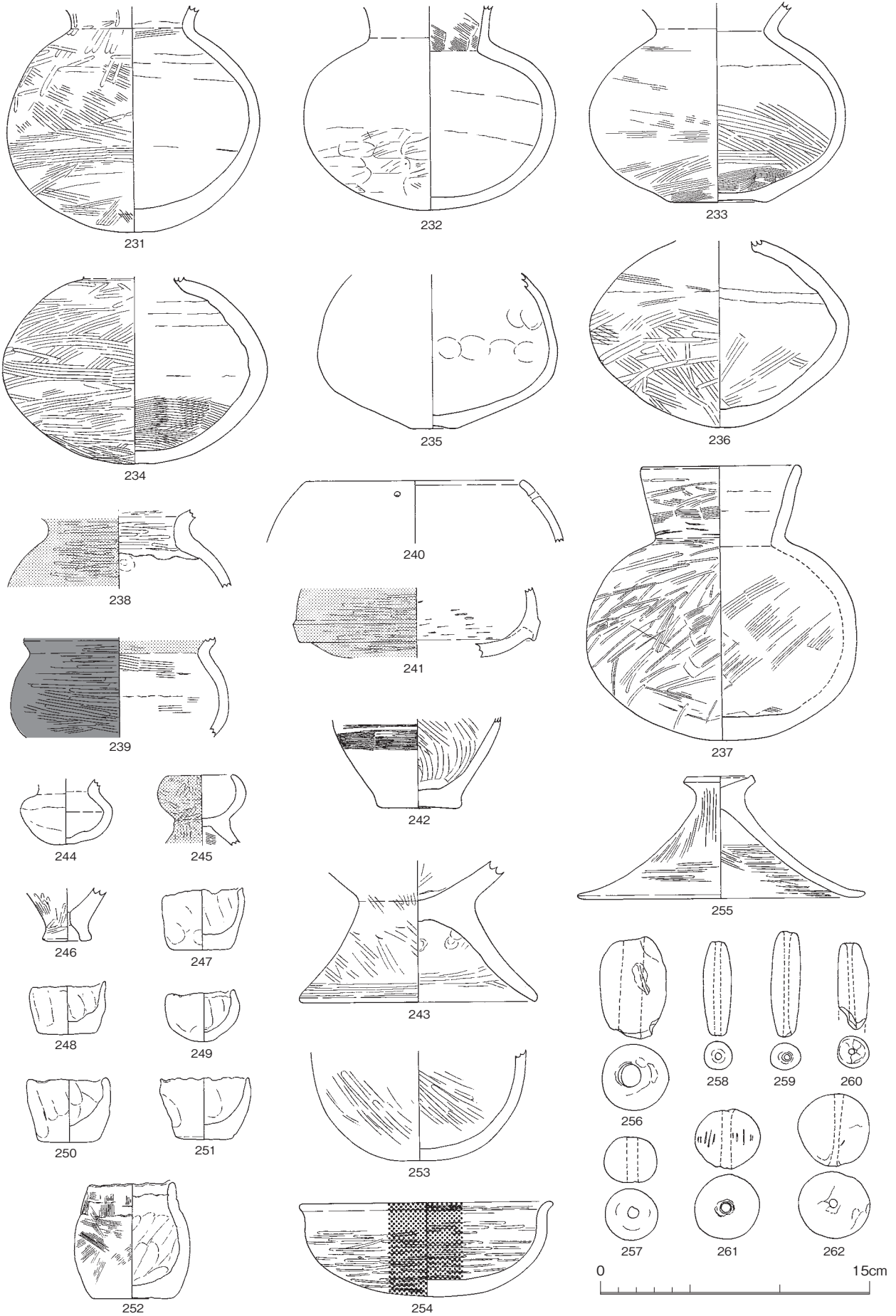


第19図 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]

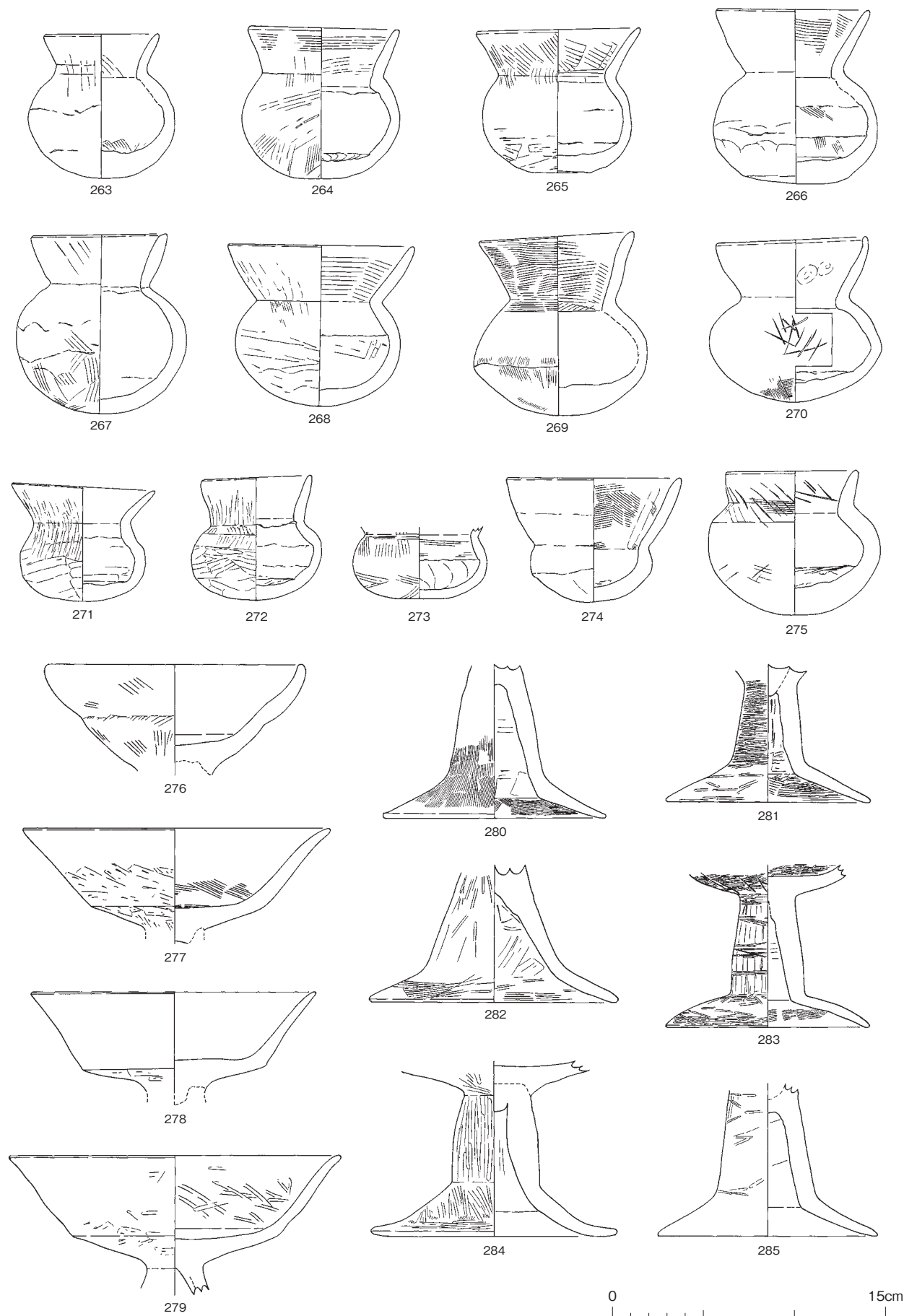




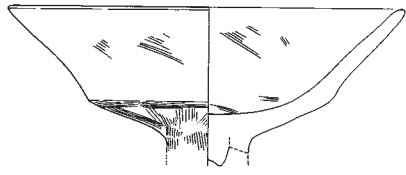
第 20 図 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



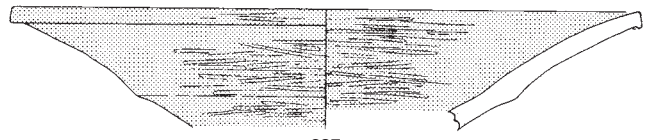
第21図 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



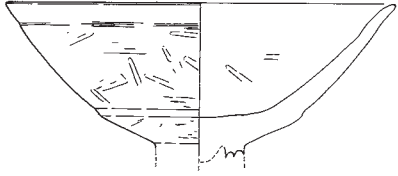
第22図 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



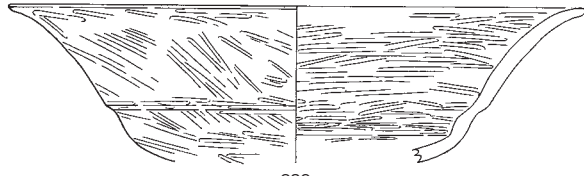
286



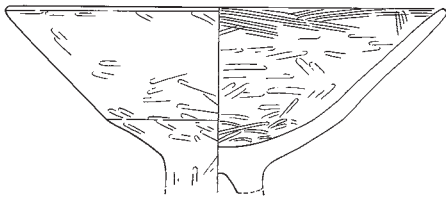
287



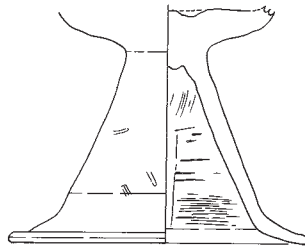
288



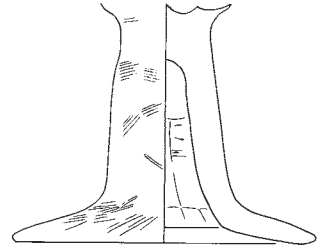
289



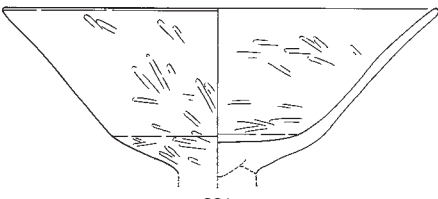
290



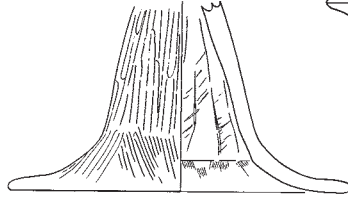
295



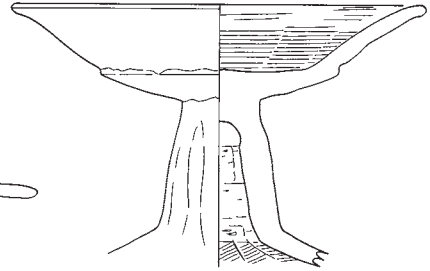
296



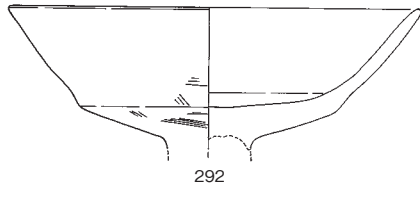
291



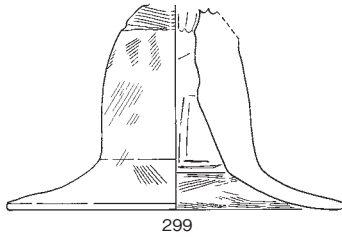
297



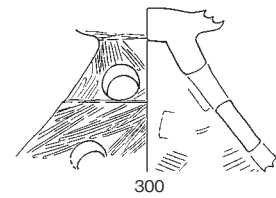
298



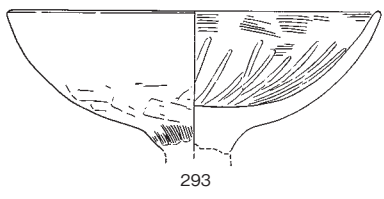
292



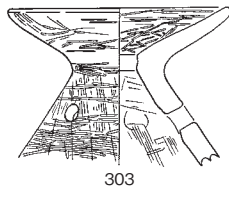
299



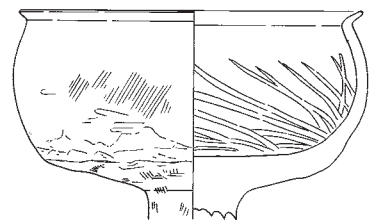
300



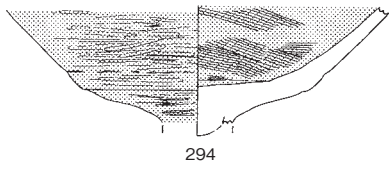
293



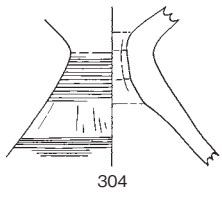
303



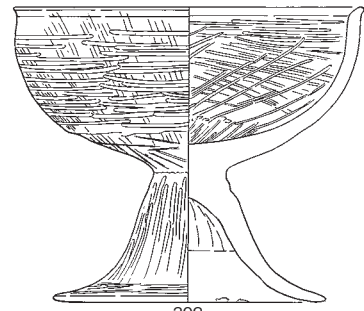
301



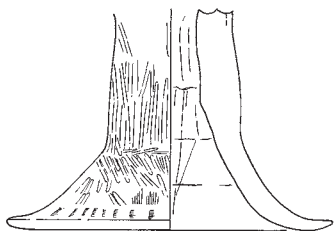
294



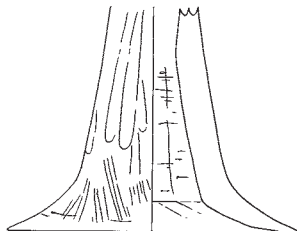
304



302



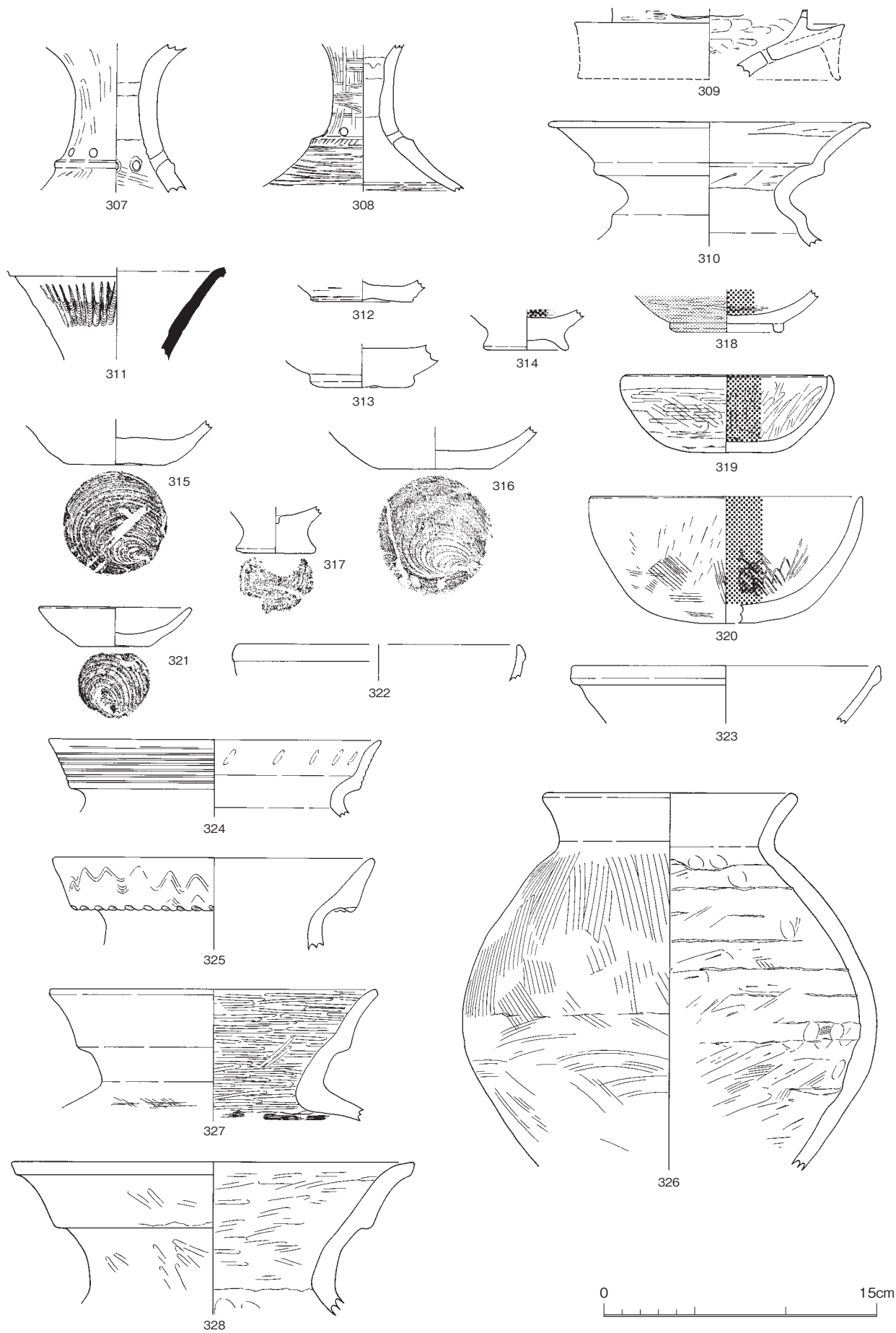
305



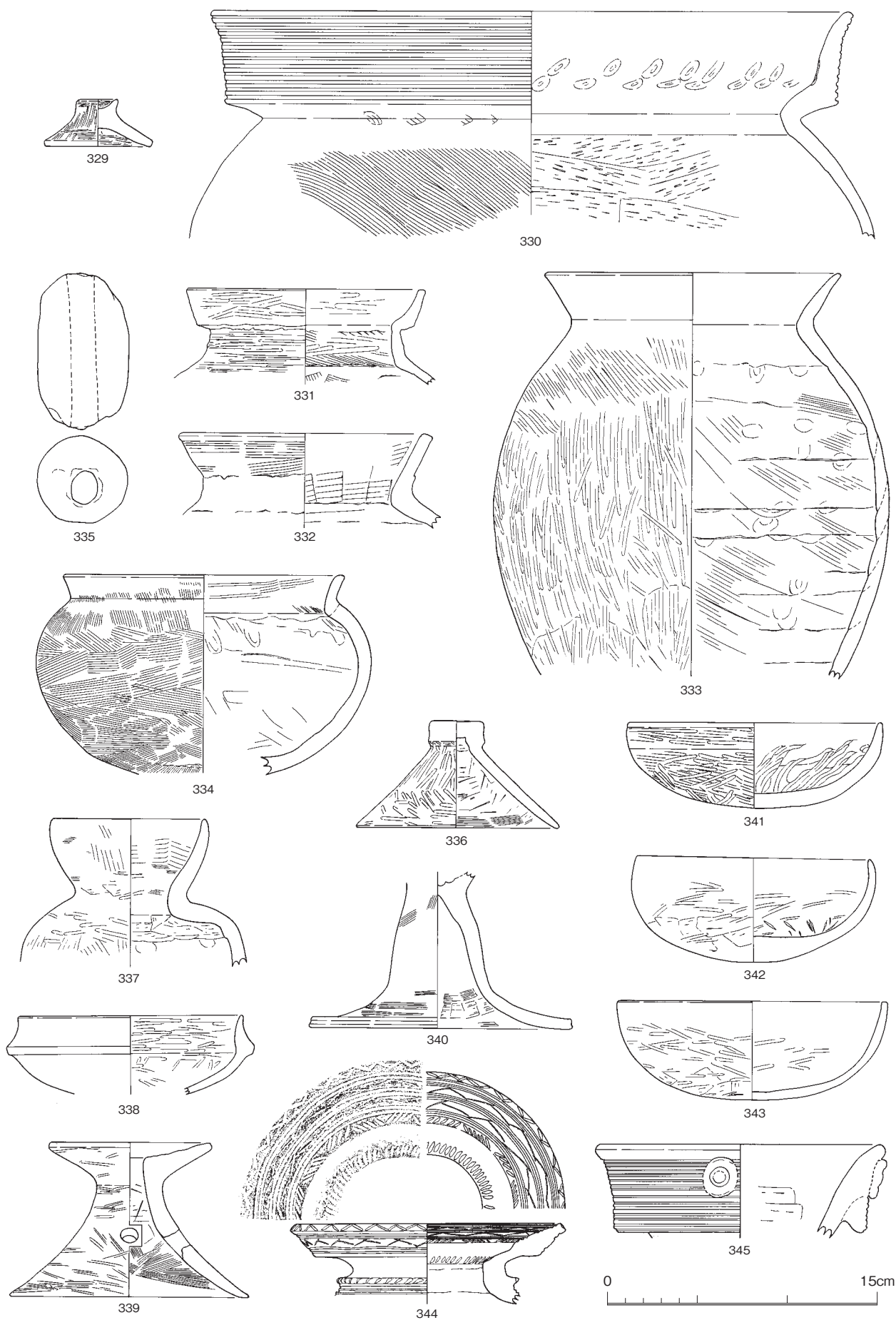
306



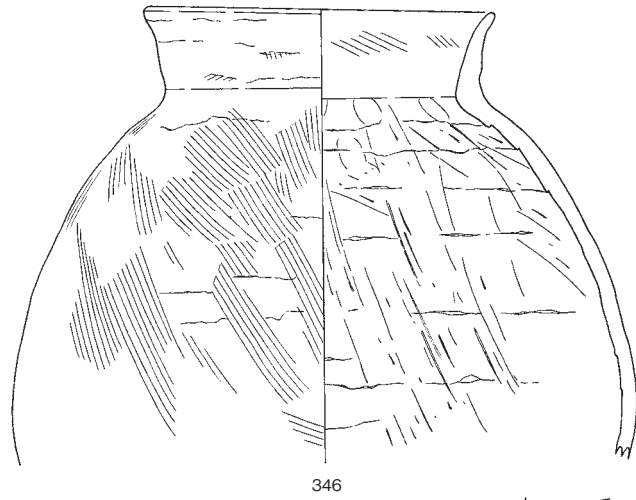
第 23 图 大河跡 (W23) 出土遺物 [S = 1/3]



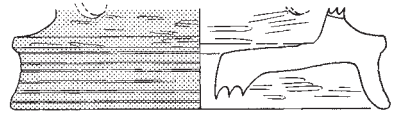
第24図 大河跡 (W23・W22・W) 出土遺物 [S = 1/3]



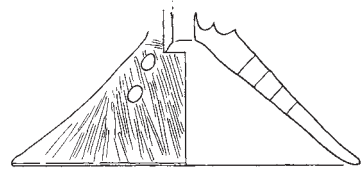
第25図 大河跡 (X24・X22・WX22) 出土遺物 [S = 1/3]



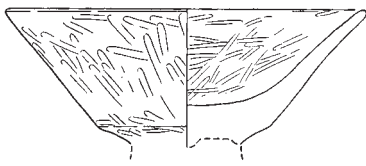
346



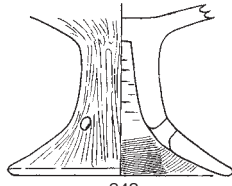
349



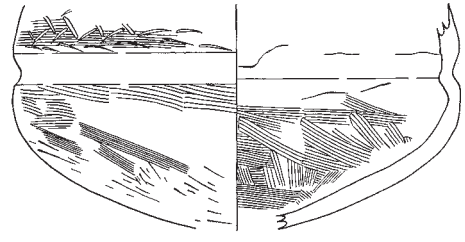
350



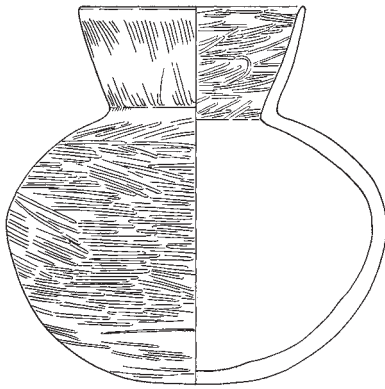
347



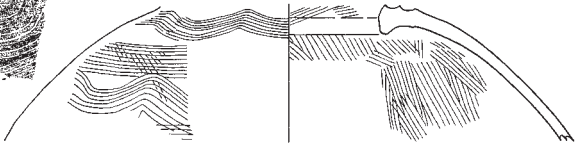
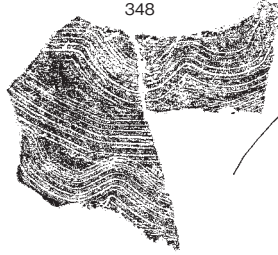
348



351



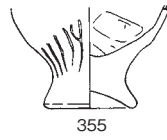
352



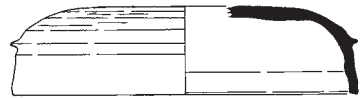
353



354



355



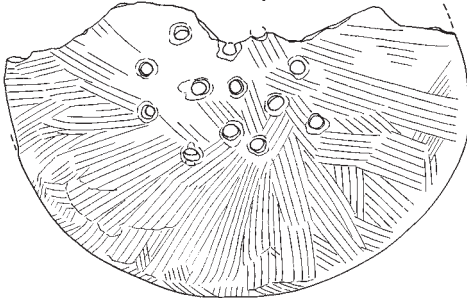
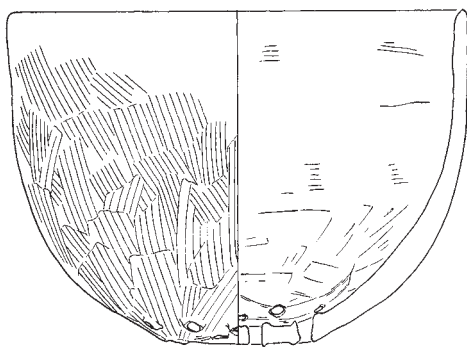
357



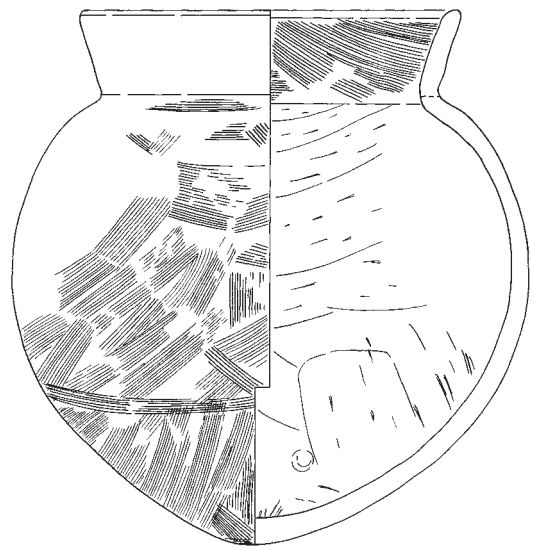
356



358



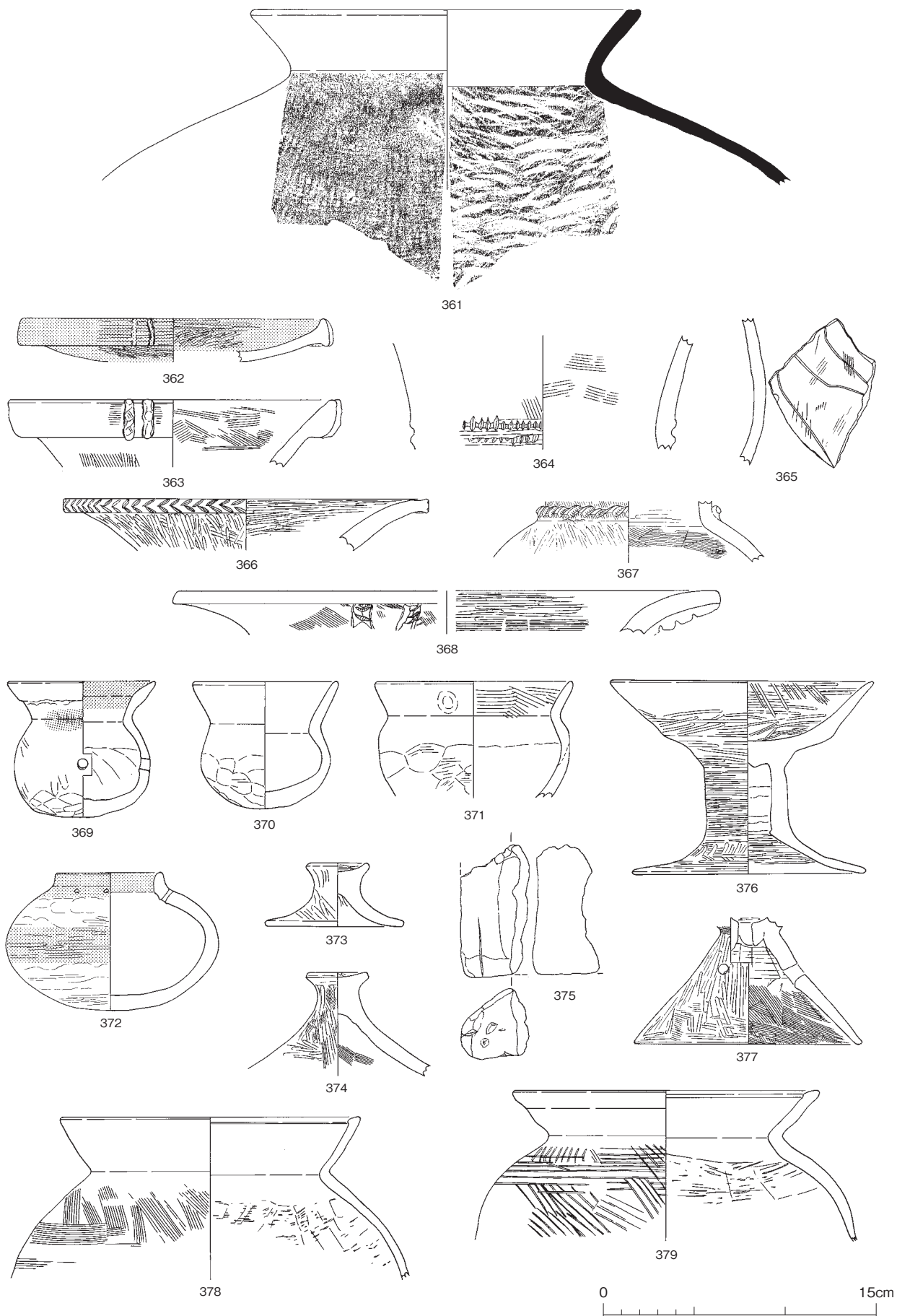
359



360

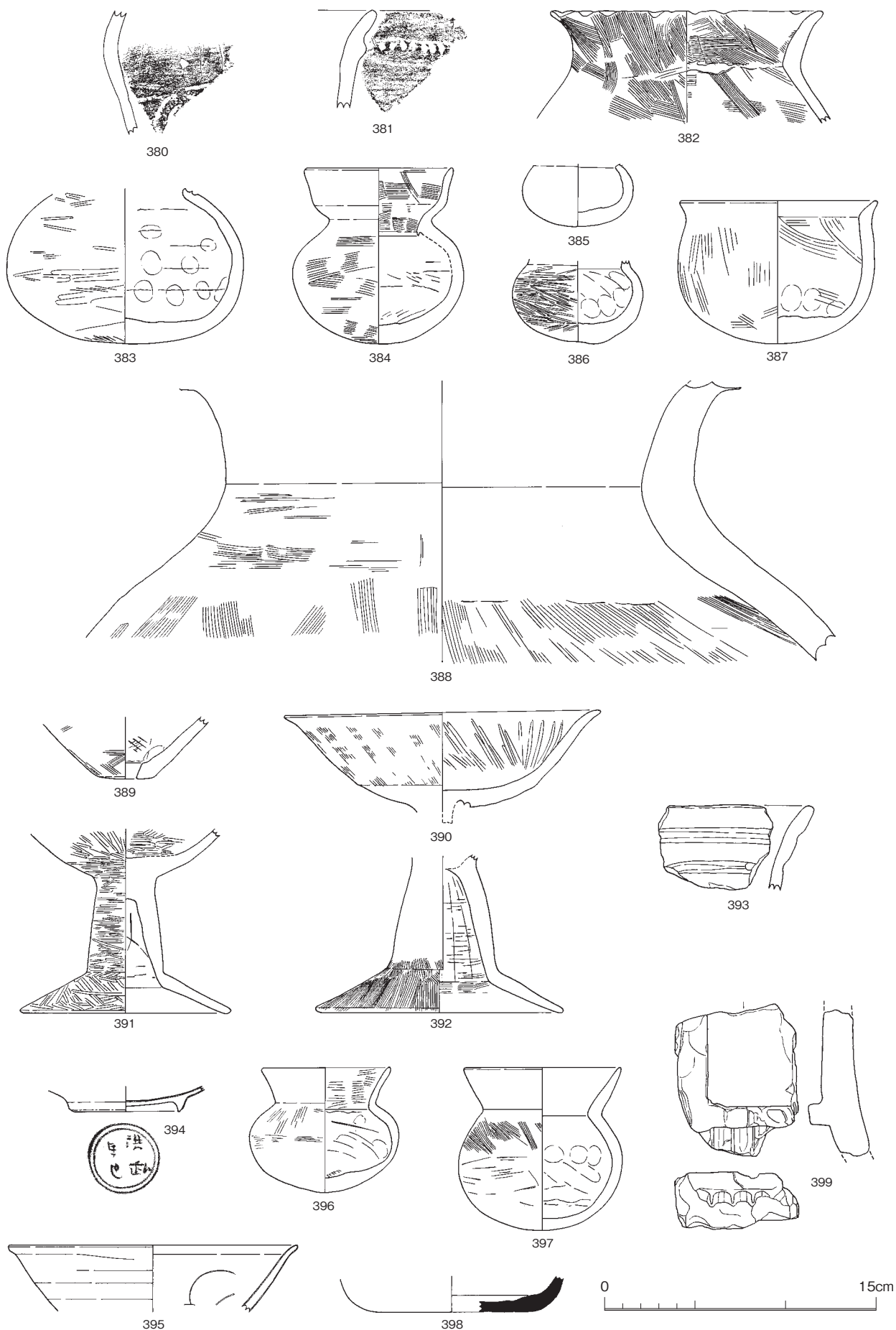


第 26 図 大河跡 (W-X22・X21・X20・Y22) 出土遺物 [S = 1/3]

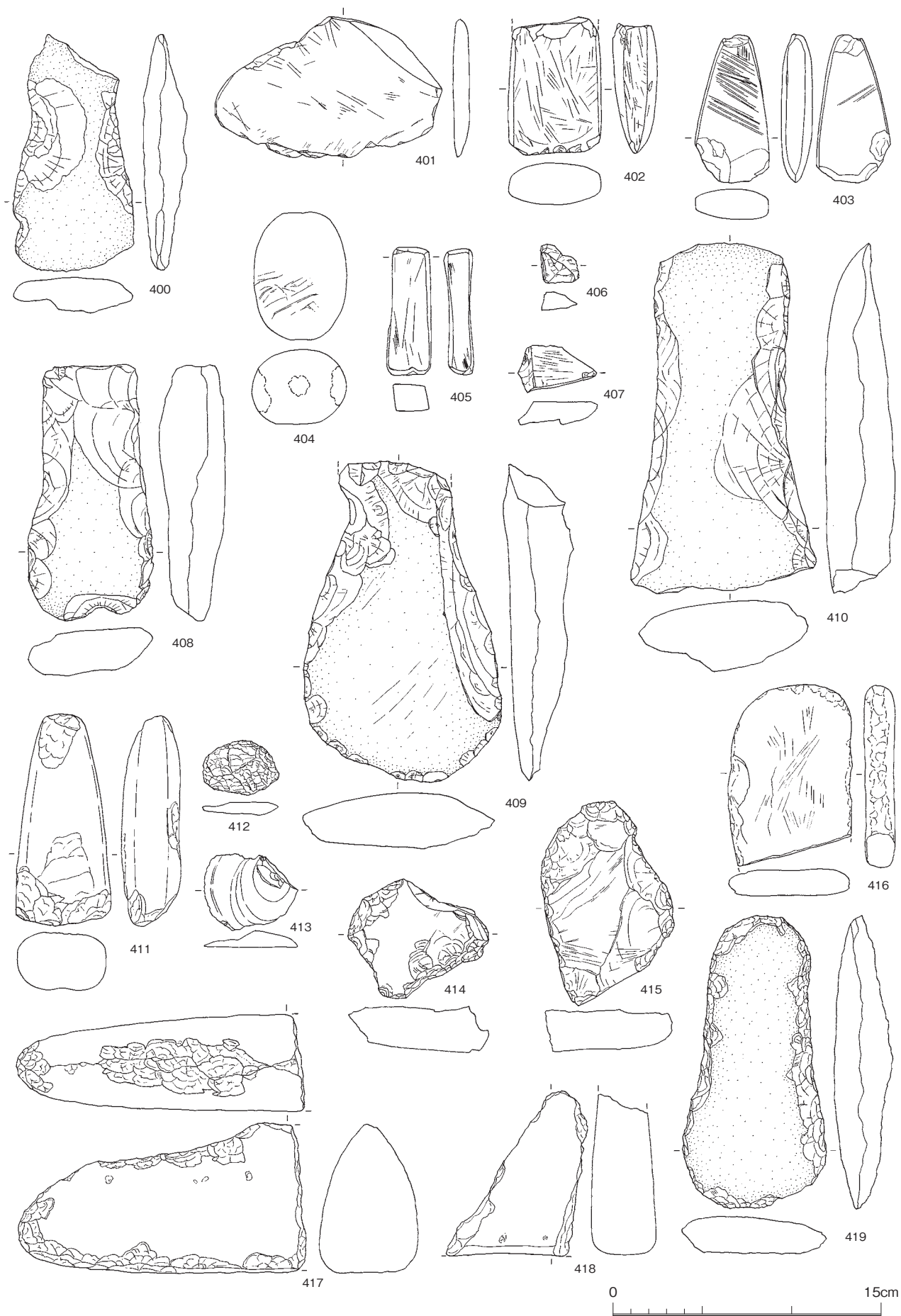


第27図 大河跡 (Y22・北半・中央畦) 出土遺物 [S = 1/3]





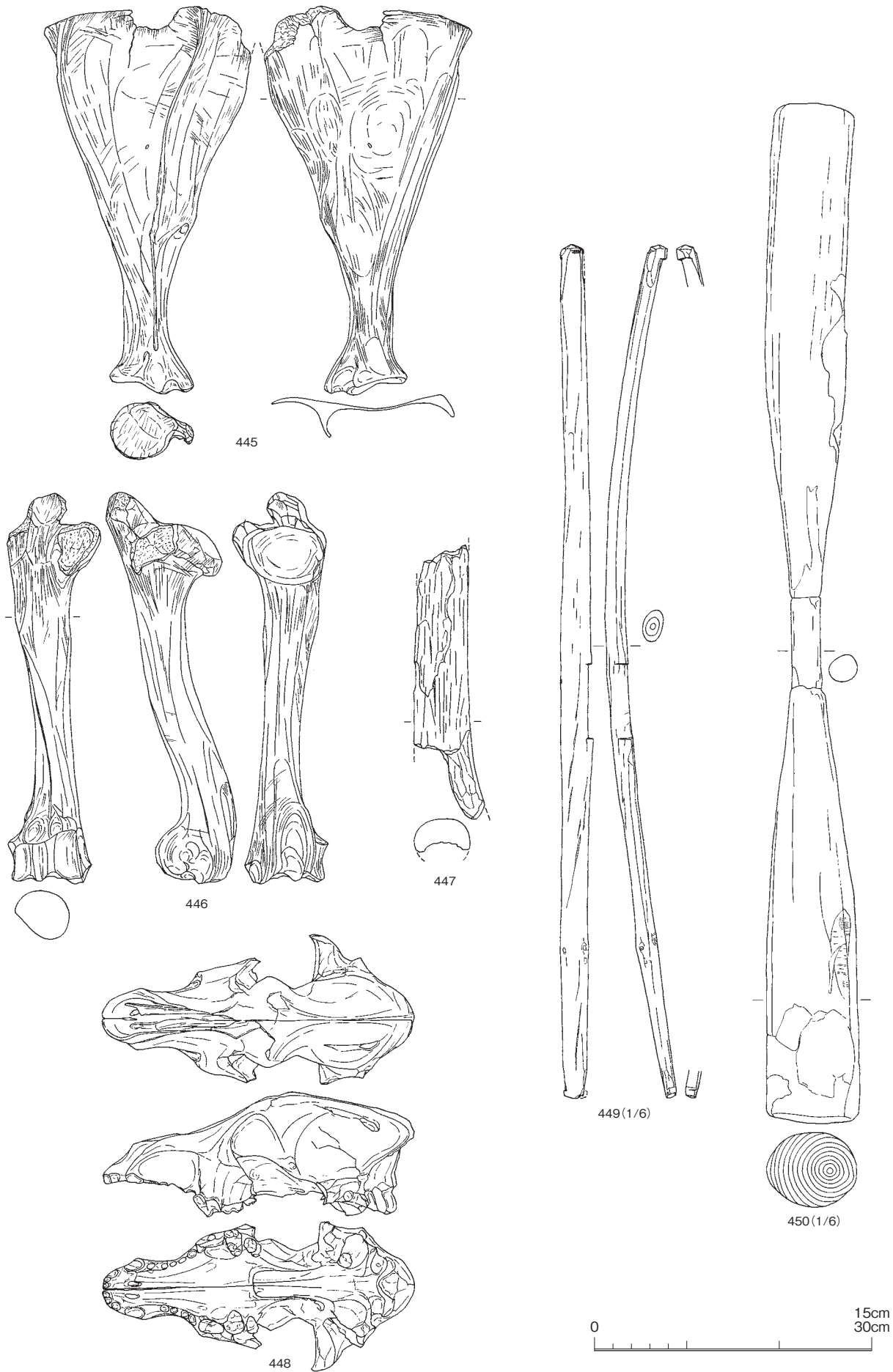
第 28 図 大河跡 (中央哇・南半・不明) 出土遺物 [S = 1/3]



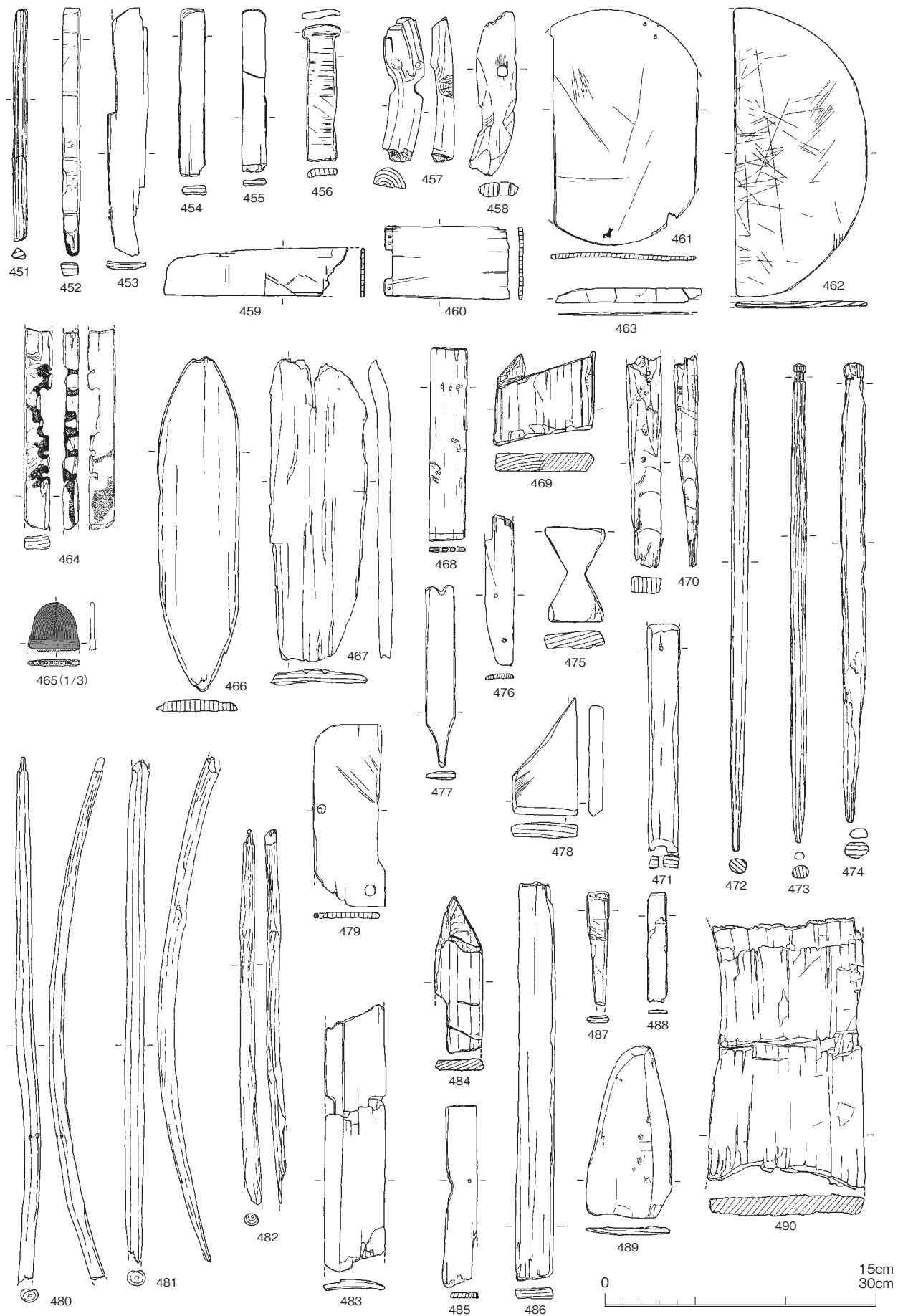
第29図 SD210・大河跡 (W25・W24・W23) 出土石製品 [S = 1/3]



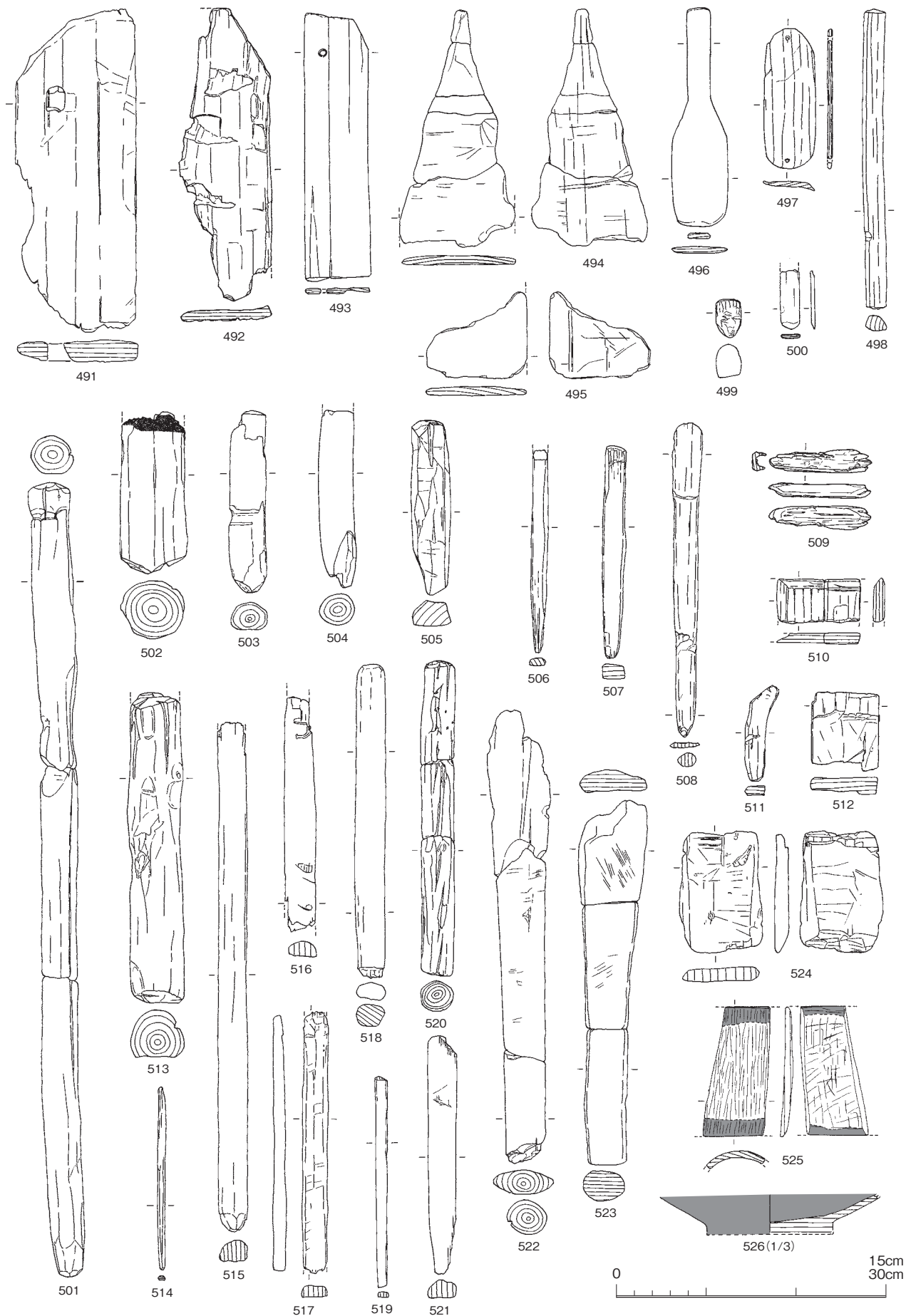
第30図 大河跡(W25・W24・W-X22・X21・北半・中央畦・南半)・SD210・包含層出土石製品・金属製品〔S=1/3・1/2〕



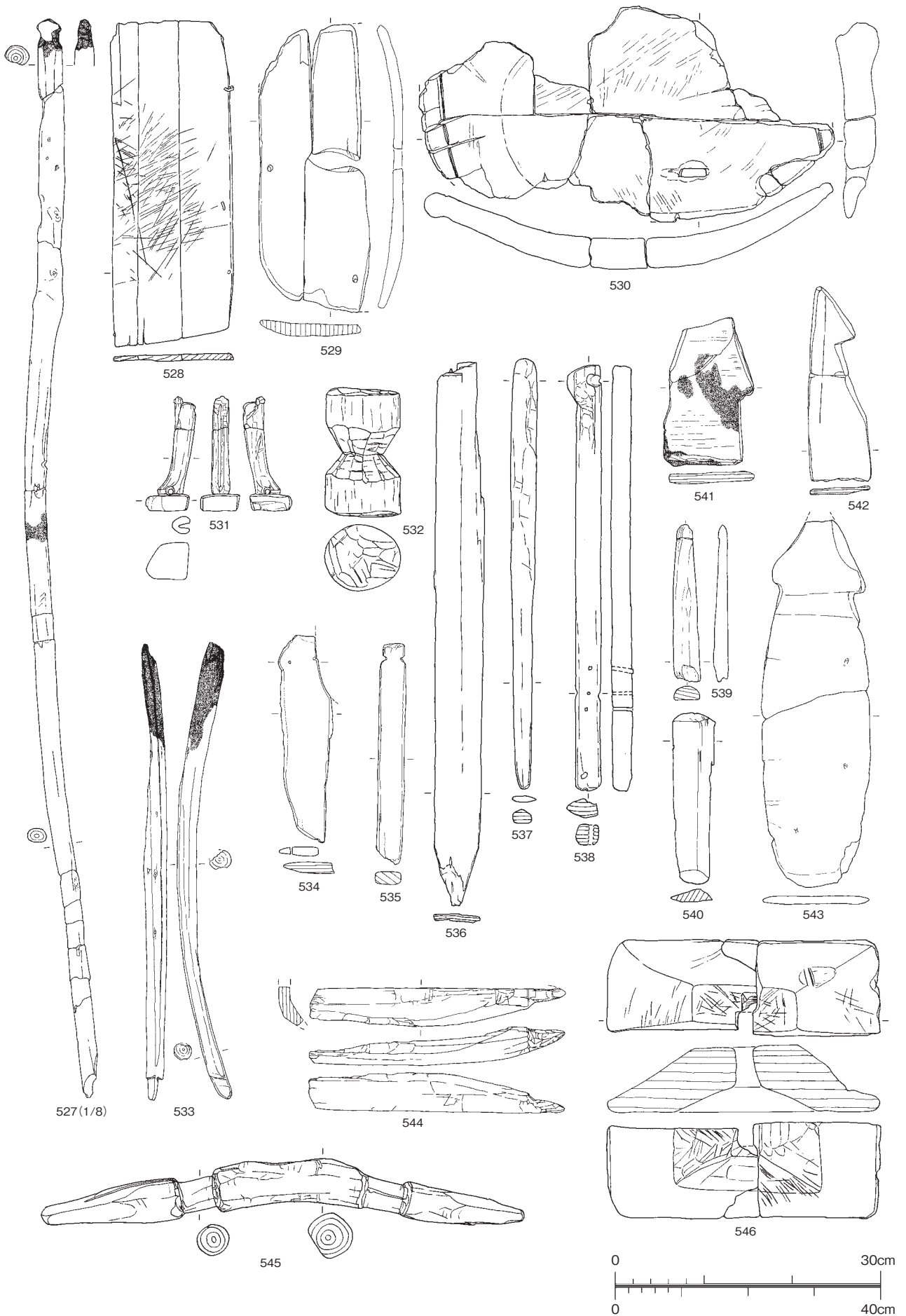
第 31 图 大河跡 (W25・W23) 出土骨・木製品 (S = 1/3・1/6)



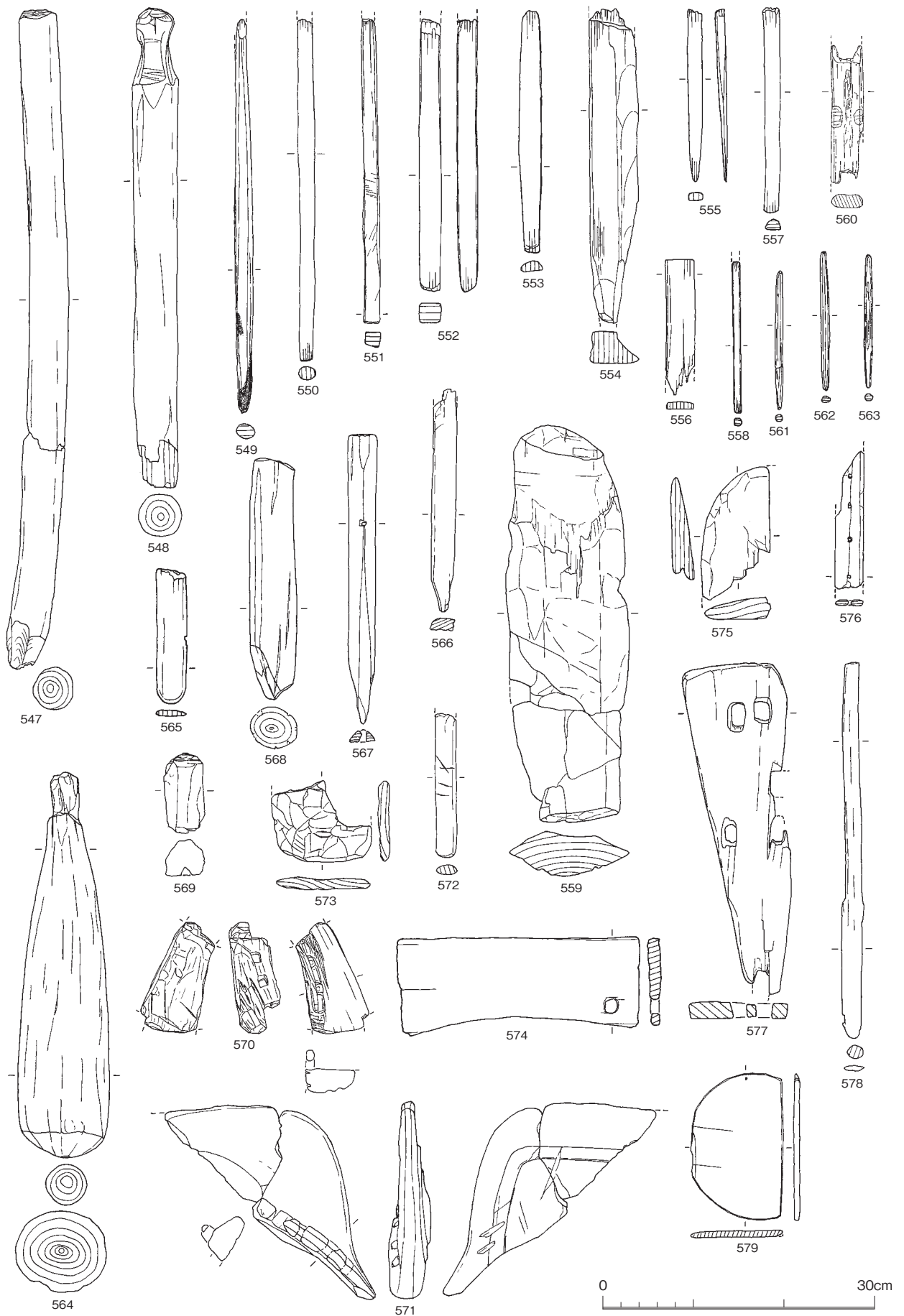
第 32 図 SD210・大河跡 (W25・W24) 出土木製品 [S = 1/6・1/3]



第 33 図 大河跡 (W24・W23) 出土木製品 [S = 1/6・1/3]

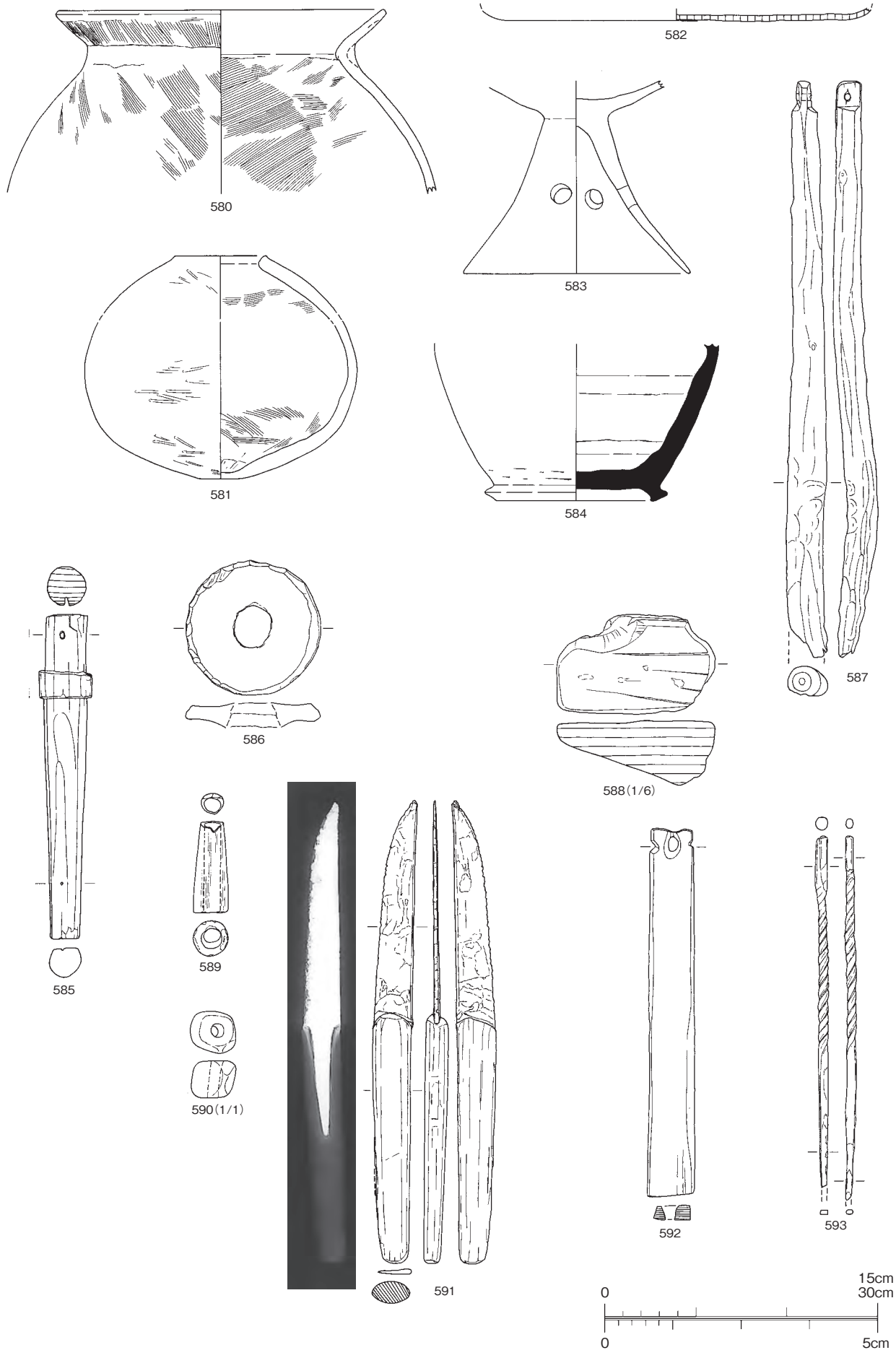


第34図 大河跡 (W24・W23・W22・W-X22・X22・X21・Y21) 出土木製品 [S = 1/6・1/8]

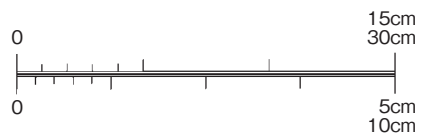
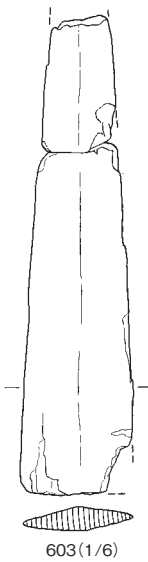
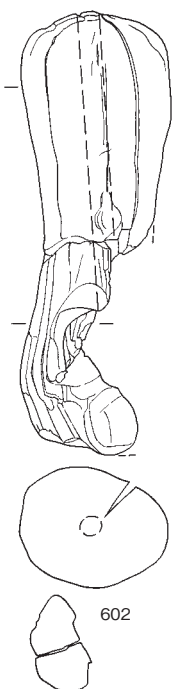
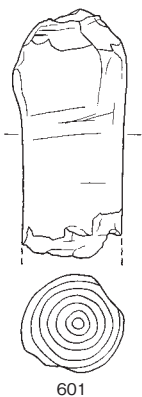
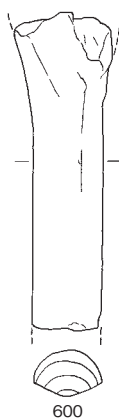
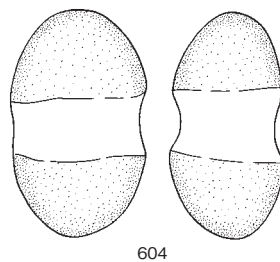
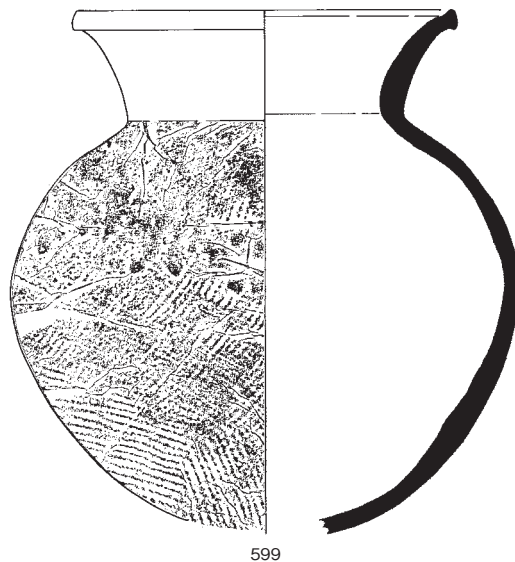
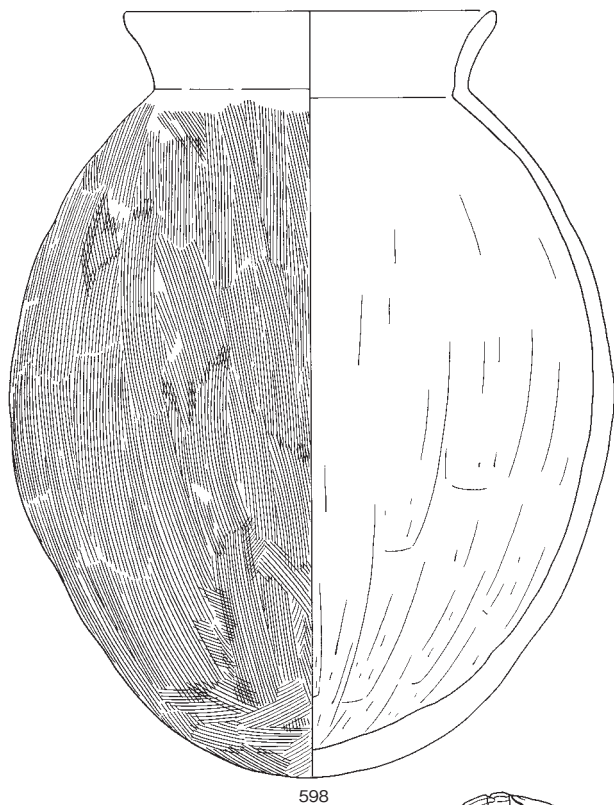
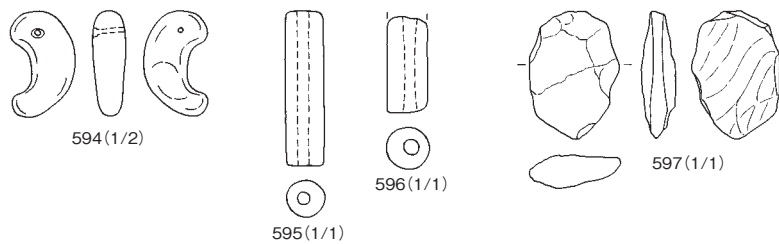


第 35 图 大河跡 (W25 ~ W21 · W·X22 · X22 · X20 · Y22 · 北半 · 中央哇 · 南半) 出土木製品 [S = 1/6]

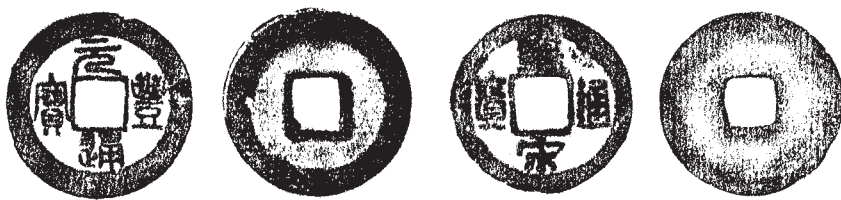
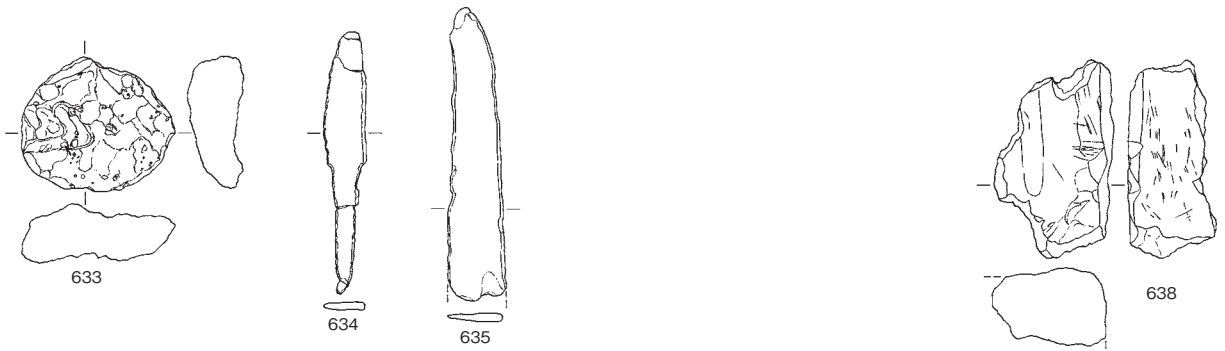
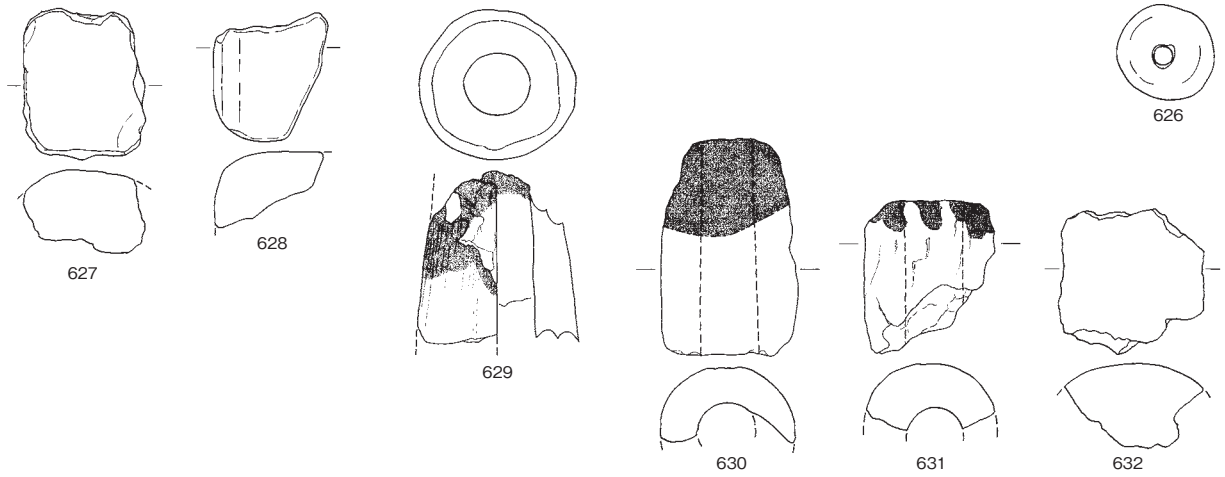
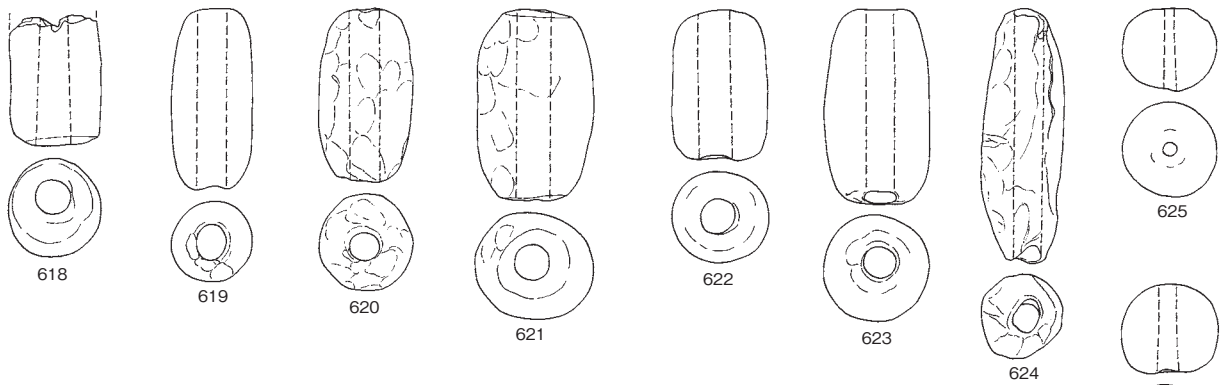
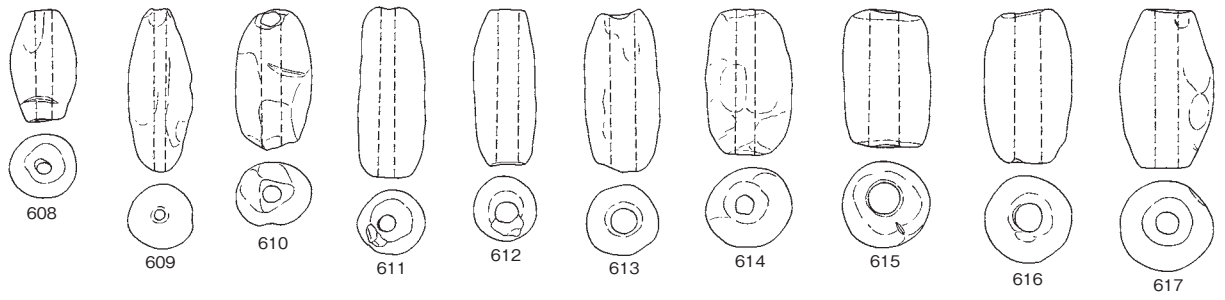




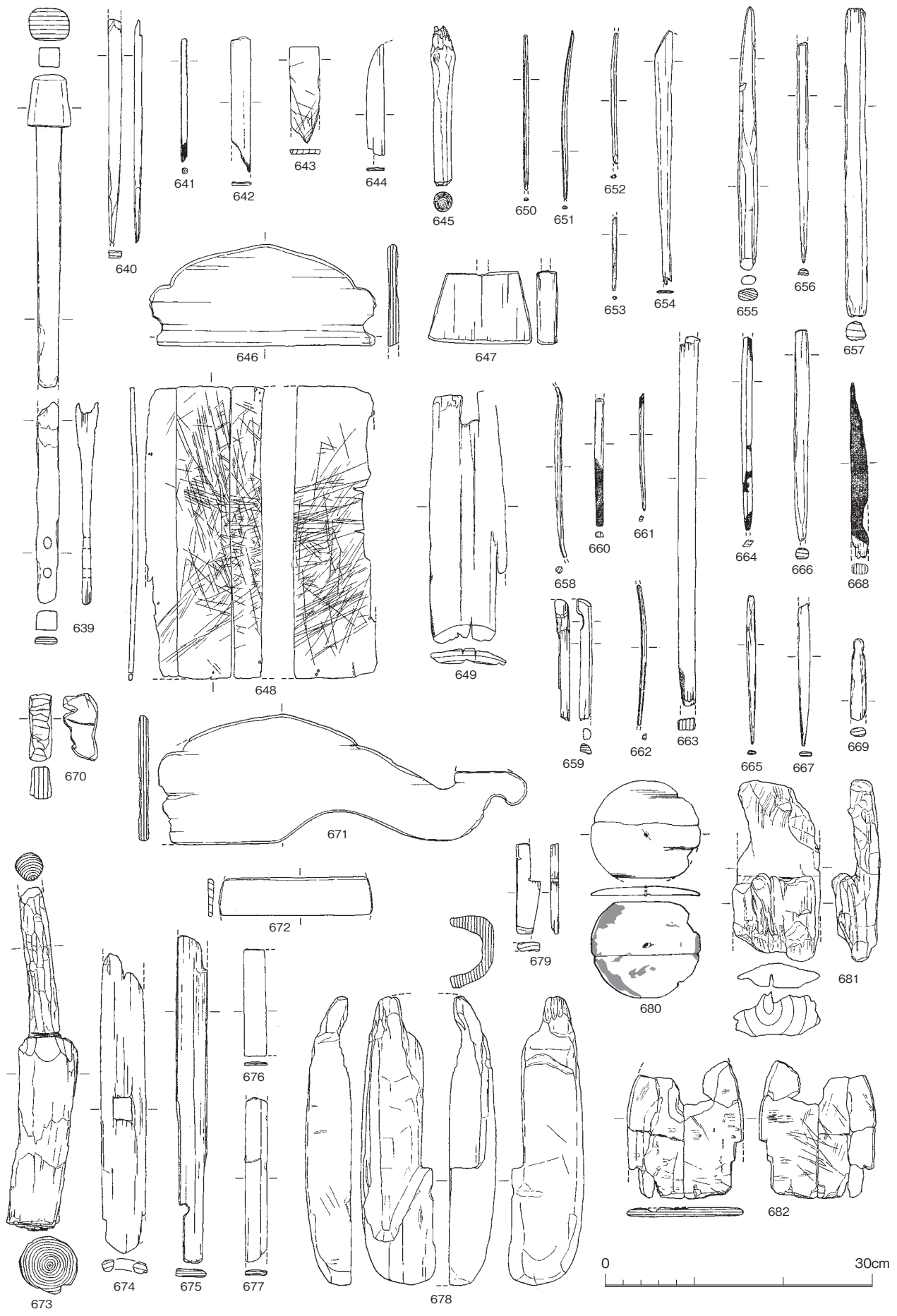
第36図 補遺 [S = 1/3 · 1/1 · 1/6]



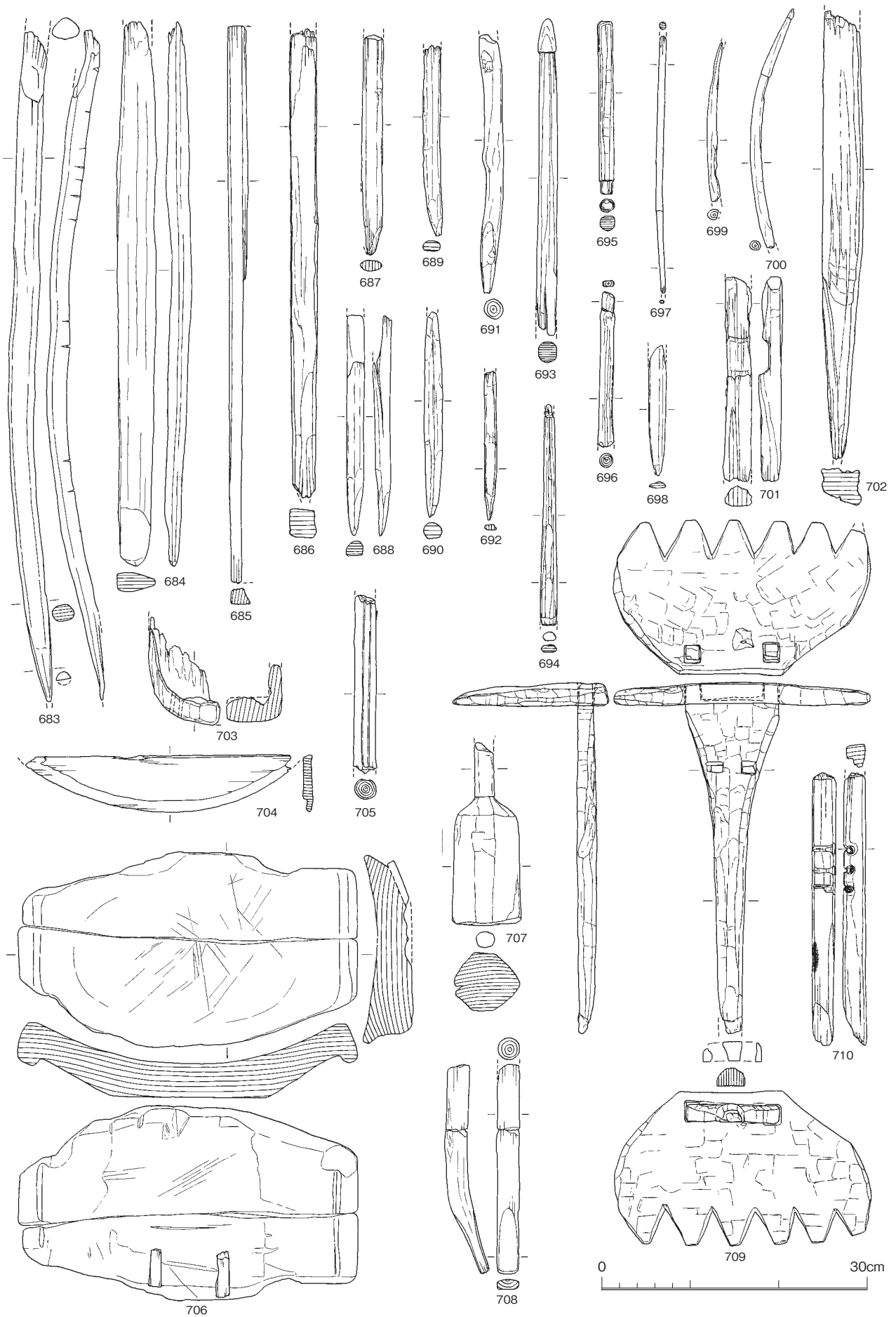
第37図 補遺 [S = 1/3 · 1/1 · 1/2 · 1/6]



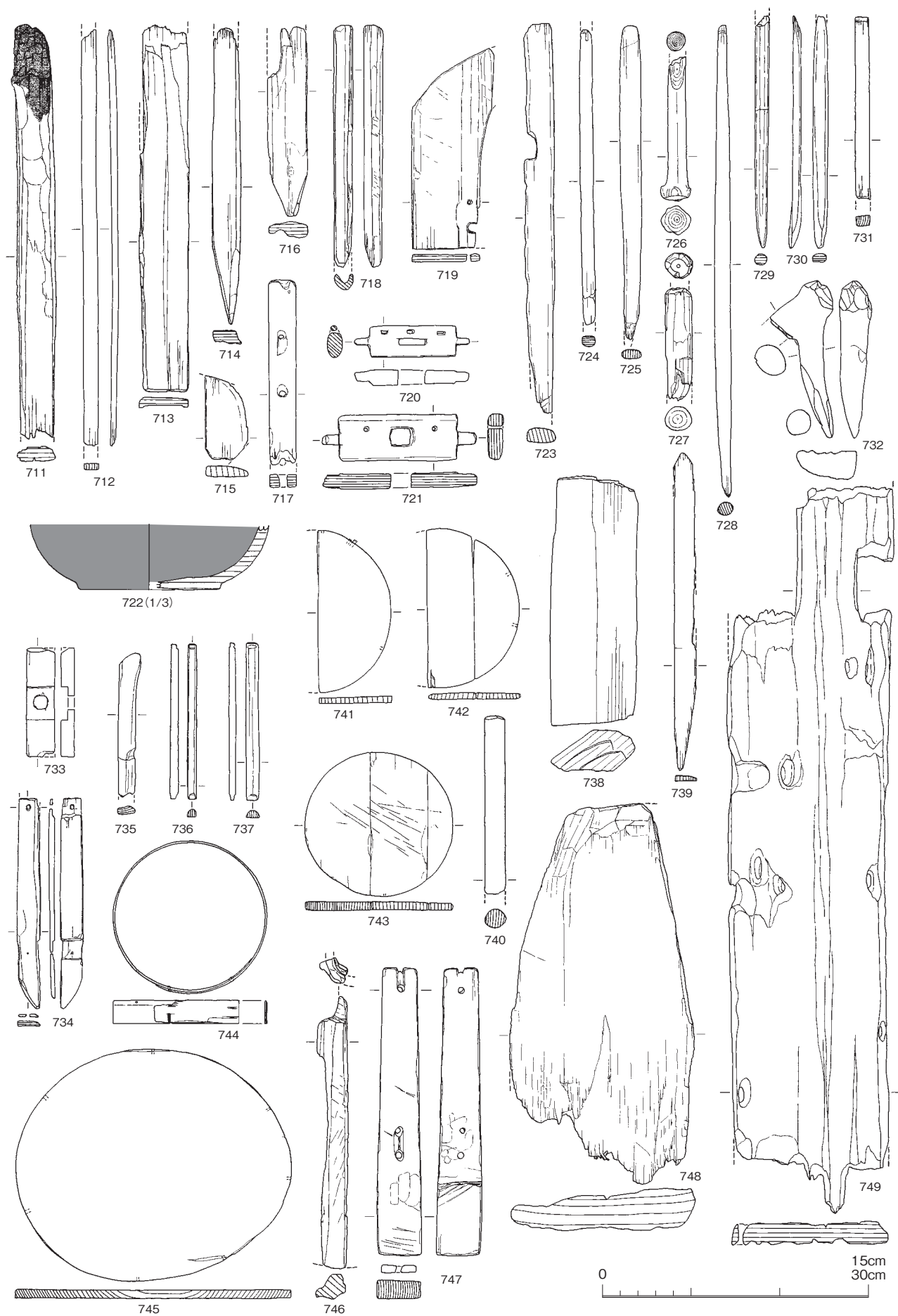
第38図 補遺 [S = 1/3 · 1/1]



第 39 図 補遺 (2区: SD303・SD222・SE251・SD240 出土木製品) [S = 1/6]



第40図 補遺 (2区:SD244出土木製品) [S=1/6]



第41図 補遺（2区：SD244・SD303出土木製品）〔S=1/6・1/3〕

第3表 土器・土製品観察表

図版	番号	遺構	器種	法量(mm)				遺存度	胎土				調整					色調		備考	実測番号	
				口径長	器高幅	胴径厚	底径摘径		頸径受径	砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	底部外面	外面			内面
8	1	4区 V24 SK200	土師器 壺	206	(56)		158	□2/12	◎		◎	擬凹線	ハケ	ナデ	ハケ・ケズリ		2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色	指頭圧痕 擬凹線7条	T406		
	2	4区 V24 SK200	土師器 高林	160	(100)		118	□5/12 底9/12	○	△	○	摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	2.5YR7/4 淡赤褐色	2.5YR7/4 淡赤褐色		T407		
	3	4区 V24 P200	土師器 壺	150	(84)		116	□3/12	◎		◎	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色	外面煤付着	T405		
	4	4区 W22 SD210	土師器 蓋		(45)		摘34	26	摘12/12	○		△	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		5YR7/3 にぶい黄褐色	5YR7/3 にぶい黄褐色		HK20	
	5	4区 W22 SD210	土師器 蓋	103	35		摘36	28	摘12/12 擬1/12			△	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ		2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色		HK21	
	6	4区 W21 SD210	土師器 小壺		(85)	88	64	頸5/12	△		△			ハケ→ナデ		ナデ		10YR8/3 浅黄褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色		HK22	
	7	4区 W22 SD210	土師器 壺	167	(39)		117	□1/12	◎				ハケ		ナデ			2.5Y8/3 淡黄色	10YR8/3 浅黄褐色		HK24	
	8	4区 W22 SD210	土師器 壺	144	(41)		122	□1/12	◎		○	摩滅	ハケ	摩滅				7.5YR8/4 浅黄褐色	7.5YR7/1 明褐色		HK26	
	9	4区 W22 SD210	須恵器 無台环	124	28		82	□3/12 底3/12	△		△	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			7.5Y6/1 灰色	7.5Y6/1 灰色	高松産	F145	
	10	4区 W22 SD210	須恵器 無台环		(35)		76	底12/12	△		△		ロクロナデ・ケズリ		ロクロナデ・ケズリ	ケズリ→ナデ		2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色	高松産	F144	
	11	4区 W22 SD210	灰釉陶器	158	(32)			□1/12					ミガキ		ミガキ			5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色		F150	
	12	4区 W22 SD210	珠洲焼 鉢		(34)		112	底3/12	○					ナデ		ナデ	回転系切	N6/ 灰色	N6/ 灰色		F146	
	13	4区 W21 SD210	土師器 壺?		(50)		63	底12/12	○		△			ナデ		ナデ	回転系切	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色		F130	
	14	4区 W21 SD210	土師器 皿	86	20		48	□2/12 底4/12	△		△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	回転系切	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色		F138		
	15	4区 W21 SD210	土師器 皿	82	21		50	□4/12 底5/12	△		△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラ切	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y6/2 灰黄色		F141		
	16	4区 W22 SD210	土師器 皿?		(13)		44	底12/12	△	△	△			ナデ		ナデ	回転系切	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色		F131	
	17	4区 W22 SD210	土師器 皿	85	21		60	□5/12 底3/12	○		△	△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色		F139	
	18	4区 W22 SD210	土師器 皿	85	22		45	□2/12 底2/12	△				ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	回転系切	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	外面黒斑あり	F136	
	19	4区 W22 SD210	土師器 皿	84	21		44	□2/12 底7/12	△		△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	回転系切	10YR7/4 にぶい黄褐色	2.5Y7/4 浅黄色		F135		
	20	4区 W21 SD210	土師器 皿	98	18		52	□2/12 底7/12	△		△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色		F142	
	21	4区 W22 SD210	土師器 皿	88	23		38	□1/12 底10/12	○		△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	回転系切	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色		F134		
	22	4区 W22 SD210	土師器 皿	92	18		59	□1/12 底2/12	△		○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラ切	2.5Y8/4 淡黄色	7.5YR8/4 浅黄褐色		F140		
	23	4区 W22 SD210	土師器 皿	98	25		60	□1/12 底12/12	△		△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	回転系切	10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色		F133		
	24	4区 W22 SD210	土師器 皿?		(26)		59	底12/12	△		△			ナデ		ナデ	回転系切	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	内面に墨痕	F132	
	25	4区 W22 SD210	土師器 椀		(24)		62	底11/12	△		○			ナデ		ナデ	回転系切	10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR6/4 にぶい黄褐色		F129	
	26	4区 W22 SD210	土師器 椀		(27)		67	台9/12	△		△			ナデ		ミガキ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y3/1 黒褐色	内面黒色土器	F143	
	27	4区 W22 SD210	土師器 椀		(15)		70	台3/12	△		○			ナデ		ミガキ	回転系切	10YR8/3 浅黄褐色	10YR3/2 黒褐色	内面黒色土器	F137	
	28	4区 W22 SD210	白磁 碗	(140)	(29)			□1/12										10Y8/1 灰白色	10Y8/1 灰白色	透明釉	FT1	
	29	4区 W22 SD210	白磁 碗	156	(36)			□1/12										5Y8/2 灰白色	5Y8/2 灰白色	透明釉	F149	
	30	4区 W22 SD210	珠洲焼 鉢		(31)			□1/12 以下	○		○							2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	重焼痕	F148	
	31	4区 W22 SD210	珠洲焼 鉢	313	(87)			□2/12	○				ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		N6/ 灰色	N6/ 灰色		F147	
9	32	4区 W25 大河跡	土師器 壺	158	(54)		142	□3/12	◎	◎	△	ハケ・ナデ	ハケ	ナデ	ナデ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色		T271		
	33	4区 W25 大河跡	土師器 壺	168	(85)		146	□3/12	◎	△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ		2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色		T272		
	34	4区 W25 大河跡	土師器 壺	150	(104)	186	137	□9/12	◎	△	◎	ナデ	ハケ		ケズリ→ナデ		2.5Y6/3 にぶい黄色	2.5Y4/1 黄灰色	外面黒斑あり 内面ヨコレ	T149		
	35	4区 W25 大河跡	土師器 壺	158	(128)	210	136	□3/12	○		△	ナデ	ハケ	ハケ	ケズリ		2.5Y7/3 浅黄色	10YR8/6 黄褐色	外面煤付着 内面ヨコレ	T154		
	36	4区 W25 大河跡	土師器 壺	192	(98)		168	□1/12 頸3/12	◎	◎		ナデ	ハケ	ハケ	ハケ・ケズリ		10YR8/6 黄褐色	10YR8/6 黄褐色	外面黒斑あり	T273		
	37	4区 W25 大河跡	土師器 壺	156	(136)	222	138	□3/12	○	○	○	ナデ	ナデ?	ハケ→ナデ	ナデ		7.5YR7/1 明褐色	2.5Y7/3 浅黄色	外面煤付着	T148		
	38	4区 W25 大河跡	土師器 壺	204	(96)		166	□1/12 頸3/12	◎		△	△	ハケ→ナデ	ハケ	ナデ・ハケ	ナデ		2.5Y3/1 黒褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	外面煤付着 内面ヨコレ	T146	
	39	4区 W25 大河跡	土師器 壺	298	(191)		290	□1/12	◎		△	ナデ	ハケ	ナデ	ハケ・ケズリ		10YR7/6 明黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	内外面鉄分付着	EE212		
10	40	4区 W25 大河跡	土師器 小壺	104	141	130	92	□2/12	○	△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ナデ・ケズリ	ハケ	10YR7/3 にぶい黄褐色	2.5Y7/3 浅黄色	外面煤付着 内面ヨコレ	T147		
	41	4区 W25 大河跡	土師器 小壺	98	102	104	88	□7/12 底12/12	△	△	△	ナデ	ハケ・ミガキ・ケズリ	ナデ	ケズリ	ミガキ→ケズリ	10YR6/6 明黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	外面黒斑あり	F153		
	42	4区 W25 大河跡	土師器 小壺	132	(126)	130	121	□11/12	△	△	△	ナデ	ハケ・ナデ	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ		7.5YR7/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	外面煤付着 吹きこぼれ痕あり 内面ヨコレ	T150		
	43	4区 W25 大河跡	土師器 壺	180	(81)		118	□3/12	◎		◎	擬凹線	ナデ・ハケ	ナデ	ハケ・ケズリ		7.5YR8/4 浅黄褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色	擬凹線6条 外面一部煤付着	T260		

第3表 土器・土製品観察表 (1)



















図版	番号	遺構	器種	法量 (mm)					遺存度	胎土				調整					色調		備考	実測番号		
				口径長	器高幅	胴径厚	底径摘径	頸径受径		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	底部外面	外面	内面				
28	396	4区大河跡	土師器壺	70	79	82	7	55	□2/12	△	△	△		ナデ	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色		EE201		
	397	4区大河跡	土師器壺	86	90	91	10	75	□7/12				○	ナデ	ハケ・ケズリ	ナデ	ナデ	ケズリ	10YR8/4 浅黄橙色	5YR8/4 淡橙色		EE200		
	398	4区大河跡	須惠器無台坏	(84)	(67)	(27)			底5/12	○	△				ロクロナデ		ロクロナデ	ヘラ切→ナデ	5Y8/2 灰白色	5Y8/2 灰白色	高松産	T404		
	399	4区大河跡	瓦塔	(84)	(67)	(27)			破片	○	△	○							2.5Y8/3 淡黄色		屋敷部 緑長押・丸瓦	SH198		
36	580	1区SD235	土師器壺	178	(102)				□3/12	○	△	△		ハケ	ハケ・ナデ	ナデ	ハケ		淡灰褐色	淡灰褐色	外面黒斑あり	FJ88		
	581	1区SD235	土師器無頸壺	49	123	150	34		□1/12	○	△	△		ミガキ?	ミガキ?	ナデ	ハケ・ナデ・ケズリ	ミガキ?	淡灰褐色	黒灰色	一部赤彩残る 外面黒斑あり	FJ89		
	583	1区SD235	土師器高林	(105)			123	35	脚3/12	◎	△	△		摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	橙灰褐色	灰褐色	透孔 孔径10.5mm	FJ87	
	584	1区AA6大河跡	須惠器壺	(85)			100		台10/12	○	△				ナデ・ケズリ		ナデ			灰色	灰色	底部・外面煤付層 高松産	N5	
	586	3区Y18SD222	環状土製品	74	74	31			完形	○	○	△								淡褐色	淡褐色	高杯受部再利用か	T262	
	589	3区SD222	注口?	70	19	19			完形?														別用途再利用か	T263
37	598	寺中B遺跡5区旧河跡	土師器壺	148	305	240	15	124	□1/12 脚9/12	◎	◎			ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ						T2	
	599	寺中B遺跡5区旧河跡	須惠器広口壺	150	(209)	201		110	□6/12	△					ナデ	タタキ	ナデ	ナデ					T1	
38	608	2区SD240	土鍾	45	26	26			ほぼ完形	◎										淡褐色		重25.0g 孔径6.0mm	OH53	
	609	2区SD240	土鍾	65	26	26			ほぼ完形	○		△								2.5Y7/3 浅黄色		重35.7g 孔径4.0mm	T424	
	610	2区SD240	土鍾	56	30	25			完形	△	◎	△								10YR7/3 にぶい黄橙色		重33.2g 孔径8.0mm	T425	
	611	2区SD240	土鍾	68	27	26			ほぼ完形	◎		△								10YR8/2 灰白色		重50.5g 孔径7.0mm	T426	
	612	2区SD240	土鍾	62	26	26			完形	△										淡灰褐色		重41.0g 孔径9.0mm	OH52	
	613	2区SD240	土鍾	64	30	30			完形	◎										淡橙褐色		重43.3g 孔径10.0mm	OH51	
	614	2区SD240	土鍾	58	35	31			完形	○	△									10YR6/3 にぶい黄橙色		重60.1g 孔径8.0mm 黒斑あり	T427	
	615	2区SD240	土鍾	55	35	34			完形	△		△								5YR7/6 橙色		重50.9g 孔径11.0mm	T430	
	616	2区SD240	土鍾	61	35	35			完形	○	△	△								10YR7/3 にぶい黄橙色		重62.7g 孔径11.0g 黒斑あり	T429	
	617	2区SD240	土鍾	63	37	37			完形	○										淡褐色		重83.0g 孔径9.0mm	OH54	
	618	2区SD240	土鍾	(52)	36	39			欠損	△		△								10YR7/4 にぶい黄橙色		重65.5g 孔径14.0mm	T431	
	619	2区SD240	土鍾	72	32	32			ほぼ完形	○	△	△								7.5YR7/4 にぶい橙色		重60.1g 孔径12.0mm	T428	
	620	2区SD240	土鍾	69	37	37			完形	△										淡褐色		重88.8g 孔径11.0mm	OH50	
	621	2区SD240	土鍾	76	46	42			完形	○	△									淡褐色		重135.0g 孔径13.0mm	OH49	
	622	2区SD244	土鍾	60	38	36			完形	△		◎								淡黄灰色		重81.7g 孔径13.0mm	E111	
	623	2区SD244	土鍾	78	42	42			完形			◎	◎							淡黄灰色		重125.0g 孔径12mm	E112	
	624	2区SD244	土鍾	102	34	32			完形	△	○	△	○							暗桃灰褐色		重73.2g 孔径13.0mm 黒斑あり	E113	
	625	2区SD244	土鍾	38	37	32			完形	△	△									暗灰褐色		重39.1g 孔径6.0mm 外面煤付層	E110	
	626	2区SD244	土鍾	38	34	30			完形	△										淡黄灰色		重39.8g 孔径8.0mm	E109	
	627	3区Y16SD222	鞆羽口	(58)	(48)	(30)			断片														重64.7g	T265
628	3区Y16SD222	炉壁?	(51)	(45)	(22)			断片															重44.0g	T264
629	2区SD240	鞆羽口	(69)	(63)	(60)			断片	○		○								2.5Y8/2 灰白色	10YR8/4 浅黄橙色	滓付層		T432	
630	2区SD244	鞆羽口	(87)	53	(30)			欠損	△	△	△								淡橙灰色			滓付層	E124	
631	2区SD244	鞆羽口	(61)	(51)	(26)			欠損	○	△	△	△							淡灰褐色				H125	
632	2区SD244	鞆羽口	(58)	(56)	(33)			断片															重72.3g	T267
638	2区SD244	炉壁?	(79)	(45)	(30)			断片																T266

※法量欄の ( ) は現存値を示している。

※胎土欄の「骨」は海綿骨針、「赤」は赤色粒を示す。

◎・○・△は、確認できた量を相対的に示したものであり、確認されなかったものは空欄となっている。

第3表 土器・土製品観察表 (10)



第4表 石製品・金属製品・骨観察表

図版	番号	遺構	器種	法量(mm)			遺存度	色調	備考	実測番号	
				長	幅	厚					
29	400	4区 SD210	打製石斧	(133)	66	19	基部欠損	2.5Y5/3 黄褐色	凝灰岩 重190g	HK27	
	401	4区 W24 大河跡	石庖丁?	(126)	79	9	ほぼ完形	10GY4/1 暗緑灰色	粘板岩 重105.0g	EE237	
	402	4区 W24 大河跡	磨製石斧	(75)	52	24	基部欠損	2.5YR2/1 赤黒色	蛇紋岩 重185.0g	N2	
	403	4区 W25 大河跡	磨製石斧	83	41	17	完形	10YR1.7/1 黒色	蛇紋岩 重95.7g	SH181	
	404	4区 W24 大河跡	敲石	72	52	42	完形	5Y6/3 オリーブ黄色	砂岩 重230.0g 全周敲打痕	EE235	
	405	4区 W24 大河跡	砥石	71	25	15	完形	2.5Y8/4 淡黄色	流紋岩 重33.7g 砥面4面	EE240	
	406	4区 W24 大河跡	剥片	22	22	10		10GY4/1 暗緑灰色	変質流紋岩 重4.4g 施溝分割痕あり	C1	
	407	4区 W24 大河跡	剥片	44	26	13		10Y6/2 オリーブ灰色	変質流紋岩 重13.7g 研磨面あり 施溝分割痕か	C2	
	408	4区 W24 大河跡	打製石斧	(144)	69	24	刃部欠け	7.5Y7/2 灰白色	凝灰岩 重430.0g	EE241	
	409	4区 W24 大河跡	打製石斧	(179)	110	31	基部欠損	7.5Y6/2 灰オリーブ色	凝灰岩 重840.0g	N3	
	410	4区 W24 大河跡	打製石斧	(197)	(102)	39	刃部欠損	5Y6/4 オリーブ黄色	凝灰岩 重922.0g	EE242	
	411	4区 W23 大河跡	磨製石斧	(118)	53	32	刃部欠損	5YR3/4 暗赤褐色	内外面鉄分付着 安山岩 重310.0g	T304	
	412	4区 W23 大河跡	剥片	30	42	9		N8/ 灰白色	石英 重11.1g	T300	
	413	4区 W23 大河跡	剥片	42	52	9		10G4/1 暗緑灰色	変質流紋岩 重16.4g	T299	
	414	4区 W23 大河跡	石核	67	78	25		5G6/1 緑灰色	変質流紋岩 重115.0g	T298	
	415	4区 W23 大河跡	石核	114	72	30		7.5Y2/1 黒色	粘板岩 重290.0g	T305	
	416	4区 W23 大河跡	砥石?	(94)	69	17	破片	7.5Y5/1 灰色	側面全体に敲打痕 凝灰岩 重190.0g	T301	
	417	4区 W23 大河跡	麁筋形石器	(160)	83	54	1/2	5Y8/4 淡黄色	全体に調整痕 凝灰岩 重870.0g	T302	
	418	4区 W23 大河跡	砥石	(69)	(93)	42	破片	5YR3/4 暗赤褐色	内外面鉄分付着 安山岩 重330.0g	T303	
419	4区 W23 大河跡	打製石斧	164	80	30	完形	2.5Y6/6 明黄褐色	内外面鉄分付着 安山岩 重440.0g	T306		
30	420	4区 W-X22 大河跡	打製石斧	(97)	60	27	基部欠損	2.5Y5/3 黄褐色	玄武岩 重255.0g 内外面鉄分付着	F207	
	421	4区 W-X22 大河跡	石錘	126	71	52	完形	2.5Y6/2 灰黄色	凝灰岩 重610.0g	SH183	
	422	4区 W24 大河跡	炉石	(324)	192	168	破損	10YR6/2 灰黄褐色	安山岩か 重17.6kg 被熱 煤付着	F187	
	423	4区 W-X22 大河跡	剥片	87	53	21		10YR6/8 明黄褐色	変質流紋岩 重85.0g 未成品か 内外面鉄分付着	F206	
	424	4区 X21 大河跡	石錘	139	72	55	完形	7.5YR7/8 黄褐色	凝灰岩か 重650.0g	SH47	
	425	4区 北半 大河跡	砥石	(76)	47	25	欠損	10YR4/6 褐色	流紋岩 重122.0g 内外面鉄分付着 4面	EE224	
	426	4区 北半 大河跡	砥石	(55)	35	6	欠損	2.5Y7/6 明黄褐色	凝灰岩 重40.1g 中央擦痕 2面	EE221	
	427	4区 中央趾 大河跡	砥石	108	36	39	完形	10YR7/3 にぶい黄褐色	凝灰岩 重215.0g 内外面鉄分付着 中央擦痕 2面	EE222	
	428	4区 中央趾 大河跡	石錘	104	71	52	完形	10YR7/6 明黄褐色	砂岩 重491.0g 内外面鉄分付着	EE223	
	429	4区 南半 大河跡	砥石?	(94)	(92)	33	欠損	7.5YR4/4 褐色	凝灰岩 重442.0g 内外面鉄分付着	EE226	
	430	4区 包含層	石剣	(46)	25	5	欠損	10GY3/1 暗緑灰色	粘板岩 重8.4g	EE225	
	431	4区 W23 大河跡	管玉	26	6	6	完形	2.5GY7/1 帯オリーブ灰色	変質凝灰岩 重0.82g 両面穿孔	Y25	
	432	4区 W25 大河跡	管玉	17	5	5	完形	7.5Y6/3 オリーブ黄色	変質凝灰岩 重0.68g 両面穿孔	G20	
	433	4区 W-X22 大河跡	勾玉	13	8	4	完形	N8/ 灰白色	変質流紋岩 重0.34g 両面穿孔か	G21	
	434	4区 W24 大河跡	丁字頭 定形勾玉	(43)	(23)	(13)	破片	10G4/1 暗緑灰色	碧玉 重8.92g 片面穿孔か 孔周囲溝5条か	A53	
	435	4区 W24 大河跡	勾玉	42	24	12	完形	10BG1.7/1 青黒色	滑石 重16.48g 片面穿孔	Y24	
	436	4区 W23 大河跡	勾玉	34	22	14	完形	7.5R1.7/1 赤黒色	滑石 重15.09g 両面穿孔 使用痕顕著	N17	
	437	4区 X21 大河跡	勾玉	28	17	7	完形	10GY3/1 暗緑灰色	蛇紋岩 重3.96g 両面穿孔	A48	
	438	4区 W22 SD210	鉄製品 刀子	(198)	24	4.5		7.5YR3/2 黒褐色	刃長165.0mm 重49.4g 柄孔径約4mm	T414	
	439	4区 W22 SD210	鉄製品 刀子	282	25	5.5		7.5YR4/4 褐色	刃長207.0mm 重107.9g 柄孔径4.3mm	T416	
	440	4区 W22 SD210	鉄製品 不明	(97)	(43)	6		7.5YR4/3 褐色	不明鉄製品 重35.5g 飾金具か	T412	
	441	4区 W23 大河跡	銅製品 鏝	(104)	17	5		7.5YR3/2 黒褐色	有茎式 重7.1g	T411	
	30	442	4区 W25 大河跡	鉦	62	43	18		10YR3/2 黒褐色	内外面鉄分付着	T409
		443	4区 W24 大河跡	鉄製品 残欠	47	39	23			台付円錐形 重80.9g	EE239
444		4区 南半 大河跡	鉄製品 釘	(69)	13	5			角釘 重10.0g	T410	
445		4区 W25 大河跡	シカ 肩甲骨	骨長 210	骨幅 111	面幅 3			右肩甲骨 重71.3g 焼灼痕なし 関節窩幅33mm 関節厚31mm 腕角幅44mm 肩甲骨幅25mm	N7	
446		4区 W25 大河跡	シカ 上腕骨	212	50	26			右上腕骨 重100.0g	N8	
447		4区 W25 大河跡	シカ? 骨	(148)	(30)	(17)			重52.1g	N9	
448		4区 W25 大河跡	イヌ 頭骨	骨長 169	骨幅 (81)	骨厚 67			重125.0g 中世犬 雌犬か	N36	
449		3区 Y19 SD222	ガラス玉	8	7	7			重0.66g 孔径2.0mm	Q18	
450		3区 Y17 SD222	鉄製品 柄付刀子	255	22	身3柄12			重47.95g 柄 スキ材	N34	
451		不明	鉄製品 管	(151)	7	5			2点 重41.8g	N6	
452		寺中B遺跡 4-2区 土土	勾玉	28	17	9			滑石 重4.74g 片面穿孔 孔径1.0mm	G15	
453		寺中B遺跡 4-2区 SD28	管玉	21	5	5			変質流紋岩 重0.44g 孔径1.0mm	G22	
454		寺中B遺跡 4-2区 SD28	管玉	(13)	5	5			変質流紋岩 重0.27g 孔径1.0mm	G23	
455	寺中B遺跡 4-2区 SD28	勾玉 未成品	17	12	5			翡翠 重1.31g	N18		
456	果費分C区 大河跡	石錘	90	54	45				E303		
457	果費分C区 大河跡	不明	33	47	10			重9.24g 自然滓か	T419		
458	果費分C区 大河跡	不明	35	7	6			重1.91g 自然滓か	T420		
459	果費分C区 大河跡	鉄製品 刀子	(125)	18	3			重11.01g	T417		
460	2区 Y12 SD240	鉦	60	53	21			重93.86g	T418		
461	2区 Y12 SD240	鉄製品 鏝	(104)	16	3			重9.39g	T415		
462	2区 SD240	鉄製品 刀子	(116)	23	3			重21.32g	T413		
463	2区 包含層	銭 元龜通寶	25.2	25.5	1.1			重3.51g 孔長6.1×6.1mm	E192		
464	2区 包含層	銭 皇宗通寶	25.2	25.2	1.2			重3.66g 孔長6.3×6.5mm	E193		

※法量欄の ( ) は現存値を示している。

第4表 石製品・金属製品・骨観察表





図版	番号	遺構	器種	法量(mm)			遺存度	備考	実測番号	図版	番号	遺構	器種	法量(mm)			遺存度	備考	実測番号	
				長	幅	厚								長	幅	厚				
39	677	2区 SD240	板棒状木製品	(184)	24	6	断片	針葉樹 板目	E281	41	722	2区 SD244	漆器 椀	器高(35)	底径80		底6/12	板目取 内外面黒漆	FJ203	
	678	2区 SD240	木製品 木沓	325	(81)	46	1/2	広葉樹 板目	FJ204		723	2区 AA9 SD303	棒状木製品	(440)	33	17	欠損	針葉樹 辺材 穿孔1	OH139	
	679	2区 SD240	不明木製品	(102)	(26)	9	断片	針葉樹 板目加工痕	E290		724	2区 AB6 SD303	棒状木製品	(332)	15	12	断片	針葉樹 辺材	E8	
	680	2区 Z14 SD240	漆器 蓋?	121	(108)	12	欠損	裏面に黒漆付着	FJ202		725	2区 AB6 SD303	棒状木製品	(353)	24	11	ほぼ完形	針葉樹 辺材	E6	
	681	2区 SD240	木製品 板材	(205)	99	48	欠損	広葉樹か 芯持材 加工工具痕明瞭	E300		726	2区 AA7 SD303	棒状木製品	(162)	34	33	欠損	針葉樹か 芯持材	T421	
	682	2区 SD240	木製品 鏝?	(155)	130	10	欠損	広葉樹 板目	T123		727	2区 AA9 SD303	棒状木製品	(127)	31	27	欠損	針葉樹 芯持材	E2	
	40	683	2区 SD244	棒状木製品	(770)	30	24	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工 片か		OH133	728	2区 AB6 SD303	棒状木製品	532	18	15	完形	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	E7
684		2区 SD244	棒状木製品	(614)	43	22	欠損	針葉樹 辺材 1辺施薄 先端施鋸加工	OH129	729	2区 AA8 SD303	棒状木製品	(261)	15	12	欠損	針葉樹か 辺材 先端施鋸加工	OH142		
685		2区 SD244	棒状木製品	627	(22)	18	欠損	針葉樹 辺材	OH130	730	2区 AA9 SD303	棒状木製品	(260)	17	11	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	OH140		
686		2区 SD244	杭状木製品	(531)	30	32	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	TM291	731	2区 AB6 SD303	棒状木製品	(206)	15	12	欠損	針葉樹 辺材 切断面あり	E9		
687		2区 SD244	棒状木製品	(249)	23	12	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工 断面楕円形	S175	732	2区 AA8 SD303	木製品 柄	(177)	71	36	断片	針葉樹か 芯持材	E3		
688		2区 SD244	棒状木製品	(248)	19	16	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	OH134	733	2区 AA8 SD303	不明木製品	122	32	15	ほぼ完形	針葉樹 木取不明 穿孔1 孔径15.0mm 紡織具か	SH201		
689		2区 SD244	棒状木製品	(216)	20	11	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工不明瞭	TM286	734	2区 AA7 SD303	板状木製品	(236)	26	6	欠損	針葉樹 板目 施薄加工2箇所 穿孔2 孔径4.5mm	T434		
690		2区 SD244	棒状木製品	(232)	20	18	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	TM285	735	2区 AB9 SD303	板棒状木製品	(163)	23	9	欠損	針葉樹 板目	E4		
691		2区 SD244	棒状木製品	(291)	23	24	断片	針葉樹 芯持材 先端施鋸加工 片か	FJ128	736	2区 AA7 SD303	棒状木製品	176	10	9	完形	針葉樹 辺材 両端加工	T423		
692		2区 SD244	棒状木製品	(168)	12	6	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	TM293	737	2区 AA7 SD303	棒状木製品	178	15	8	完形	針葉樹 辺材 両端加工	T422		
693		2区 SD244	棒状木製品	(357)	24	22	欠損	針葉樹 辺材 先端加工	S177	738	2区 AA8 SD303	木製品 部材	(282)	97	(47)	断片	針葉樹 辺材	OH141		
694		2区 SD244	棒状木製品	(250)	18	10	欠損	針葉樹 辺材 削り加工	TM287	739	2区 AA9 SD303	木製品 斎串	358	25	6	完形	針葉樹 板目	M3		
695		2区 SD244	棒状木製品	195	17	17	完形	針葉樹 辺材 先端に加工 雑具部材	S173	740	2区 AB6 SD303	棒状木製品	(260)	23	21	欠損	針葉樹 辺材 切り折りか	E5		
696		2区 SD244	木製品 片	(176)	(16)	(16)	断片	針葉樹 芯持材 先端加工	S178	741	2区 AA9 SD303	木製品 円形板	183	82	8	完形	針葉樹 椀目 桶底板	M1		
697		2区 SD244	棒状木製品	(291)	8	8	欠損	針葉樹 辺材	OH138	742	2区 Z8 SD303	木製品 円形板	178	103	7	ほぼ完形	針葉樹か 椀目 桶底板	E1		
698		2区 SD244	棒状木製品	(147)	19	7	欠損	針葉樹 辺材 篋状 斎串か	OH135	743	2区 AA8 SD303	木製品 円形板	162	165	10	完形	針葉樹 椀目 木釘孔2 曲物底板 744と同一か	F2		
699		2区 SD244	棒状木製品	(179)	11	12	断片	針葉樹 芯持材 片か	FJ130	744	2区 AA8 SD303	木製品 曲物側	172	176	26	完形	樹皮残 穿孔あり 743と同一か	F1		
700		2区 SD244	木製品 片	(269)	13	10	欠損	針葉樹 芯持材 先端加工	FJ129	745	2区 AB7 SD303	木製品 円形板	310	263	10	完形	針葉樹 椀目 木釘孔7 桶底板か	S199		
701		2区 SD244	棒状木製品	(230)	(32)	15	断片	針葉樹 辺材 挟り加工あり 部材か	S169	746	2区 AA9 SD303	棒状木製品	(311)	34	29	欠損	針葉樹 辺材	M2		
702		2区 SD244	杭状木製品	(507)	44	39	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	TM292	747	2区 AA7 SD303	板状木製品	(324)	50	21	欠損	針葉樹か 辺材 穿孔3残 孔径6.0mm	T435		
703		2区 SD244	木製品 木沓	(122)	(80)	(59)	断片	針葉樹 板目取 底部厚15.0mm	S176	748	2区 AB9 SD303	板状木製品	(432)	208	50	欠損	針葉樹か 板目 加工痕明瞭	M4		
704		2区 SD244	木製品 円形板	(300)	(64)	10	断片	針葉樹 椀目 縁部削り加工	FJ127	749	2区 AB8 SD303	木製品 井戸側板	(819)	183	32	欠損	広葉樹か 板目 挟り加工・穿孔あり	TM284		
705		2区 SD244	木製品 片?	(201)	(25)	(25)	断片	針葉樹 芯持材 胴部凹み加工	S179	※法量欄の ( ) は現存値を示している。										
706		2区 SD244	木製品 容器?	384	(210)	65	欠損	広葉樹 板目取 椅子か	SH200											
707		2区 SD244	木製品 枠?	(306)	78	68	欠損	広葉樹 辺材 横椀か	FJ205											
708		2区 SD244	棒状木製品	(235)	25	25	欠損	針葉樹か 芯持材 柄か	OH168											
709		2区 SD244	木製品 多叉鋸	396	289	22	一部欠損	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 柄一部欠損	FJ132											
710		2区 SD244	木製品 火鑪臼	(308)	26	25	断片	針葉樹 辺材 板目 使用痕3 棒状木製品2次利用	TM290											
41		711	2区 SD244	棒状木製品	(466)	45	18	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸痕	TM289										
		712	2区 SD244	板棒状木製品	(468)	16	7	欠損	針葉樹 板目	OH131										
		713	2区 SD244	板状木製品	(413)	55	10	欠損	針葉樹 板目	TM288										
		714	2区 SD244	杭状木製品	(335)	28	19	欠損	針葉樹 辺材 先端施鋸加工	TM294										
		715	2区 SD244	板状木製品	(95)	(48)	12	断片	針葉樹 椀目	OH136										
	716	2区 SD244	板状木製品	(214)	44	18	欠損	広葉樹か 板目 先端施鋸加工	S171											
	717	2区 SD244	棒状木製品	(208)	31	15	欠損	針葉樹 辺材 孔3 孔径8.0mm 雑具部材か	S170											
	718	2区 SD244	棒状木製品	(273)	22	8	欠損	針葉樹 辺材 断面U字状	S172											
	719	2区 SD244	板状木製品	227	90	9	ほぼ完形	針葉樹 板目 挟り・穿孔2 雑具部材か	S174											
	720	2区 SD244	不明木製品	129	36	18	完形	針葉樹 椀目 穿孔4 雑具部材	SH203											
	721	2区 SD244	不明木製品	174	52	17	完形	針葉樹 椀目 穿孔3 雑具部材	SH202											

第5表 木製品観察表 (3)

## 第5章 樹種同定記録

今回報告となった柄付刀子(591:第6表記載遺物番号3)と木製品の多又鋏(709:第6表記載遺物番号4)について、(株)東都文化財保存研究所に樹種同定を依頼した。結果は以下のとおりである。

### 樹種同定結果:

#### 1. 試料

試料は井戸杵、刀子、柄振(多又鋏)の3点(試料番号1-3)である。柄振は、身に着脱式の柄が付着しているが、木目を観察した限りでは同じ樹種と考えられたため、身についてのみ樹種同定を実施する。なお、試料番号1はPEG処理が終了した状態であった。

#### 2. 分析方法

各木製品のうち、試料番号2の刀子は、ほぼ完形品であるが、柄の側面に柾目と板目が確認できたことから、直接切片を採取したが、木口面は加工面で切片が採取できなかった。その他の2点は、試料番号1は破損部、試料番号3は接合面を利用して木片を採取した。このうち、試料番号1は、樹種同定を行う上でPEGを除去する必要があるため、温水に浸してPEGを溶脱させた。これらの木片は、剃刀の刃を用いて3断面(木口、柾目、板目)の徒手切片を作成した。

切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊藤(1992)およびwheeler他(1998)を参考にした。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にした。

#### 3. 結果

樹種同定結果を第6表に示す。木製品は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹1種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

第6表 木曳野遺跡群の樹種同定結果

番号	遺物番号	遺物名	樹種
1	1	井戸杵	スギ
2	3	刀子(柄)	スギ
3	4	柄振	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

#### ・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don)スギ科スギ属

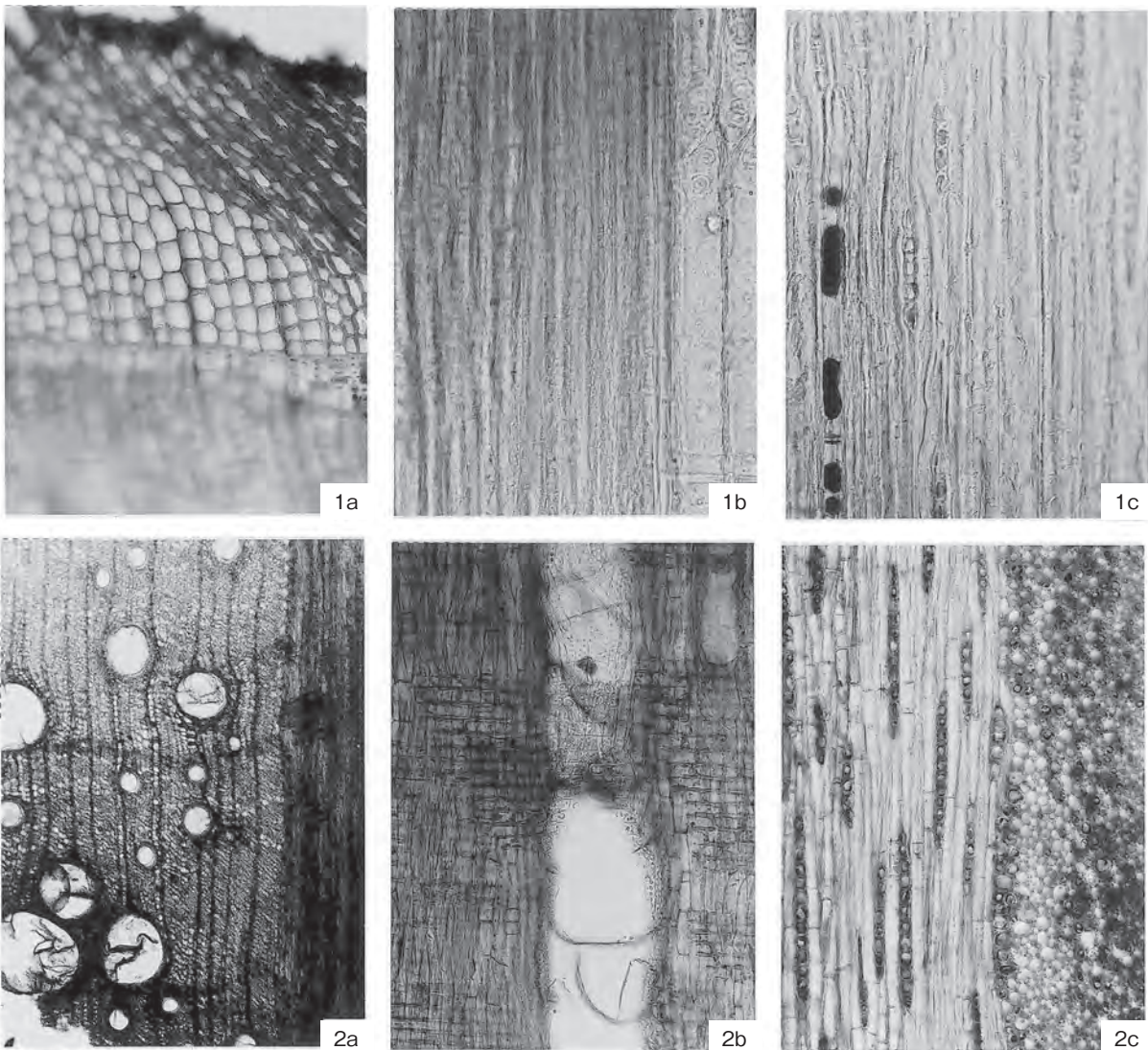
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*)ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で報社方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

【引用文献】

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所  
 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社  
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 1998  
 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社  
 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. 1989 *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]



1. スギ (試料番号 1)  
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号 3)  
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m:2a  
 200 $\mu$ m:1a・2b,c  
 200 $\mu$ m:1b,c

第 42 図 畝田・寺中遺跡の木材

## 第6章 総括

本遺跡は金沢市の西部臨海地区に所在する縄文時代以降の複合遺跡で、石川県埋蔵文化財センターと本市埋蔵文化財センターによって広い面積が調査されており、多くの成果が上がっている。既刊書によると、本遺跡は弥生時代・古墳時代と中核的な様相を呈している。ここでは、本報告で扱った4区の遺物出土傾向について、若干の検討を試みたい。

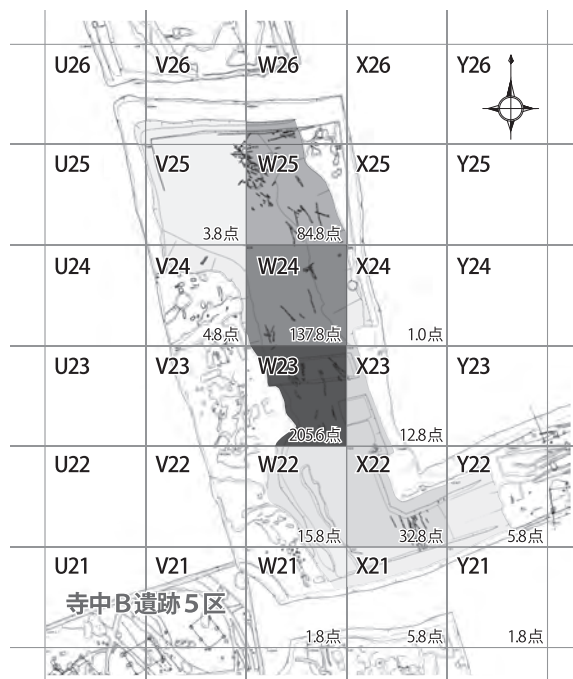
第43図は本書に掲載した大河跡出土遺物をグリッド毎に整理し、出土量の多寡をアミで示したものである。アミの色が濃い箇所ほど遺物出土量が多いことを示す。本来、該当範囲の土量によって出土量の補正を行うべきであるが、困難であったため面積での補正に留めていることをご了承願いたい。

対象としたものは土器・土製品・石製品・骨・木製品で、出土地点が不明なもの、グリッド記載に誤記があると判断したものは除外した。総点数は514点となる。出土地点が「北半」「中央畦」「南半」となっているものについては、「中央畦」はW23・X23に跨る地点に設けたため案分し当該グリッドに含め、「北半」は中央畦を含む北のグリッドに案分し、「南半」は同様に南のグリッドに案分した。「W・X22」についてはW22・X22にそれぞれ案分している。出土した全遺物を対象にしているわけではなく、10mグリッドという精度からも正確な傾向を示すものではないが、概ねの傾向は把握できると考えた。

遺物の集中がみられるのはW25～W23の範囲で、W23が最も多い。次いでW24・W25の順となるが、大河跡の西岸となるV25・V24からの出土は少ない。また、W22とX22の比較では、やはり西岸からの出土は少ない傾向にある。これは発掘調査担当者の当時の見解とも一致するようである。大河跡出土遺物の大半は古墳時代前期の範疇に収まっており、調査区周辺でこの時期の遺構が確認されているのは大河跡の南西わずか15mに位置する寺中B遺跡5区(木曳野遺跡群Ⅱ既報)であるが、大河跡の出土傾向と併せみると関連性が薄いように感じられる。4区大河跡出土遺物の中心を占める古墳時代前期に該当する集落は、未調査となっている4区東側に所在する可能性が考えられよう。

SD210からは11世紀～12世紀代の土師器・陶磁器が出土している。これは既報の主幹線2区SD240、主幹線3区SD222と同一の溝で、前時代の主幹線4区大河跡、既報の主幹線2区SD303・SD240・SD244、主幹線3区SD201と重複して北上する。第7図の大河跡断面図が示すように、大河跡が機能を失った後の再整備が明確である。調査前の主幹線の位置には灌漑用の主要用水が存在しており(木曳野遺跡群Ⅰ第3図参照)、時代を変えても同地に流路を配置する、当該地の土地利用の一端を示す遺構といえよう。

※次ページに『木曳野遺跡群Ⅰ』に掲載した1/100および1/250・1/300の航空測量図版図葉割を示した。当該書では座標が混乱しているため、『木曳野遺跡群Ⅱ』から本書に至るまで、報告対象とする遺構が遺跡の中でどこに位置するかが判別しづらいつとされるため、本書第2図と併せてご活用いただければと思う。



第43図 遺物の出土傾向



第 44 図 『木曳野遺跡群 I』 図葉割





調査区全景(北から撮影：手前から4区・3区・2区)



大河跡土層断面(北東から)



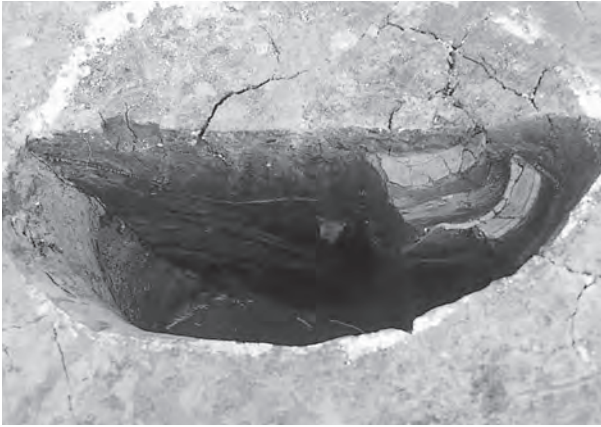
SD210土層断面(北から)



SD200



SK201土層断面(西から)



P200土器出土状況(西から)



SK200土器出土状況(北西から)



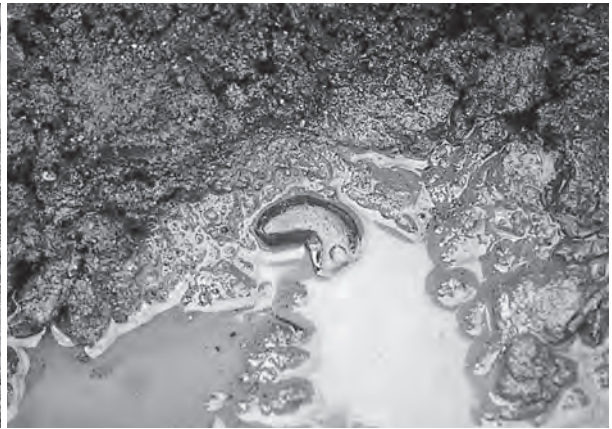
大河跡 トレンチ掘削状況



大河跡 土器出土状況



大河跡 木錘出土状況



大河跡 勾玉出土状況



SD210 鉄製刀子出土状況



作業風景



SD210出土遺物(11・13・15～17・19・20・26～29・31)



39



41



44



45・46



土錘(67～77・335)



82



85



101



102



128



129



132



137



138



143



144 · 146



155



157 · 156



縄文土器 (173 ~ 175)



181



183



209



193



231



232



233



239



255



手捏土器 (244・245・247 ~ 252・273)



237



298



小壺 (263 ~ 272・274・275)



302



303



310



326



336



341



344



346



352



349



359



372



351



376



387



357 · 358



369



370



388



瓦塔 (399)



結齒式豎櫛 (465)



元豐通寶・皇宋通寶 (636・637)



石器類 (417・419・411・424)



玉類 (431 ~ 437・586・594 ~ 597)



鞍 (570・571)



骨 (445 ~ 448)



鉄製刀子・銅鏃・鉄鏃 (438・439・441・634)



柄付刀子 (591)

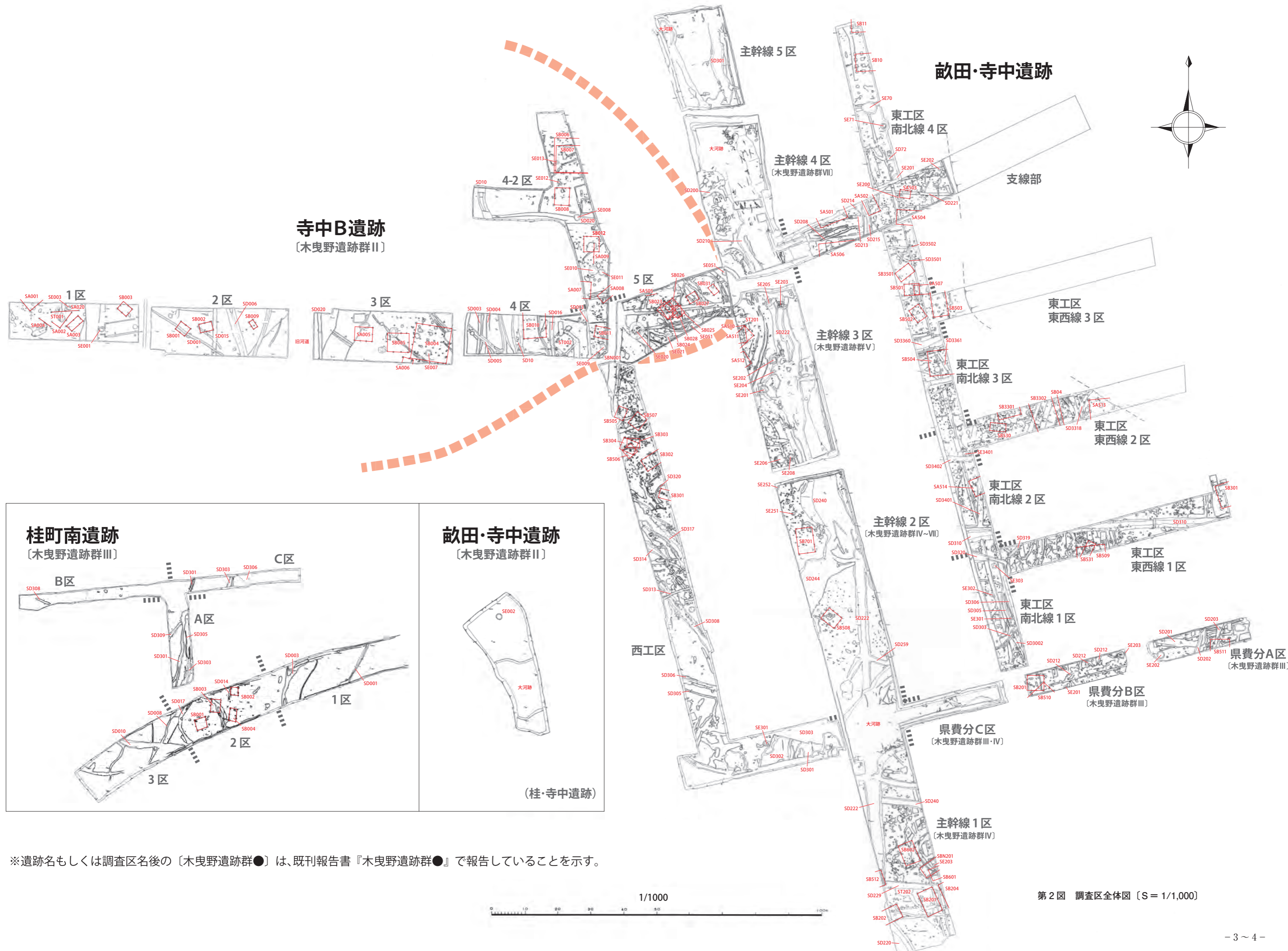


多又鋏 (709)



【引用・参考文献】

- 上原真人編 1993 『木器集成図録 近畿原始編』 奈良国立文化財研究所
- 内堀信雄 1989 「須恵器甕にみられる叩き目文について」『北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』  
北陸古代土器研究会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『北陸の古代土器研究の現状と課題』 北陸古代土器研究会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 平凡社
- 向井裕知 2005 「消費遺跡での土器・陶器の組合せおよび貿易陶磁の編年 北陸」『中世窯業の諸相 資料集』  
「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 石川考古学研究会 1996 『石川県考古資料調査・集成事業報告書 武器・武具・馬具Ⅰ』
- 石川考古学研究会 1999 『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農耕具』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡Ⅰ』
- 石川県教育委員会 2005 『金沢市畝田西遺跡群Ⅱ』
- 石川県教育委員会 2006 『金沢市畝田西遺跡群Ⅲ』
- 石川県教育委員会 2006 『金沢市畝田西遺跡群Ⅳ』
- 石川県教育委員会 2006 『金沢市畝田東遺跡群Ⅲ』
- 石川県教育委員会 2012 『小松市千代・能美遺跡』
- (財)鳥取研教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡Ⅲ』
- 金沢市教育委員会 1993 『上荒屋遺跡(二)』
- 金沢市 2003 『大桑ジョウデン遺跡Ⅰ』
- 金沢市 2004 『大桑ジョウデン遺跡Ⅱ』
- 金沢市 2006 『寺中B遺跡Ⅵ 桂町南遺跡Ⅰ 畝田・寺中遺跡Ⅲ -木曳野遺跡群Ⅰ-』
- 金沢市 2007 『寺中B遺跡Ⅶ・畝田・寺中遺跡Ⅳ -木曳野遺跡群Ⅱ-』
- 金沢市 2008 『桂町南遺跡Ⅱ 畝田・寺中遺跡Ⅴ -木曳野遺跡群Ⅲ-』
- 金沢市 2010 『畝田・寺中遺跡Ⅵ -木曳野遺跡群Ⅳ-』
- 金沢市 2010 『中屋サワ遺跡Ⅴ -縄文時代編-』
- 金沢市 2012 『畝田・寺中遺跡Ⅶ -木曳野遺跡群Ⅴ-』
- 金沢市 2013 『畝田・寺中遺跡Ⅷ -木曳野遺跡群Ⅵ-』
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』



※遺跡名もしくは調査区名後の〔木曳野遺跡群●〕は、既刊報告書『木曳野遺跡群●』で報告していることを示す。

第2図 調査区全体図〔S = 1/1,000〕



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	いしかわけんかなざわし うねだ・じちゅういせき9							
書名	石川県金沢市 畝田・寺中遺跡区							
副書名	- 木曳野遺跡群 -							
巻次	Ⅶ							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	293							
編著者名	景山和也							
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒920-0374 石川県金沢市上安原町南60番地 TEL (076) 269-2451							
発行年月日	西暦2014年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うねだ じちゅう 畝田・寺中 いせき 遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 じちゅうまち 寺中町、 うねだ 4ちょうめ 畝田4丁目	172014	県01499 市029	36° 36' 33"	136° 42' 33"	20020715 ～20020920 20030602 ～20031128 20040502 ～20041029	約13,760㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
畝田・寺中 遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・ 奈良・平安・鎌倉・ 室町	建物、井戸、 土坑、溝、川	土師器・須恵器、 陶磁器、石製品、 木製品、金属製品		川跡から古墳時代の 土器・木器が多 数出土		
要 約	木曳野遺跡群Ⅳで報告した古墳時代、奈良・平安時代の河川跡の続きやその他の遺構の報告を行った。主幹線4区は古墳時代前期～中期の河川跡が中心で、その他平安時代末から鎌倉時代の溝がみついている。							

石川県 金沢市  
**畝田・寺中遺跡区**  
 - 木曳野遺跡群Ⅶ -  
 (『金沢市文化財紀要』293)

発行日 平成26(2014)年3月28日

発行者 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)  
 〒920-0374 石川県金沢市上安原南60  
 TEL (076) 269-2451

印刷 株式会社 栄光プリント